

道徳基盤に関する構成要素と行動の志向  
性・傾向性の関係性についての検討  
—日本人を対象とした調査から—

日本大学大学院総合社会情報研究科  
博士後期課程 総合社会情報専攻

令和2年度

指導教員 田中 堅一郎

71171001 青山 美樹



## 目次

序論 .....	1
道徳的領域の考え方 .....	1
道徳基盤理論とは何か .....	3
6つの道徳基盤領域 .....	5
モラル・ファンデーションズ・クエスチョネア (MFQ) .....	6
日本語版モラル・ファンデーションズ・クエスチョネア (MFQ) .....	8
モラル・ファンデーションズ・ビネット (MFVs) .....	8
<b>研究 1 MFQ の概念構造の検証 .....</b>	<b>9</b>
目的 .....	9
方法 .....	9
調査 1 2016 年調査 .....	10
調査 2 2018 年調査 .....	10
調査 3 2020 年調査 .....	11
研究 1 の考察 .....	14
<b>研究 2 MFVs の作成と概念構造の検証 .....</b>	<b>16</b>
目的 .....	16
調査 4 予備調査 .....	16
調査 5 日本語版 (翻訳版) MFVs の検証 .....	20
検証 1 探索的因子分析 .....	21
検証 2 確認的因子分析 .....	26
検証 3 外部基準との相関 .....	27
調査 6 日本語版 (改訂版) MFVs の検証 .....	28
検証 4 探索的因子分析 .....	30
検証 5 確認的因子分析 .....	32
検証 6 外部基準との相関 .....	33
調査 7 日本語版 (改訂版) MFVs の検証 (2 回目) .....	33
検証 7 探索的因子分析 .....	34

検証 8  確認的因子分析 .....	36
検証 9  外部基準との相関 .....	36
研究 2 の考察 .....	37
<b>研究 3  道徳基盤と政治的志向，個人志向／集団志向 .....</b>	<b>39</b>
目的 .....	39
方法 .....	39
研究 3 の結果 .....	40
検証 10  政治的志向 .....	40
検証 11  相互独立的－相互協調的自己観 .....	44
検証 12  縦型／横型－集団主義・個人主義 .....	45
研究 3 の考察 .....	46
<b>研究 4  道徳基盤と個体の志向性・傾向性 .....</b>	<b>48</b>
目的 .....	48
方法 .....	48
調査 8  援助規範意識と道徳基盤 .....	51
検証 13  援助規範意識と道徳基盤 .....	51
検証 14  援助規範意識と道徳基盤の下位概念 .....	52
調査 9  公正感受性，公正世界観念と道徳基盤 .....	54
検証 15  公正感受性，公正世界観念と道徳基盤 .....	54
検証 16  公正感受性，公正世界観念と道徳基盤の下位概念 .....	55
調査 10  国民意識（ナショナル・アイデンティティ）と道徳基盤 .....	59
検証 17  愛国心・国家主義と道徳基盤 .....	59
検証 18  愛国心・国家主義と道徳基盤の下位概念 .....	60
検証 19  愛国心・国家主義，道徳基盤と政治的志向 .....	61
調査 11  嫌悪感受性と道徳基盤 .....	63
検証 20  嫌悪感受性と道徳基盤 .....	63
検証 21  嫌悪感受性と道徳基盤の下位概念 .....	64

検証 22 嫌悪感受性, 道徳基盤と政治的志向 .....	66
研究 4 の考察 .....	68
総合考察 .....	<b>69</b>
研究の限界と今後の研究課題 .....	75
利益相反の開示について .....	77
謝辞 .....	78
引用文献 .....	79
付録 .....	84



## 序論

道徳性の重要性は、それが社会に生きる人びとのとるべき行動を導く一つの重要な動機となり、社会における人びとの安定した共存と文化的発展を可能にしているところにある(青山,2019a)。人間は他の動物には類をみない広大で複雑な社会に生きることを選択した。そのなかで道徳性は、社会のなかにもみ存在する社会的動物としての人間あるべき姿を示し(青山,2019a)、他の動物とは異なる文化的な生きものとして人間を人間たらしめている(Graham, Haidt, Koleva, Motyl, Iyer, Mojcik, & Ditto, 2013)ある種の特性としてみることが出来る。それゆえ、古くギリシャ時代から人間は道徳性を特に重要なものと考え、その本質がどのようなものであるのか、どのような意味を持つのかを、さまざまな見地から追究してきた。

近年、道徳心理学の領域では、複数の構成要素から全体の姿をとらえる方法論を用いて、道徳性というものの本質をとらえようとしている。さらに、道徳性を構成する要素のそれぞれに対する個体毎の感受性(sensitivity)の強さの違いから、個体毎に異なる志向性あるいは傾向性をとらえ、さらに、個体行動を左右する観念形態(イデオロギー)の違いを説明できるのではないかと(Graham *et al.*, 2013)と考えられるようになった。

一方、道徳性の構成要素とはどのようなものであって、どのような概念構造によって説明できるのか。そもそも、道徳性とは普遍的なのか、可変的なものであるのか。道徳性に関するこのような根源的な問題について、数多くの議論がなされ、今日においてもさまざまな提案や見解が出されている。米国で発表された道徳基盤理論(Graham *et al.*, 2013)は、そのような議論に大きな一石を投じ、その後世界各国で数々の追試や学際研究の拡がりをもたらした。

本研究は、道徳基盤理論の考え方にに基づき、提案されている複数の道徳的価値から説明される概念構造について、日本人を標本として検証していくとともに、道徳性の構成要素をとらえ、さらにそれらを個体の志向性や傾向性の観点から説明していこうとするものである。そのなかで特に重要なこととして考えるのは、本研究の結果が、単なる先行研究の追試という意味だけでなく、道徳基盤理論が唱える道徳性の文化的発展という観点からも、特に日本人における道徳的価値の構成概念としてとらえていくところに重要な意味があると考えられる。本研究の結果は、道徳基盤理論のさまざまな議論の一つの裏付け、あるいは反証を提供することにつながる可能性があり、またあるいは道徳性における日本人に特有の特性としてとらえることができるのではないかと考えられた。本研究では、さらにその構成概念をとらえる調査票を作成し、その妥当性について検証していくことも試みた。

### 道徳的領域の考え方

道徳性の研究は、道徳的判断と意思決定を主題とし(Graham, Nosek, Haidt, Iyer, Koleva, & Ditto, 2011)、それらはかつて、危害(harm)と、権利(rights)を含む公正(fairness)の問題に集約され、道徳というものが、援助すること(危害を与えないこと)と、公正を守ること(不正行為を行わないこと)に関する問題としてとらえられていた(Graham *et al.*, 2011)。Kohlberg(1969, 1971)は正義(justice)の概念から、Gilligan(1982)は保護(care)の概念から、道徳性を説明しようとした。Turiel(1983, p.3)は、個人が他者とのよりよい関係

性を築くうえで重要と考える、正義 (justice), 権利 (rights), 福祉 (welfare) を道徳的領域とし、それ以外の、たとえば、愛国心 (patriotism), 権威 (authority), 純潔 (chastity) といった領域は、社会的通念、あるいは個人選択の領域である (Turiel, Hildebrandt, & Wainryb, 1991) とみなしていた (Graham *et al.*, 2011)。道徳哲学においても、道徳性は他者を傷つけること (harm) を抑える規則や行動規範 (e.g., Gert, 2005; Singer, 1979) として説明されてきた (Graham *et al.*, 2011)。Kohlberg (1976) の道徳性発達段階説 (Kohlberg's stages of moral development) では、権威 (authority), 忠誠 (loyalty), 伝統 (tradition) といった集団水準の道徳的価値が道徳的判断の根拠としてあったものの、それは正義 (justice) の理解に基づく脱慣習的な推論としてあり、「法と秩序」の精神の一部であると考えられていた (Graham *et al.*, 2011)。

一方、古来の道徳哲学では、ギリシャからインド、日本に至るまで、社会は美德 virtue に基づくより広い道徳的領域によって説明されると考えられていた (Graham *et al.*, 2011)。慈悲 (benevolence) や公平さ (fairness) といった個人水準の価値とともに、社会秩序 (social order), 権威 (authority), 義務 (duty), 家族やグループへの忠誠心 (loyalty), そして、さまざまな肉欲を制御すること (control carnal desires) に集団水準の価値があると強調されていた (Larue, 1991; Shweder, Much, Mahapatra, & Park, 1997)。しかし 19 世紀以降、哲学が美德倫理から離れ、西洋思想のなかで探究されるようになったことで、道徳的領域が徐々に狭まった (Pincoffs, 1986) と考えられている (Graham *et al.*, 2011)。

道徳的判断の異文化調査では、Turiel の道徳的領域の定義が、教育を受けた政治的に自由な西欧人の間では説明できたが、インド (Shweder, Mahapatra, & Miller, 1987) や、ブラジルおよび米国の低層階級 (Haidt, Koller, & Dias, 1993), 米国の保守派 (Graham, Haidt, & Nosek, 2009; Haidt & Hersh, 2001; Jensen, 1998) においては、個人に基づく危害 (harm) や公平さ (fairness) の領域を超えた、階層的役割 (hierarchical role) や、地域や国家といった所属集団への忠誠 (loyalty), 精神的な純粋さ (spiritual purity) や墮落 (degradation) の抑制に関する道徳的領域があり、人びとは、危害 (harm) や福祉 (welfare), 公平さ (fairness) や正義 (justice) といった個人水準の道徳的価値と、家族や共同体、国家といった社会制度 (social institutions) を守ること、義務 (duty), 服従 (obedience), 尊重 (respect), 伝統 (traditions) を守ること、神や宗教的規範 (God or religious norms), 良識 (decency), 魂 (soul) を含む、心の純粋さ (purity) を守ること、といった集団水準の道徳的価値を合わせ持っていることが報告された (Graham *et al.*, 2011)。

Shweder *et al.* (1997) は、インドで行った道徳的言説の分析から、人びとが依拠する「自律 autonomy」, 「共同体 community」, 「神性 divinity」という 3 つの倫理を提示した。「自律 Autonomy」は、危害 (harm), 権利 (rights), 正義 (justice) といった規制的概念から説明される、自己の裁量や自由を守ろうとする個人主義的な倫理であると説明されている (p.138)。「共同体 community」は、義務 (duty), 階層 (hierarchy), 相互依存 (interdependency), 魂 (soul) といった規制的概念から説明される、個人の固有性 (アイデンティティ) を形成している社会集団の一部としての、自己の立場や役割への誠実さを守ろうとする倫理であるとされている (p.138)。そして「神性 Divinity」は、聖なる秩序 (sacred order), 自然の秩序 (natural order), 伝統 (tradition), 神聖さ (sanctity), 罪業 (sin), 汚染 (pollution)



といった規制的概念から説明される、物事の神聖さ、あるいは自然の摂理につながっている自己の精神性を守ろうとする倫理であると考えられている (p.138)。

Haidt and Kesebir (2010, p. 800) は、道徳が文化、階級、政治、および時代によって異なるとき、特定の道徳的領域を超えた、機能によって説明される道徳体系があるとし、「道徳体系とは、価値 (values)、美德 (virtues)、規範 (norms)、実践 (practices)、アイデンティティー (identities)、制度 (institutions)、技術 (technologies) の組み合わせであり、利己心を抑制、制御することで、社会生活を可能にしているものである」と定義した。この機能的アプローチによって、個人の内的要素だけでなく、より社会的な側面から道徳的価値をとらえ、さらに、それぞれの社会が構成する道徳体系をとらえることが可能になったと考えられた (Graham *et al.*, 2011)。

近年、道徳的領域は危害 (harm) や公正 (fairness) の問題よりも広い範囲にあると考えられるようになった。Schwartz (2007) は、「重要性において異なり、個人やグループの生活の指針となる超状況的な目標 (原則)」と定義される価値観から、道徳的領域をとらえようとした。道徳性が福祉 (welfare) や公平性 (fairness) の観点から説明されている場合でも、そこには他の多くの道徳的価値が存在している。たとえば、互惠性 (reciprocity)、チームや部族への忠誠心 (loyalty)、肉体的・精神的な純粋さ (purity) といった数々の価値があったとしても、それらは Schwartz (2007) の因子構造には現れなかった。これは、この研究が西洋人を対象として理論的な探索的因子分析を始めたことに起因していた可能性があると考えられており、異なる思想を持つ社会においては、異なる道徳的価値、とりわけ集団水準における道徳的領域が異なる構造として示される可能性があると考えられた。

### 道徳基盤理論とは何か

道徳基盤理論は、Graham *et al.* (2013) によって提案された、道徳性の概念構造とその機能についての推論である。道徳心理学における社会的、認知的な見方に加え、人類学、進化学、発達学、社会学、倫理学、動物行動学、等の幅広い領域の知見を取り入れ構築されている (青山, 2018)。そのなかで道徳基盤理論が提案しているのは、道徳性の生得性、文化・社会的学習、直観性、そして多元性という4つの特性である。

**生得性** 生得性は、「経験より前に準備されていること」と定義されている。Marcus (2004) は、「本性が最初の草稿を提供し、そしてそれは経験によって書き換えられる」と述べた。サルや人間を含む動物には、ヘビを恐れやすい傾向性 (DeLoache & LoBue, 2009) や、苦みを避け甘味を嗜好する傾向性 (長谷川, 2018)、生まれたばかりの子どもが初めて聞く言語よりも母親が話す言語をより注意深く聞こうとする傾向性 (長谷川, 2018)、社会化以前の子どもが無償で他者を助けようとする傾向性 (長谷川, 2018)、などがあり、道徳基盤理論では、道徳性をこうした傾向性と同様のものとしてとらえ、人間が社会における多様な社会的課題を、迅速かつ効果的に解決するための認知的適応として進化してきた (Tooby & Cosmides, 1992; Pinker, 1997) メカニズムであると考えている (Graham *et al.*, 2013)。そして、舌が甘味を感じたとき脳が快感情をもたらすように、公平な交換が快感情をもたらし、不公平感が不快感情をもたらすような知覚モジュールを備え、快・不快という感情や情動を生起させ、それらが道徳的判断において重要な役割を果たしていると考えられるようになった (青山, 2018)。

**文化的学習** 道徳性はまた、生得的でありながら、それぞれが生きる社会的・文化的環境に適応し発展していくものであると考えられている。人間は他者に共感し、他者を助けようとする傾向性を持って生まれてくるが、成長とともに、他者との関係性やさまざまな社会制度を通じて、その道徳性はより多様で複雑なものになっていくという (Graham *et al.*, 2013)。人間には「学習本能」(Sperber, 2005)があり、子どもは現実的な経験を通して、新しい知識や考え方、行動パターンなどを獲得し、生得的な基盤を上手く活用できるようになっていく (Graham *et al.*, 2013) と考えられている。道徳性の基盤もまた、それが出来上がった道徳性そのものではなく、その基盤のうえに、それぞれの環境および文化が、現実場面での道徳的判断の基準をつくりあげ、道徳性の普遍的かつ不完全な最初の草稿は、特定の文化的背景や習慣のなかで書き込まれ、書き換えられていく (Graham *et al.*, 2013) と考えられるようになった。

**直観性** 道徳性はまた、直観によってもたらされていると考えられている。道徳基盤理論では、道徳的直観を「検索、考察、推論の段階を経て結論づけられたという意識的な自覚が全くない、他者の性質や行動についての好・嫌、善・悪といった評価的な感情が、意識状態、あるいは意識の辺境で突如出現すること」(Haidt & Bjorklund, 2008, p.188, modified from Haidt, 2001, in Graham *et al.*, 2013) と説明している。人間の道徳的な判断は、情動を含む「直観」と理性的な「思考」という二つの異なる認知能力のあいだに、ある種の認知プロセスとしてあるという (Graham *et al.*, 2013)。そのなかで直観は思考ではなく認知の一部であり、人間の心を動かしているのは、原理に基づく論考よりもより感性による判断に近く、その迅速かつ自動的なプロセスであると考えられた (Graham *et al.*, 2013)。そして、この直観は、文化的背景のなかで発達し形成されるものであり、その後続く思考や関心によって修正されたり異なる方向に導かれながらも、その源流は共通の普遍的な概念としてあると考えられている (Graham *et al.*, 2013)。

**多元性** 人間は進化の過程で、絶え間なく発生するさまざまな社会的課題を繰り返し解決してきたなかで、複数のモジュールからなる生来的な精神構造を獲得したと考えられている (Graham *et al.*, 2013)。道徳基盤理論では、それらを道徳基盤と呼び、それぞれの基盤が活動する対象領域を道徳基盤領域と呼んだ。そして、それぞれの適応的課題から形成された異なる道徳的判断領域があると仮定され、道徳性は一元的なものではなく、多元的な機能としてとらえられている (Graham *et al.*, 2013)。現在、道徳基盤理論のなかで提案されているのは、「保護 care／危害 harm」「公正さ fairness／欺瞞 cheating」「内集団への忠誠 loyalty／裏切り betrayal」「権威への敬意 authority／破壊 subversion」「神聖さ sanctity／墮落 degradation」「自由 liberty／抑圧からの解放 oppression」の6つの道徳基盤領域である。

これらは、適応的課題 (adaptive challenge)、根源的誘因 (original triggers)、習慣的誘因 (current triggers)、特徴的な感情 (characteristic emotions)、関連する善行 (relevant virtues) の5つの要因によって説明され、さらに、一般化された規範的基準 (common in third-party normative judgments)、無意識の情動的評価 (automatic affective evaluations)、文化的広汎性 (culturally widespread)、生得的具有の根拠 (evidence of innate preparedness)、進化的モデル (evolutionary model)、の5つの基準に基づき、さまざまな研究から得られた知見を根拠として提案されている。しかし、これらの6つの道徳基盤領域は最終的に結論づけられた

ものではなく、今後の研究の発展によって追加や修正もありうると説明されている (Graham *et al.*, 2013)。

## 6つの道徳基盤領域

保護／危害 (care/harm; 以下, Care という) の基盤は、「我が子を保護し世話することで苦しみや飢えから守る」という適応的課題と根源的な誘因から獲得されてきたと考えられている。他者の苦痛をいち早く知覚し、保護に結びつけるモジュールを獲得することで、個体における種の存続を有利にし、種族としての競争力をも高めることができたと考えられた (青山, 2018)。現実社会では、人を殺したり、傷つけたり、苦痛を与えることはいけない、という基本的な道徳感情 (金井, 2015) であるとされる。他者への思いやりや共感といった感情に基づいていると考えられ、弱者に対する同情や、危害をもたらす者への怒りとしても表されるとされている (Graham *et al.*, 2013)。文化的には、例えば仏教文化のなかでは、この基盤に関連づけられる「徳」や「善」が特に高く評価され、個体のなかに同化されていると考えられている (Graham *et al.*, 2013)。

公正さ／欺瞞 (fairness/cheating; 以下, Fairness という) の基盤は、「相互協力の恩恵に不利益をもたらす不正や欺瞞をいち早く見分け、排除する」という適応的課題と根源的な誘因から獲得されてきたと考えられている (青山, 2018)。あらゆる社会的動物は非ゼロサムの交換と関係性の維持に常に直面し (Graham *et al.*, 2013)、そのなかで不正や欺瞞をいち早く察知するモジュールを獲得することで、個体の優位性を高めることを可能にしたと考えられている (青山, 2018)。現実社会では、正義や信頼を欺いたり、比例配分における不公平や不平等をもたらす者には因果応報が望まれ、罰が与えられるべき、と考える道徳感情として扱われる (金井, 2015) とされている。

内集団への忠誠／裏切り (loyalty/betrayal; 以下, Loyalty<sup>1</sup> という) の基盤は、「集団への脅威に対処するため結束し、これを維持する」という適応的課題と根源的な誘因から獲得されてきたと考えられている (青山, 2018)。人間以外の霊長類が、階層や支配をめぐる群れの内外で争う (de Waal, 1982) のと同様に、人間においても生き残りをかけた部族や集団間の争いを経て、争いに有利となる結束力の高い集団を維持するべく、先ず個体の機能が働くことで、個体を勝ち組の一員として残しやすくする (Graham *et al.*, 2013) と考えられた。現実社会では、自分が属する集団のなかで義務を全うし貢献することを重要と考える道徳感情であり、国家や会社、チーム等に対する誇りや忠誠として表されるとともに、規範を破った裏切者に対する制裁として表されることもあるとされている (青山, 2018)。

権威への敬意／破壊 (authority/subversion; 以下, Authority という) の基盤は、「階層制社会のなかで有利な協力関係を形成する」という適応的課題と根源的な誘因から獲得されてきたと考えられている (青山, 2018)。多くの霊長類は階層 (ヒエラルキー) に基づき集団を維持しており、その複雑な社会の関係性のなかで、上下との有益な関係を築き、階層を上手く操ることができるようなセンスを有する個体は、適切に反応したり感知できない個体に比べて有利である (De Waal, 1982; Fiske, 1991) と考えられた。現実社会では、社会的秩序のためには上下関係が尊重され、階級や地位により分相応に振る舞うことが重要と

---

<sup>1</sup> Loyalty (内集団への忠誠) は当初 Ingroup と呼ばれ、そのため多くの先行研究でも Ingroup として説明されている。本研究のなかではこれらを併用していく。

考える道徳感情であり、警察や裁判所といった社会的権威や、会社の社長や上長、家庭の家長といった権限ある立場に対して示されるもので、畏敬や恐れといったかたちで表されることもあるとされている（青山, 2018）。

神聖さ／墮落（sanctity/degradation; 以下、Sanctity<sup>2</sup>という）の基盤は、「さまざまな汚染環境から集団を防御し、病や死をもたらすと考えられる危険を忌避する」という適応的課題と根源的な誘因から獲得されてきたと考えられている（青山, 2018）。免疫システムのような経験に先立つ反応を即座に生起させる機能を持つ個体は、一つ一つの事象を個々に判断しなければならない個体よりも有利であったと考えられた（Graham *et al.*, 2013）。現実社会では、異質な食物や性を禁忌し、貞節や欲望を節制することに価値を置く道徳感情であるとされている（青山, 2018）。特徴的な「嫌悪（Disgust）」の感情は、強力な適応的課題に対する一つの適応としてとらえられ（Oaten, Stevenson & Case, 2009; Rozin, Haidt, & McCauley, 2008）、嫌悪や行動の免疫システムは、入植者や異常な性的嗜好を持つ者といった新しい課題に対して道徳的反応を強化していったと考えられている（Faulkner, Schaller, Park, & Duncan, 2004; Navarrete & Fessler, 2006; Rozin *et al.*, 2008）。また、肉体的・精神的な「穢れ」を忌避する価値観から、この基盤が宗教的価値観とも深く関わっていると考えられ、特に神道や仏教にみられる自制や清浄さといった徳を追究する精神文化のなかでは、より高い価値が置かれていると考えられている（青山, 2018）。

自由／抑圧からの解放（liberty/oppression; 以下、Liberty という）の基盤は、「常に支配と抑圧の動機を持つ個体の本性に対抗し、平等を維持する」という適応的課題と根源的な誘因から獲得されてきたと考えられている（青山, 2018）。Boehm（1999）は「人間は階層制に向かう生得的な傾向を持っているが、長い進化の過程で、グループを支配しようとする覇権者を集団で統制することで、平等を維持しようとするようになった」と考えた。支配と抑圧の試みを察知し、それに対する怒りの感情を生起させる機能を獲得する（Graham *et al.*, 2013）ことで、集団における平等性を確保しやすくし、集団を安定的に維持することを可能にしたと考えられている（青山, 2018）。現実社会では、不当な権力の濫用や専制の一線を踏み越えようとする者の兆候を察知し、反抗体制を築こうとする、怒りを伴う道徳感情であるとされている（青山, 2018）。

### モラル・ファンデーションズ・クエスチョネア

道徳基盤理論の構成概念をとらえる調査票として提案されたのが、モラル・ファンデーションズ・クエスチョネア（Moral Foundations Questionnaire; 以下、MFQ という）（Graham *et al.*, 2011; 金井, 2015）と、道徳基盤不可侵領域尺度（Moral Foundations Sacredness Scale; 以下、MFSS という）（Graham & Haidt, 2012; 青山, 2016）である。なかでも MFQ は、今日までもっとも広範に用いられている調査票で、提案されている 6 つの道徳基盤のうちの Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctity の 5 つの領域のみで構成されている。それぞれの道徳基盤領域に基づく理論的な道徳原理に対する是認の度合いを自己評価させることで、個体毎に異なるそれぞれの領域への依拠の違いがとらえられ、それによって個体の志向性の違いが示されると考えられた。

<sup>2</sup> Sanctity（神聖さ）は当初 Purity と呼ばれ、そのため多くの先行研究でも Purity として説明されている。本研究のなかではこれらを併用していく。

MFQ は、第一部の「道徳との関連度 relevance」と、第二部の「道徳的な判断 judgment」の 2 つのサブスケールで構成され、個人の道徳的関心 (relevance) から理論的な道徳性の側面を評価し、さらに、社会における現実的な道徳的判断 (judgment) の側面を評価することで、2 つの異なる側面から道徳性をより確かなものとしてとらえることが目指された。2 つの道徳性の差異を最小化し、最小限の内部一貫性と、想定している 5 つの基盤を表現しているとみなされた、より均整のとれた現在のモデルが採用された (Graham *et al.*, 2011) と説明されている。そしてこの 5 因子モデルが、世界のあらゆる地域においても、社会・文化を超えた道徳の概念を最も適切に映し出しているモデルであることが示されているとしている。

さらに、第一部の「道徳との関連度 relevance」では、Care は「精神 emotionally」「弱者 weak」「残虐 cruel」、Fairness は「待遇 treated」「不当 unfairly」「権利 rights」、Loyalty は「愛国 love country」「裏切り betray」「忠誠 loyalty」、Authority は「敬意 respect」「伝統 traditions」「無秩序 chaos」、Sanctity は「品位 decency」「嫌悪 disgusting」「神聖 divine」、の下位概念を、第二部の「道徳的な判断 judgment」では、Care は「思いやり compassion」「動物 animal」「殺人 kill」、Fairness は「公平 fairly」「正義 justice」「裕福 rich」、Loyalty は「歴史 history」「家族 family」「チーム team」、Authority は「尊敬 kid respect」「性役割 sex roles」「兵士 soldier」、Sanctity は「不快 harmless disgusting」「異常 unnatural」「純潔 chastity」、の下位概念を持つものとして説明されている。

また、Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctity の 5 つの道徳基盤のうち、Care と Fairness の 2 つの基盤を合わせて Individualizing foundations (個人の尊厳)、Loyalty, Authority, Sanctity の 3 つの基盤を合わせて Binding foundations (義務などへの拘束)、という 2 つの大きな上位概念にまとめられる (Graham *et al.*, 2011; 金井, 2015) とされている。そして、道徳基盤理論では、Individualizing foundations (個人の尊厳) の基盤には、政治的志向としてのリベラル派がより高い価値をおき、Binding foundations (義務などへの拘束) の基盤には保守派がより高い価値をおく傾向がみられ、それらは国や文化的背景を超え安定した傾向として現れているとして、これらの 2 つの基盤から、個人の政治的志向、すなわちイデオロギーを予測することができると主張されている。

Nilsson & Erlandsson (2015) は、スウェーデン語版 MFQ を用いて検証を行った。その結果、確認的因子分析では 5 因子モデルの適合度が相対的にみて最も高かったが、適合度そのものはそれほど高くはなかったと報告した。また、Individualizing foundations と Binding foundations の 2 つの上位概念も、政治的イデオロギーとの関係において先行研究を再現し、特に Fairness と Authority の概念が最も高い予測因子となっていたと報告された。

Davies, Sibley, & Liu (2014) がニュージーランド人を対象に行った MFQ の調査からも、確認的因子分析によって 5 因子構造の適合度が妥当な高さであったことが報告された。

Kim, Kang, & Yun (2012) は、韓国語版 MFQ を用いて韓国人を対象に検証を行った。その結果、5 因子モデルの適合度は低かったが、2 つの上位概念と政治的イデオロギーとの関係においては先行研究を再現し、そのパターンは米国人と同じであることが示されたものの、政治的イデオロギーによる差異は米国人ほど大きくなかったと報告された。

このようにさまざまな言語で行われている先行研究では、確認的因子分析によって5因子構造の適合度が低いながらも再現されていたが、それぞれの因子が示す影響力は国によって大きく違っていることが示されていた。

### 日本語版モラル・ファンデーションズ・クエスチョネア

MFQの日本語版については、村山・三浦(2019)によってその信頼性および妥当性が検証された。日本語版MFQの全体的な構造は、原版と類似しているが、原版ほど妥当性は高いとはいえず、5因子からなる概念構造が、他の因子構造と比較して相対的に最も高い適合度を示していたものの、原版ほどには5つの基盤間に明確な差異は認められず、特にSanctityの項目の信頼性が低かったとされている。一方、2つの上位概念については、原版同様、政治的志向との一定の関係性が示されたと報告されている(村山・三浦, 2019)。

### モラル・ファンデーションズ・ビネット

道徳基盤理論の構成概念をとらえるもう一つの調査票として、Clifford, Iyengar, Cabeza, & Sinnott-Armstrong (2015)によって提案されたのが、モラル・ファンデーションズ・ビネット(Moral Foundations Vignettes: 以下、MFVsという)である。この調査票の特徴は、具体的な第三者の不道徳的な態度に対する直観的な判断を引き出し、MFQではとらえられなかった複数の異なる判断領域<sup>3</sup>を明確に示すことを可能にしているところにある。

MFQが5つの道徳基盤領域(Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctity)における理論的な道徳原理について自己報告的に評価させるのに対し、MFVsは6つの道徳基盤領域(Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctity, Liberty)を逸脱した第三者の態度をコンパクトにシナリオのなかに描写し、それをいま目撃しているようにイメージさせ、直感的に評価させることで、その道徳的判断が依拠している判断領域が示されると考えられた。そして、道徳的判断領域がより直観的な反応からとらえられるようになることで、心理学研究のみならず神経科学研究など幅広い分野で汎用可能になると考えられた。

MFVsのシナリオは、脳神経画像処理に適するよう、ある程度の複雑性を持たせており、また、“You see-”で始まる定型書式を用いた構文構成、領域を区分するのに相応しく、かつ直接的に説明しない語彙の選択、Flesch-Kincaidの指標に照らした長さの制限など、さまざまな媒介変数の統制を行い、領域間の差異の最小化が図られた。さらに、鮮明なイメージと容易な想起、過去の知識や政治的態度に左右されない判断対象にも配慮された。

Clifford *et al.* (2015)では、作成したシナリオが直観を引き出すの十分な刺激を備えていることと、MFVsの概念構造および外的基準(MFQ, MFSS)に照らした妥当性について検証した。これらの結果、Clifford *et al.* (2015)では、社会的通念(social norms)(以下、Social Normsという)とは異なる7つの因子(Clifford *et al.* (2015)ではCareの領域をemotionalとphysicalの2つの領域に区分)が確認され、想定された道徳基盤領域とほぼ合致していることが確認された。また、MFQ, MFSSとも著しく対応していると評価され、総合的にみて、MFVsが道徳基盤理論の構成概念を測る尺度としての妥当性を有していると結論づけられた。

<sup>3</sup> Graham *et al.* (2011)においても、日本語版では村山・三浦(2019)や北村(2019)においても、探索的因子分析からは5つの因子はとらえられていない。

## 研究 1

### 目的

研究 1 の目的は、道徳基盤理論の構成概念について検証することである。2016 年、2018 年、2020 年の 3 回にわたり、日本人を対象に行った調査結果から、道徳基盤理論で想定されている概念構造が、日本人においても認められるか否かについて考察した。

### 方法

本調査の実施およびデータの収集は、都内の調査会社（株式会社日本能率協会総合研究所）に委託し、インターネット上でオンライン調査として行った。調査票はマトリックス形式で、設問には評定法で選択回答させ、これをデータとして収集した。

**対象** 標本は、前述の調査会社に登録されている日本全国の 100 万人を超えるモニターパネル<sup>4</sup>のなかから、18 歳以上 60 歳以下の、日本で育った日本人について、性別（男／女）および年齢層（18～20 歳／21～30 歳／31～40 歳／41～50 歳／51～60 歳）の割合が平均化されるよう配慮して無作為に抽出した。また、2016 年、2018 年、2020 年のそれぞれの調査対象者は、重複しないよう配慮した。

**材料** フェイスシートでは、性別（男／女）（2 択）と年齢層（20 歳以下／21～30 歳／31～40 歳／41～50 歳／51～60 歳）（5 択）について確認した。

日本語版 MFQ は、金井版（金井, 2015）の和訳の一部を本人および原著者の Graham と Haidt の許可を得て著者が変更したもの（青山, 2016）を使用した（付録 1）。

MFQ は、第一部の「道徳との関連度 *relevance*」の 15 項目（以下、MFQ1 という）と、第二部の「道徳的な判断 *judgment*」の 15 項目（以下、MFQ2 という）から構成され、各項目群に 1 問ずつ操作チェック<sup>5</sup>が加えられている。原版に基づき、MFQ1 では、「ある人の行為が倫理的に正しいか間違っているかを判断するとき、次のような判断材料はあなたの考え方にどの程度関係しますか」という教示に続き示された各項目の内容について、「1: まったく関係しない（判断にまったく無関係）」から「6: 極めて関係する（判断に最も重要）」の 6 段階で評価させた。MFQ2 では、「次の文を読んで、あなたがどの程度同意するかを、以下の 6 段階から選んでください」という教示に続き示された各項目の内容について、「1: まったく同意しない」から「6: 非常に同意する」の 6 段階で評価させた。

設問は、MFQ1、MFQ2 のそれぞれのなかで無作為に提示し、順序効果の回避に配慮した。

**分析** 収集したデータは、Graham *et al.* (2011) および村山・三浦 (2019) を参考に、MFQ1 と MFQ2 を合わせて、まず 2 因子に固定して探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転、負荷量 .4 以上を基準とする）を行い、続いて構造方程式モデリング（SEM）を用いて確

---

<sup>4</sup> 同社に登録されているモニターパネルの職業比は、有職者：約 50%，専業主婦：約 16%，パート・アルバイト：約 12%，学生：約 13%，その他：約 9%，となっている。

<sup>5</sup> 先行研究に倣い、MFQ1 の操作チェックでは、「数学が得意であったかどうか」という設問に対し、「5: とても関係する」「6: 極めて関係する（判断に最も重要）」という“強く”「関係する」とする評価を与えた回答を切り捨てた。MFQ2 の操作チェックでは、「悪い行いよりは、良い行いをしたほうがよいに決まっている」という設問に対し、「1: まったく同意しない」「2: あまり同意しない」「3: どちらかといえば同意しない」という 3 つのいずれかの「同意しない」という評価を与えた回答を切り捨てた。

認的因子分析（一般化最小二乗法）を行った。確認的因子分析では、5つの道徳基盤（Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctity）を想定した5因子構造（Model-I-5）、5つの道徳基盤の上位概念の2因子構造（Care, Fairnessを1因子、Loyalty, Authority, Sanctityを1因子と仮定）（Model-I-2a）、探索的因子分析の結果に基づくもう一つの上位概念2因子構造（Care, Fairness, Sanctityを1因子、Loyalty, Authorityを1因子と仮定）（Model-I-2b）、Shweder *et al.* (1997)に基づく3因子構造（Care, Fairnessを1因子、Loyalty, Authorityを1因子、Sanctityを1因子と仮定）（Model-I-3）、上位概念基盤と5つの道徳基盤からなる階層構造（Model-I-5ha）、およびもう一つの上位概念基盤と5つの道徳基盤からなる階層構造（Model-I-5hb）、との適合度を比較して評価した。その際、これらの6つのモデルについて、調査年（2016年、2018年、2020年）毎に、またMFQ1、MFQ2の2つのサブスケールを個別に検証した結果と、MFQ1とMFQ2を合わせて検証した結果での比較を行った。

### 調査1<sup>6</sup> 2016年調査

調査期間は、2016年8月26日から10月6日で、合計800の標本データを収集した。

**調査1の結果** 先ず800の標本データから、MFQの2問の操作チェックによって133のデータを無効とし、667（83.4%）のデータ（平均年齢；39.99歳）を採用した。

667のデータについて、2因子に固定して探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転、負荷量.4以上を基準とする）を行った（表1）。MFQ1のSanctityの項目は、先行研究ではLoyaltyやAuthorityと同じ第2因子に負荷を示していたが、本調査では第1因子に負荷を示していた。また、MFQ2のCareとFairnessの項目のほとんどは、第1因子にも第2因子にも高い負荷を示さず、MFQ2だけを見ると、明らかな2因子構造になっているとはいえない難かった。なお、2つの因子間の相関は $r=.55$ で、比較的高い相関<sup>7</sup>を示した。

次に、確認的因子分析（一般化最小二乗法）を行った（表2）。想定した5因子構造（Model-I-5）の適合性指標は必ずしも高いとはいえなかったが、2因子構造（Model-I-2aとModel-I-2b）、3因子構造（Model-I-3）、階層構造（Model-I-5haとModel-I-5hb）と比較して、適合度は相対的に最も高く、これはMFQ1とMFQ2を個別に分析した場合でも同様であった。

### 調査2<sup>8</sup> 2018年調査

調査期間は2018年9月14日から9月20日で、合計800の標本データを収集した。

**調査2の結果** 先ず800の標本データから、MFQの2問の操作チェックによって144のデータを無効とし、656（82.0%）のデータ（平均年齢；39.41歳）を採用した。

656のデータについて、調査1同様、2因子に固定して探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転、負荷量.4以上を基準とする）を行った（表1）。調査1の結果と同様、MFQ1のSanctityの項目が第1因子に負荷を示し、また、MFQ2のCareとFairness、さらにSanctity

<sup>6</sup> 調査1は、青山（2016）で実施されたものである。

<sup>7</sup> 相関係数 $r$ は、0は全く相関がないことを示し、1（正）あるいは-1（負）に近いほど相関が強いことを示す（ $-1 \leq r \leq 1$ ）。本研究では、.20未満はほとんど相関がない、.20～.40未満で低い相関がある、.40～.70未満で比較的高い相関がある、.70以上で高い相関がある、と評価した。

<sup>8</sup> 調査2は、青山（2019b）で実施されたものである。



の項目のほとんどがいずれの因子にも高い負荷を示さなかった。なお、2 因子間の相関は  $r=.37$  であった。

次に、確認的因子分析（一般化最小二乗法）を行った（表 2）。調査 1 の結果と同様、想定した 5 因子構造（Model-I-5）は、他の因子構造と比較して適合度は相対的に最も高く、MFQ1, MFQ2 を個別に分析した場合でも同様であった。

### 調査 3 2020 年調査

調査 3 は 2020 年 4 月 16 日から 5 月 31 日に実施し、合計 1,000 の標本データを収集した。

**調査 3 の結果** 先ず 1,000 の標本データから、MFQ の 2 問の操作チェックによって 176 のデータを無効とし、824（82.4%）のデータ（平均年齢；39.55 歳）を採用した。

824 のデータについて、調査 1 および調査 2 と同様に、2 因子に固定して探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転、負荷量 .4 以上を基準とする）を行った（表 1）。MFQ1 の Sanctity の項目が第 1 因子に負荷を示し、また、MFQ2 の Care と Fairness の項目のほとんどがいずれの因子にも高い負荷を示さず、明らかな 2 因子構造にはなっていないという結果は、調査 1 および調査 2 とほぼ同様であった。なお、2 因子間の相関は  $r=.47$  であった。

次に、確認的因子分析（一般化最小二乗法）を行った（表 2）。調査 3 においても、調査 1 および調査 2 と同様、想定した 5 因子構造（Model-I-5）は、他の因子構造と比較して適合度は相対的に最も高く、MFQ1, MFQ2 を個別に分析した場合も同様であった。

表 1 日本語版 MFQ による探索的因子分析の結果（2016, 2018, 2020 年調査）（研究 1）

			2016		2018		2020	
			$\chi^2$	df	$\chi^2$	df	$\chi^2$	df
			2168.027	376	1741.339	376	2146.297	376

			第 1 因子	第 2 因子	第 1 因子	第 2 因子	第 1 因子	第 2 因子
q1	Care/Harm	emotionally	<b>0.96</b>	-0.19	<b>0.81</b>	-0.13	<b>0.89</b>	-0.20
q2	Care/Harm	weak	<b>0.90</b>	-0.14	<b>0.76</b>	-0.02	<b>0.85</b>	-0.12
q3	Care/Harm	cruel	<b>0.92</b>	-0.24	<b>0.82</b>	-0.18	<b>0.79</b>	-0.14
q4	Fairness	treated	<b>0.70</b>	0.03	<b>0.63</b>	0.06	<b>0.61</b>	0.10
q5	Fairness	unfairly	<b>0.82</b>	-0.09	<b>0.83</b>	-0.14	<b>0.85</b>	-0.08
q6	Fairness	rights	<b>0.87</b>	-0.13	<b>0.75</b>	-0.10	<b>0.81</b>	-0.15
q7	Loyalty/Ingroup	love-country	0.10	<b>0.62</b>	0.05	<b>0.62</b>	0.05	<b>0.58</b>
q8	Loyalty/Ingroup	betray	0.38	<b>0.40</b>	<b>0.43</b>	0.30	0.34	<b>0.40</b>
q9	Loyalty/Ingroup	loyalty	0.36	<b>0.48</b>	0.36	<b>0.46</b>	0.25	<b>0.53</b>
q10	Authority	respect	0.22	<b>0.60</b>	0.23	<b>0.55</b>	0.13	<b>0.63</b>
q11	Authority	traditions	0.18	<b>0.60</b>	0.15	<b>0.52</b>	0.17	<b>0.58</b>
q12	Authority	chaos	<b>0.69</b>	0.12	<b>0.73</b>	-0.02	<b>0.72</b>	0.04
q13	Sanctity/Purity	decency	<b>0.52</b>	0.28	<b>0.58</b>	0.19	<b>0.49</b>	0.31
q14	Sanctity/Purity	disgusting	<b>0.84</b>	-0.08	<b>0.80</b>	-0.09	<b>0.76</b>	-0.03

q15	Sanctity/Purity	god	<b>0.57</b>	0.17	<b>0.53</b>	0.17	<b>0.44</b>	0.26
q16	Care/Harm	compassion	0.29	0.20	0.28	0.18	0.30	0.22
q17	Care/Harm	animal	<b>0.48</b>	0.00	0.33	-0.08	<b>0.43</b>	-0.06
q18	Care/Harm	kill	0.15	0.18	0.07	0.17	0.07	0.23
q19	Fairness	fairly	0.36	0.11	0.21	0.08	0.28	0.16
q20	Fairness	justice	0.27	0.33	0.28	0.19	0.23	0.31
q21	Fairness	rich	-0.06	0.24	-0.03	0.13	-0.11	0.37
q22	Loyalty/Ingroup	history	-0.12	<b>0.55</b>	-0.08	<b>0.46</b>	-0.07	<b>0.52</b>
q23	Loyalty/Ingroup	family	0.09	0.29	0.05	0.24	0.03	0.30
q24	Loyalty/Ingroup	team	-0.17	<b>0.55</b>	-0.17	<b>0.54</b>	-0.16	<b>0.63</b>
q25	Authority	kid-respect	-0.13	<b>0.70</b>	-0.17	<b>0.63</b>	-0.18	<b>0.73</b>
q26	Authority	sex-roles	0.03	<b>0.42</b>	0.03	0.26	-0.06	0.39
q27	Authority	soldier	-0.16	0.38	-0.20	<b>0.46</b>	-0.23	<b>0.53</b>
q28	Sanctity/Purity	harmless-disgusting	0.38	0.18	0.35	0.02	0.32	0.22
q29	Sanctity/Purity	unnatural	0.07	<b>0.46</b>	0.14	0.27	0.15	<b>0.44</b>
q30	Sanctity/Purity	chastity	-0.01	<b>0.57</b>	-0.02	<b>0.51</b>	0.03	<b>0.49</b>

因子相関行列	第1因子	第2因子	第1因子	第2因子	第1因子	第2因子
第1因子	1.00	0.55	1.00	0.37	1.00	0.47
第2因子	0.55	1.00	0.37	1.00	0.47	1.00

注1: 因子抽出法: 最尤法

注2: 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法 因子抽出: 2因子に固定

表2 日本語版 MFQ による確認的因子分析の結果 (2016年, 2018年, 2020年調査)

Year	Sample	MFQ	Item	Model	$\chi^2$	df	$\chi^2/df$	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	90% CI	AIC
2016	667	1	15	I-2a	427.97	89	4.81	0.91	0.88	0.49	0.08	0.07-0.08	489.97
2016	667	1	15	I-2b	448.17	89	5.04	0.91	0.88	0.46	0.08	0.07-0.09	510.17
2016	667	1	15	I-3	413.92	87	4.76	0.92	0.89	0.51	0.08	0.07-0.08	479.92
2016	667	1	15	I-5ha	389.19	84	4.63	0.92	0.89	0.54	0.07	0.07-0.08	461.19
2016	667	1	15	I-5hb	406.61	84	4.84	0.92	0.88	0.51	0.08	0.07-0.08	478.61
<b>2016</b>	<b>667</b>	<b>1</b>	<b>15</b>	<b>I-5</b>	<b>356.83</b>	<b>80</b>	<b>4.46</b>	<b>0.93</b>	<b>0.89</b>	<b>0.58</b>	<b>0.07</b>	<b>0.07-0.08</b>	<b>436.83</b>
2018	656	1	15	I-2a	380.26	89	4.27	0.92	0.90	0.49	0.07	0.06-0.08	442.26
2018	656	1	15	I-2b	379.39	89	4.26	0.92	0.90	0.49	0.07	0.06-0.08	441.39
2018	656	1	15	I-3	373.01	87	4.29	0.92	0.90	0.50	0.07	0.06-0.08	439.01
2018	656	1	15	I-5ha	368.84	84	4.39	0.93	0.89	0.50	0.07	0.07-0.08	440.84
2018	656	1	15	I-5hb	365.86	84	4.36	0.93	0.89	0.51	0.07	0.06-0.08	437.86
<b>2018</b>	<b>656</b>	<b>1</b>	<b>15</b>	<b>I-5</b>	<b>345.29</b>	<b>80</b>	<b>4.32</b>	<b>0.93</b>	<b>0.90</b>	<b>0.54</b>	<b>0.07</b>	<b>0.06-0.08</b>	<b>425.29</b>
2020	824	1	15	I-2a	466.05	89	5.24	0.92	0.90	0.49	0.07	0.07-0.08	528.05
2020	824	1	15	I-2b	465.25	89	5.23	0.93	0.90	0.49	0.07	0.07-0.08	527.25
2020	824	1	15	I-3	450.92	87	5.18	0.93	0.90	0.51	0.07	0.07-0.08	516.92

2020	824	1	15	I-5ha	444.41	84	5.29	0.93	0.90	0.52	0.07	0.07-0.08	516.41
2020	824	1	15	I-5hb	442.93	84	5.27	0.93	0.90	0.52	0.07	0.07-0.08	514.93
<b>2020</b>	<b>824</b>	<b>1</b>	<b>15</b>	<b>I-5</b>	<b>424.30</b>	<b>80</b>	<b>5.30</b>	<b>0.93</b>	<b>0.90</b>	<b>0.54</b>	<b>0.07</b>	<b>0.07-0.08</b>	<b>504.30</b>
2016	667	2	15	I-2a	296.84	89	3.34	0.94	0.92	0.55	0.06	0.05-0.07	358.84
2016	667	2	15	I-2b	287.10	89	3.23	0.94	0.92	0.57	0.06	0.05-0.07	349.10
2016	667	2	15	I-3	278.22	87	3.20	0.94	0.92	0.58	0.06	0.05-0.07	344.22
2016	667	2	15	I-5ha	287.51	84	3.42	0.94	0.92	0.56	0.06	0.05-0.07	359.51
2016	667	2	15	I-5hb	272.80	84	3.25	0.95	0.92	0.59	0.06	0.05-0.07	344.80
<b>2016</b>	<b>667</b>	<b>2</b>	<b>15</b>	<b>I-5</b>	<b>246.62</b>	<b>80</b>	<b>3.08</b>	<b>0.95</b>	<b>0.93</b>	<b>0.64</b>	<b>0.06</b>	<b>0.05-0.06</b>	<b>326.62</b>
2018	656	2	15	I-2a	346.04	89	3.89	0.93	0.91	0.46	0.07	0.06-0.07	408.04
2018	656	2	15	I-2b	339.23	89	3.81	0.93	0.91	0.48	0.07	0.06-0.07	401.23
<b>2018</b>	<b>656</b>	<b>2</b>	<b>15</b>	<b>I-3</b>	<b>321.05</b>	<b>87</b>	<b>3.69</b>	<b>0.94</b>	<b>0.91</b>	<b>0.51</b>	<b>0.06</b>	<b>0.06-0.07</b>	<b>387.05</b>
2018	656	2	15	I-5ha	337.77	84	4.02	0.93	0.90	0.47	0.07	0.06-0.08	409.77
2018	656	2	15	I-5hb	324.46	84	3.86	0.93	0.91	0.50	0.07	0.06-0.07	396.46
<b>2018</b>	<b>656</b>	<b>2</b>	<b>15</b>	<b>I-5</b>	<b>306.12</b>	<b>80</b>	<b>3.83</b>	<b>0.94</b>	<b>0.91</b>	<b>0.53</b>	<b>0.07</b>	<b>0.06-0.07</b>	<b>386.12</b>
2020	824	2	15	I-2a	366.59	89	4.12	0.94	0.92	0.53	0.06	0.06-0.07	428.59
2020	824	2	15	I-2b	340.28	89	3.82	0.95	0.93	0.57	0.06	0.05-0.07	402.28
2020	824	2	15	I-3	326.46	87	3.75	0.95	0.93	0.59	0.06	0.05-0.07	392.46
2020	824	2	15	I-5ha	361.59	84	4.30	0.94	0.92	0.53	0.06	0.06-0.07	433.59
2020	824	2	15	I-5hb	323.56	84	3.85	0.95	0.93	0.59	0.06	0.05-0.07	395.56
<b>2020</b>	<b>824</b>	<b>2</b>	<b>15</b>	<b>I-5</b>	<b>284.34</b>	<b>80</b>	<b>3.55</b>	<b>0.95</b>	<b>0.93</b>	<b>0.65</b>	<b>0.06</b>	<b>0.05-0.06</b>	<b>364.34</b>
2016	667	1+2	30	I-2a	1243.01	404	3.08	0.88	0.86	0.27	0.06	0.05-0.06	1365.01
2016	667	1+2	30	I-2b	1255.00	404	3.11	0.87	0.86	0.26	0.06	0.05-0.06	1377.00
2016	667	1+2	30	I-3	1228.07	402	3.05	0.88	0.86	0.28	0.06	0.05-0.06	1354.07
2016	667	1+2	30	I-5ha	1212.91	399	3.04	0.88	0.86	0.29	0.06	0.05-0.06	1344.91
2016	667	1+2	30	I-5hb	1219.45	399	3.06	0.88	0.86	0.29	0.06	0.05-0.06	1351.45
<b>2016</b>	<b>667</b>	<b>1+2</b>	<b>30</b>	<b>I-5</b>	<b>1177.31</b>	<b>395</b>	<b>2.98</b>	<b>0.88</b>	<b>0.86</b>	<b>0.32</b>	<b>0.06</b>	<b>0.05-0.06</b>	<b>1317.31</b>
2018	656	1+2	30	I-2a	1141.18	404	2.82	0.88	0.87	0.27	0.05	0.05-0.06	1263.18
2018	656	1+2	30	I-2b	1144.93	404	2.83	0.88	0.87	0.27	0.05	0.05-0.06	1266.93
2018	656	1+2	30	I-3	1132.89	402	2.82	0.89	0.87	0.28	0.05	0.05-0.06	1258.89
2018	656	1+2	30	I-5ha	1126.56	399	2.82	0.89	0.87	0.28	0.05	0.05-0.06	1258.56
2018	656	1+2	30	I-5hb	1127.26	399	2.83	0.89	0.87	0.28	0.05	0.05-0.06	1259.26
<b>2018</b>	<b>656</b>	<b>1+2</b>	<b>30</b>	<b>I-5</b>	<b>1110.02</b>	<b>395</b>	<b>2.81</b>	<b>0.89</b>	<b>0.87</b>	<b>0.29</b>	<b>0.05</b>	<b>0.05-0.06</b>	<b>1250.02</b>
2020	824	1+2	30	I-2a	1343.86	404	3.33	0.89	0.88	0.29	0.05	0.05-0.06	1465.86
2020	824	1+2	30	I-2b	1355.94	404	3.36	0.89	0.87	0.28	0.05	0.05-0.06	1477.94
2020	824	1+2	30	I-3	1319.65	402	3.28	0.89	0.88	0.30	0.05	0.05-0.06	1445.65
2020	824	1+2	30	I-5ha	1307.43	399	3.28	0.89	0.88	0.31	0.05	0.05-0.06	1439.43
2020	824	1+2	30	I-5hb	1312.09	399	3.29	0.89	0.88	0.31	0.05	0.05-0.06	1444.09
<b>2020</b>	<b>824</b>	<b>1+2</b>	<b>30</b>	<b>I-5</b>	<b>1286.61</b>	<b>395</b>	<b>3.26</b>	<b>0.90</b>	<b>0.88</b>	<b>0.32</b>	<b>0.05</b>	<b>0.05-0.06</b>	<b>1426.61</b>

## 研究 1 の考察

2016 年, 2018 年, 2020 年に行ったいずれの調査においても, 探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転, 負荷量 .4 以上を基準とする)の結果, 道徳基盤理論において想定されている 5 因子をとらえることはできなかった。しかし, 先行研究(Graham *et al.*, 2011)では 2 因子がとらえられていることから, 村山・三浦(2019)と同様に 2 因子を固定して探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転, 負荷量 .4 以上を基準とする)を行った結果, MFQ1 の「道徳との関連度 *relevance*」では, 2 因子はとらえられたものの, 第 2 因子への負荷が想定されていた *Sanctity* の項目や, q12 の *Authority* の「無秩序 *chaos*」の 1 項目が第 1 因子により高い負荷を示していた。また, MFQ2 の「道徳的な判断 *judgment*」では, 2 因子は明確にはとらえられず, *Care* や *Fairness* の項目のほとんどが, 2 つの因子にまちまちに低い負荷を示していた。その一方で, *Sanctity* の q28「不快 *harmless disgusting*」の項目は, 予想した第 2 因子ではなく, 第 1 因子により高い負荷を示していた。この結果は, MFQ1, MFQ2 ともに 2 因子構造を成すとした Graham *et al.* (2011) とは若干異なっており, また, MFQ1 の *Sanctity* の項目が *Care* や *Fairness* と同じ因子により高い負荷を示すといった傾向は, 村山・三浦(2019)にも若干表れていたが, 本研究ではより顕著に表れていた。

確認的因子分析では, 2016 年, 2018 年, 2020 年のいずれの結果においても, 想定した 5 因子構造(Model-I-5)の適合度が最も高かった。一般的な指標からみて適合度は全体的に高いとはいえないが, 比較した 2 因子構造(Model-I-2a, Model-I-2b), 3 因子構造(Model-I-3), 階層構造(Model-I-5ha, Model-I-5hb)よりも, 相対的にみて最も高い適合度を示していた。これは, MFQ 全体でみても, MFQ1, MFQ2 のそれぞれについてみても同様であったが, MFQ 全体でみたほうがより高い適合度が示され, また, 因子への負荷が小さい項目を削除した場合よりも, 30 項目全てを用いたほうが適合度はより高いという結果であった。

探索的因子分析の結果からは, MFQ1 の「道徳との関連度 *relevance*」と MFQ2 の「道徳的な判断 *judgment*」では, 異なる尺度で測定しているようにもとらえられたが, 確認的因子分析の結果からは, これらは単独で測定するよりも, 合わせて測定したほうが調査票としてより妥当性が高いということができ, この調査票が, Graham *et al.* (2011) が目指した, 道徳性をあえて複数の異なる側面からとらえ, 想定されている 5 つの道徳基盤の概念構造を映し出している, 非常に微妙な均衡のうえに成り立っている尺度であると考えることができた。

一方, 道徳基盤理論の構成概念については, Graham *et al.* (2013) でも言及されているように, *Fairness* に含まれる「平等 *equality*」の概念と *Care* の領域や, *Loyalty* と *Authority* の領域は, 共通の基盤に基づく部分的に異なる概念としてみることはできるのではないかと, といった議論もある。また, MFQ についても, 判断の拠りどころとしている道徳原理に対する是認の度合いと, 実際の具体的な行動を伴う道徳的な判断とは異なるものなのではないか(Haidt, 2001), あるいは, 「権威の姿」といった曖昧な対象から道徳的な判断を引き出そうとしているのではないか(Frimer, Biesanz, Walker, & MacKinlay, 2013, p.1053), 「貞節」といった概念についてのさまざまな議論があるなか領域を代表しているとはいえないのではないかと(Frimer *et al.*, 2013), またあるいは, 道徳律の観念的な分類を拡大しているだけなのではないかと(Clifford *et al.*, 2015), といった議論もある。研究 2 では, 青山(2016)

の結果をふまえ、道徳基盤理論の構成概念をさらに別の測度からとらえていく必要があるのではないかと考え、これを試みた。

## 研究 2

### 目的

研究 2 の目的は、研究 1 において MFQ では十分にとらえられなかった道徳基盤理論の構成概念、すなわち想定されている複数の道徳的判断領域を、新たな調査票からとらえていくことである。Clifford *et al.* (2015) によって作成された MFVs の日本語版を作成し、その構成概念妥当性の検証を行うとともに、この新たな調査票によってとらえられた日本人における道徳的判断領域の構造がどのようなものであるかを検討した。

### 調査 4<sup>9</sup> 予備調査

Clifford *et al.* (2015) と同様の手続きで、先ず日本語版 MFVs のそれぞれのシナリオに描写されている第三者の態度が、不道徳ととらえられている（「悪い」と評価されている）かどうかと、その評価基準が、想定している道徳的判断領域（道徳基盤領域）に基づいているかどうかについて検証した。

**方法** 調査 4 の調査期間は 2016 年 6 月 18 日から 7 月 22 日で、データ収集はオンラインで、REAS (Real-time Evaluation Assistance System; リアルタイム評価支援システム) を用いて行った。調査票はマトリックス形式で、それぞれの評定法で選択回答させ、これをデータとして収集した。

**対象** 標本は、都内の大学に在籍する社会人大学院生とその知人等 30 人で、その割合は、性別（男 15 人／女 15 人）、年齢層（18～20 歳 0 人／21～30 歳 2 人／31～40 歳 6 人／41～50 歳 16 人／51～60 歳 6 人）であった。

**材料** フェイスシートでは、性別（男／女）（2 択）と年齢層（20 歳以下／21～30 歳／31～40 歳／41～50 歳／51～60 歳）（5 択）について確認した。

日本語版 MFVs は、青山 (2016) で作成されたもので、90 のシナリオ（項目）で構成されている（付録 2）。翻訳にあたっては原版同様、媒介変数の統制に最大限配慮した。ただし、米国と日本では違法性の基準や、宗教的な背景、職業や動物など判断に関する対象物の日常性に違いがあり、いくつかのシナリオに手を加えた（例えば、リスを猫に変更、兵役を進学に変更、等）<sup>10</sup>。Clifford *et al.* (2015) は、6 つの道徳基盤領域のうち、Care の領域を Care (emotional) (精神的保護) と Care (physical) (身体的保護) の 2 つの領域に分け、7 つの基盤を仮定した。さらに Care (physical-animal) (動物に対する身体的保護) と Care (physical-human) (人間に対する身体的保護) の区別もしており、本調査票も原版どおりに区別して検証した。「次にあげるシナリオを実際あなたが目にしている光景として想像してください。そのうえで、それらの行為を以下の 5 段階で評価してください。」という教示に続き、それぞれのシナリオに描写されている第三者の不道徳的態度の「悪さ」の度合いを「1: まったく悪くない」から「5: きわめて悪い」の 5 段階で評価させた。

<sup>9</sup> 調査 4 は、青山 (2016) で実施されたものである。

<sup>10</sup> 翻訳は原著者の承諾を得て、外部の翻訳家に依頼し、back translation も行ったうえで、最終的なシナリオに筆者が手を加えた。

調査4では、この5段階評価のあとに、その評価の判断基準を、6つの道徳基盤領域を想定した「危害・保護」「公正・正義」「忠誠・義理」「敬意・尊重」「清純・高潔」「自由・自律」と「それ以外」の合わせて7つの選択肢から1つを選択させた。

日本語版 MFQ は、研究1で用いたものと同じものを用いた（付録1）。MFQ1では、「ある人の行為が倫理的に正しいか間違っているかを判断するときに、次のような判断材料はあなたの考え方にどの程度関係しますか」という教示に続き示された各項目の内容について、「1: まったく関係しない（判断にまったく無関係）」から「6: 極めて関係する（判断に最も重要）」の6段階で評価させた。MFQ2では、「次の文を読んで、あなたがどの程度同意するかを、以下の6段階から選んでください」という教示に続き示された各項目の内容について、「1: まったく同意しない」から「6: 非常に同意する」の6段階で評価させた。

調査票は、フェイスシート、日本語版 MFVs, 日本語版 MFQ の順番で提示し、最後にシナリオについての感想を求めた。

**分析** 日本語版 MFVs のシナリオに描かれた第三者の態度が不道徳であると評価（「悪い」と評価）されているかどうかと、その判断基準が想定する判断領域に基づいているかどうかを、項目毎の回答（「悪さ」の5段階評価と、道徳的判断基準の7択）の構成比率を算出し、その高さから評価した。シナリオの理解やイメージのしやすさについては、個々の感想から総合的に評価した。

#### 調査4の結果と考察

調査4の結果を表3に示す。90シナリオのうち23のシナリオ（全体の26%）で、回答者の半数以上が描写された態度を不道徳的とはみなしていなかった。なかでも Loyalty の領域では16のうち9つ（56%）、Sanctity の領域では10のうち6つ（60%）のシナリオで回答者の半数以上が「悪くない」と評価した。全体の約4分の1のシナリオが、回答者の半数以上から道徳的逸脱とみなされなかったことは、調査票の評価において根本的な問題として懸念を残した。

判断基準の選択では、Care (physical) (平均 66.7%)、Fairness (平均 88.6%)、Liberty (平均 73.9%)、Loyalty (平均 57.5%) のシナリオの半数以上で、想定した道徳基盤領域が選択されていた。一方、Authority (平均 45.2%) と Sanctity (平均 52.7%) のシナリオで想定した領域が選択されたのは半数かそれ以下で、Care (emotional) (平均 29.0%) ではほとんどのシナリオで想定した領域が選択されなかった。回答者からも判断基準の選択が難しかったという感想が複数あり、Clifford *et al.* (2015) で示されたような分類はなされなかった。

シナリオの理解やイメージのしやすさについては、日常性が低いと感じられたとする感想も複数あった。米国人を対象に作成されたシナリオのなかに、日本人には想像し難い非日常的な描写があったことや、Sanctity のシナリオなど非現実的な描写があったことが考えられた。

表3 日本語版 MFVs のシナリオの「悪さ」の評価と判断基準の分類 (n=30) (青山, 2016)

No.	道徳基盤	危害・保護	公正・正義	忠誠・義理	敬意・尊重	清純・高潔	自由・自律	その他	悪くない	悪い
v1	Care (e)	33.3%	23.3%	0.0%	3.3%	23.3%	16.7%	0.0%	3.3%	96.7%

v2	Care (e)	36.7%	0.0%	0.0%	3.3%	16.7%	40.0%	3.3%	33.3%	<b>66.7%</b>
v3	Care (e)	36.7%	0.0%	0.0%	0.0%	6.7%	<b>56.7%</b>	0.0%	3.3%	<b>96.7%</b>
v4	Care (e)	16.7%	3.3%	6.7%	10.0%	26.7%	6.7%	30.0%	33.3%	<b>66.7%</b>
v5	Care (e)	36.7%	3.3%	0.0%	6.7%	26.7%	16.7%	10.0%	16.7%	<b>83.3%</b>
v6	Care (e)	16.7%	10.0%	3.3%	16.7%	6.7%	43.3%	3.3%	0.0%	<b>100.0%</b>
v7	Care (e)	40.0%	0.0%	3.3%	6.7%	33.3%	16.7%	0.0%	3.3%	<b>96.7%</b>
v8	Care (e)	16.7%	10.0%	3.3%	3.3%	16.7%	43.3%	6.7%	13.3%	<b>86.7%</b>
v9	Care (e)	40.0%	0.0%	0.0%	3.3%	26.7%	26.7%	3.3%	10.0%	<b>90.0%</b>
v10	Care (e)	33.3%	3.3%	3.3%	3.3%	26.7%	23.3%	6.7%	26.7%	<b>73.3%</b>
v11	Care (e)	43.3%	3.3%	6.7%	10.0%	3.3%	13.3%	20.0%	13.3%	<b>86.7%</b>
v12	Care (e)	33.3%	3.3%	3.3%	3.3%	10.0%	16.7%	30.0%	23.3%	<b>76.7%</b>
v13	Care (e)	20.0%	0.0%	3.3%	6.7%	10.0%	13.3%	46.7%	<b>63.3%</b>	36.7%
v14	Care (e)	16.7%	0.0%	3.3%	6.7%	6.7%	23.3%	43.3%	<b>60.0%</b>	40.0%
v15	Care (e)	16.7%	3.3%	0.0%	6.7%	13.3%	23.3%	36.7%	<b>63.3%</b>	36.7%
v16	Care (e)	26.7%	3.3%	6.7%	3.3%	36.7%	23.3%	0.0%	0.0%	<b>100.0%</b>
v17	Care (p-a)	<b>56.7%</b>	13.3%	0.0%	0.0%	23.3%	6.7%	0.0%	0.0%	<b>100.0%</b>
v18	Care (p-a)	<b>70.0%</b>	3.3%	0.0%	0.0%	3.3%	20.0%	3.3%	0.0%	<b>100.0%</b>
v19	Care (p-a)	<b>63.3%</b>	0.0%	0.0%	0.0%	6.7%	20.0%	10.0%	10.0%	<b>90.0%</b>
v20	Care (p-a)	<b>83.3%</b>	0.0%	0.0%	0.0%	3.3%	13.3%	0.0%	3.3%	<b>96.7%</b>
v21	Care (p-a)	<b>66.7%</b>	0.0%	0.0%	0.0%	3.3%	20.0%	10.0%	13.3%	<b>86.7%</b>
v22	Care (p-a)	<b>70.0%</b>	0.0%	0.0%	0.0%	3.3%	13.3%	13.3%	20.0%	<b>80.0%</b>
v23	Care (p-a)	<b>76.7%</b>	0.0%	0.0%	0.0%	6.7%	16.7%	0.0%	0.0%	<b>100.0%</b>
v24	Care (p-a)	<b>66.7%</b>	0.0%	0.0%	0.0%	16.7%	13.3%	3.3%	3.3%	<b>96.7%</b>
v25	Care (p-h)	<b>70.0%</b>	3.3%	0.0%	0.0%	0.0%	26.7%	0.0%	0.0%	<b>100.0%</b>
v26	Care (p-h)	43.3%	3.3%	0.0%	13.3%	3.3%	6.7%	30.0%	<b>56.7%</b>	43.3%
v27	Care (p-h)	<b>66.7%</b>	0.0%	0.0%	0.0%	3.3%	20.0%	10.0%	10.0%	<b>90.0%</b>
v28	Fairness	0.0%	<b>93.3%</b>	3.3%	0.0%	0.0%	0.0%	3.3%	3.3%	<b>96.7%</b>
v29	Fairness	0.0%	<b>93.3%</b>	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	6.7%	3.3%	<b>96.7%</b>
v30	Fairness	0.0%	<b>80.0%</b>	6.7%	6.7%	0.0%	0.0%	6.7%	36.7%	<b>63.3%</b>
v31	Fairness	0.0%	<b>80.0%</b>	0.0%	6.7%	0.0%	0.0%	13.3%	20.0%	<b>80.0%</b>
v32	Fairness	0.0%	<b>100.0%</b>	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.3%	<b>96.7%</b>
v33	Fairness	0.0%	<b>96.7%</b>	0.0%	3.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	<b>100.0%</b>
v34	Fairness	0.0%	<b>66.7%</b>	0.0%	3.3%	0.0%	0.0%	30.0%	40.0%	<b>60.0%</b>
v35	Fairness	0.0%	<b>93.3%</b>	6.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	<b>100.0%</b>
v36	Fairness	0.0%	<b>86.7%</b>	3.3%	3.3%	0.0%	0.0%	6.7%	16.7%	<b>83.3%</b>
v37	Fairness	0.0%	<b>86.7%</b>	13.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	<b>100.0%</b>
v38	Fairness	3.3%	<b>86.7%</b>	0.0%	0.0%	3.3%	6.7%	0.0%	0.0%	<b>100.0%</b>
v39	Fairness	0.0%	<b>100.0%</b>	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	<b>100.0%</b>
v40	Liberty	0.0%	23.3%	3.3%	0.0%	0.0%	<b>60.0%</b>	13.3%	40.0%	<b>60.0%</b>
v41	Liberty	0.0%	3.3%	6.7%	0.0%	0.0%	<b>53.3%</b>	36.7%	<b>66.7%</b>	33.3%



v42	Liberty	3.3%	3.3%	3.3%	3.3%	3.3%	<b>80.0%</b>	3.3%	20.0%	<b>80.0%</b>
v43	Liberty	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	<b>100.0%</b>	0.0%	3.3%	<b>96.7%</b>
v44	Liberty	3.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	<b>93.3%</b>	3.3%	3.3%	<b>96.7%</b>
v45	Liberty	0.0%	23.3%	3.3%	6.7%	0.0%	<b>63.3%</b>	3.3%	6.7%	<b>93.3%</b>
v46	Liberty	0.0%	0.0%	0.0%	3.3%	3.3%	<b>76.7%</b>	16.7%	23.3%	<b>76.7%</b>
v47	Liberty	3.3%	6.7%	0.0%	0.0%	3.3%	<b>66.7%</b>	20.0%	<b>56.7%</b>	43.3%
v48	Liberty	3.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	<b>83.3%</b>	13.3%	26.7%	<b>73.3%</b>
v49	Liberty	0.0%	0.0%	3.3%	0.0%	3.3%	<b>80.0%</b>	13.3%	<b>66.7%</b>	33.3%
v50	Liberty	0.0%	6.7%	3.3%	13.3%	3.3%	<b>56.7%</b>	16.7%	<b>53.3%</b>	46.7%
v51	Authority	3.3%	3.3%	30.0%	20.0%	3.3%	13.3%	26.7%	40.0%	<b>60.0%</b>
v52	Authority	3.3%	0.0%	6.7%	43.3%	0.0%	40.0%	6.7%	10.0%	<b>90.0%</b>
v53	Authority	0.0%	3.3%	33.3%	<b>50.0%</b>	0.0%	3.3%	10.0%	20.0%	<b>80.0%</b>
v54	Authority	3.3%	0.0%	23.3%	30.0%	3.3%	20.0%	20.0%	20.0%	<b>80.0%</b>
v55	Authority	3.3%	16.7%	20.0%	40.0%	3.3%	6.7%	10.0%	16.7%	<b>83.3%</b>
v56	Authority	6.7%	0.0%	36.7%	46.7%	3.3%	0.0%	6.7%	16.7%	<b>83.3%</b>
v57	Authority	3.3%	0.0%	6.7%	<b>63.3%</b>	6.7%	6.7%	13.3%	30.0%	<b>70.0%</b>
v58	Authority	10.0%	0.0%	6.7%	<b>50.0%</b>	3.3%	6.7%	23.3%	33.3%	<b>66.7%</b>
v59	Authority	0.0%	0.0%	40.0%	46.7%	3.3%	0.0%	10.0%	10.0%	<b>90.0%</b>
v60	Authority	0.0%	6.7%	43.3%	33.3%	3.3%	13.3%	0.0%	3.3%	<b>96.7%</b>
v61	Authority	16.7%	3.3%	6.7%	46.7%	13.3%	6.7%	6.7%	3.3%	<b>96.7%</b>
v62	Authority	3.3%	3.3%	30.0%	<b>56.7%</b>	3.3%	3.3%	0.0%	10.0%	<b>90.0%</b>
v63	Authority	3.3%	3.3%	16.7%	<b>53.3%</b>	3.3%	6.7%	13.3%	23.3%	<b>76.7%</b>
v64	Authority	0.0%	0.0%	43.3%	<b>53.3%</b>	0.0%	0.0%	3.3%	3.3%	<b>96.7%</b>
v65	Loyalty	0.0%	6.7%	<b>83.3%</b>	6.7%	0.0%	0.0%	3.3%	23.3%	<b>76.7%</b>
v66	Loyalty	0.0%	6.7%	<b>56.7%</b>	6.7%	0.0%	3.3%	26.7%	<b>56.7%</b>	43.3%
v67	Loyalty	3.3%	6.7%	23.3%	3.3%	0.0%	20.0%	43.3%	<b>56.7%</b>	43.3%
v68	Loyalty	0.0%	6.7%	<b>60.0%</b>	3.3%	0.0%	3.3%	26.7%	<b>50.0%</b>	50.0%
v69	Loyalty	0.0%	3.3%	<b>66.7%</b>	16.7%	0.0%	6.7%	6.7%	10.0%	<b>90.0%</b>
v70	Loyalty	0.0%	0.0%	43.3%	3.3%	0.0%	6.7%	46.7%	<b>73.3%</b>	26.7%
v71	Loyalty	0.0%	10.0%	<b>76.7%</b>	3.3%	0.0%	6.7%	3.3%	16.7%	<b>83.3%</b>
v72	Loyalty	3.3%	6.7%	<b>76.7%</b>	6.7%	0.0%	0.0%	6.7%	30.0%	<b>70.0%</b>
v73	Loyalty	0.0%	6.7%	<b>56.7%</b>	0.0%	0.0%	6.7%	30.0%	<b>60.0%</b>	40.0%
v74	Loyalty	0.0%	10.0%	<b>50.0%</b>	6.7%	0.0%	3.3%	30.0%	<b>50.0%</b>	<b>50.0%</b>
v75	Loyalty	3.3%	0.0%	<b>86.7%</b>	6.7%	0.0%	3.3%	0.0%	16.7%	<b>83.3%</b>
v76	Loyalty	0.0%	6.7%	20.0%	3.3%	0.0%	20.0%	<b>50.0%</b>	<b>86.7%</b>	13.3%
v77	Loyalty	6.7%	6.7%	<b>50.0%</b>	16.7%	3.3%	3.3%	13.3%	30.0%	<b>70.0%</b>
v78	Loyalty	0.0%	6.7%	<b>56.7%</b>	0.0%	3.3%	6.7%	26.7%	<b>50.0%</b>	<b>50.0%</b>
v79	Loyalty	0.0%	0.0%	40.0%	10.0%	0.0%	16.7%	33.3%	<b>60.0%</b>	40.0%
v80	Loyalty	0.0%	3.3%	<b>73.3%</b>	3.3%	0.0%	16.7%	3.3%	43.3%	<b>56.7%</b>
v81	Sanctity	6.7%	0.0%	0.0%	3.3%	<b>63.3%</b>	0.0%	26.7%	33.3%	<b>66.7%</b>

v82	Sanctity	6.7%	0.0%	0.0%	6.7%	<b>80.0%</b>	0.0%	6.7%	6.7%	<b>93.3%</b>
v83	Sanctity	3.3%	0.0%	0.0%	0.0%	<b>83.3%</b>	3.3%	10.0%	16.7%	<b>83.3%</b>
v84	Sanctity	0.0%	0.0%	3.3%	6.7%	23.3%	10.0%	<b>56.7%</b>	<b>86.7%</b>	13.3%
v85	Sanctity	0.0%	3.3%	0.0%	0.0%	<b>63.3%</b>	10.0%	23.3%	<b>60.0%</b>	40.0%
v86	Sanctity	6.7%	0.0%	0.0%	20.0%	40.0%	3.3%	30.0%	<b>50.0%</b>	<b>50.0%</b>
v87	Sanctity	0.0%	0.0%	0.0%	3.3%	26.7%	3.3%	<b>66.7%</b>	<b>70.0%</b>	30.0%
v88	Sanctity	0.0%	6.7%	0.0%	0.0%	<b>76.7%</b>	6.7%	10.0%	13.3%	<b>86.7%</b>
v89	Sanctity	0.0%	0.0%	0.0%	6.7%	23.3%	13.3%	<b>56.7%</b>	<b>86.7%</b>	13.3%
v90	Sanctity	6.7%	0.0%	10.0%	0.0%	46.7%	3.3%	33.3%	<b>70.0%</b>	30.0%

### 調査 5<sup>11</sup> 日本語版（翻訳版）MFVs の検証

次に Clifford *et al.* (2015) と同様の手続きで、日本語版 MFVs の構成概念妥当性および基準関連妥当性について検証し、原版の結果と比較して評価した。

**方法** 調査 5 の調査期間は 2016 年 8 月 26 日から 10 月 6 日で、データ収集は調査 1～3 と同じ調査会社に委託し、オンライン調査として行った。調査票はマトリックス形式で、それぞれの評定法で選択回答させ、これをデータとして収集した。

**対象** 標本は、同社に登録されている日本全国のモニターから無作為に抽出した 18 歳以上 60 歳以下の日本人 800 人で、性別（男性 393 人／女性 407 人）、年齢層（18～20 歳 57 人／21～30 歳 179 人／31～40 歳 188 人／41～50 歳 189 人／51～60 歳 187 人）の割合を平均化した（平均年齢 39.56 歳，*SD*=11.88）。

**材料** フェイスシートでは、性別（男／女）（2 択）と年齢層（20 歳以下／21～30 歳／31～40 歳／41～50 歳／51～60 歳）（5 択）について確認した。

日本語版 MFVs（付録 2）および日本語版 MFQ（付録 1）は、調査 4（予備調査）で用いたものと同じものを使用した。

調査票は、フェイスシート、日本語版 MFVs、日本語版 MFQ の順番で提示し、2 つの尺度のそれぞれの項目は、同じカテゴリー（道徳基盤領域）が続かないよう、また 100 人毎に提示順序を変えて提示した。

**分析** 検証 1 では、探索的因子分析（最尤法，プロマックス回転，負荷量 .4 以上を基準とする）を行い、日本語版 MFVs の因子構造について検証した。

検証 2 では、構造方程式モデリング（SEM）を用いて確認的因子分析（一般化最小二乗法）を行い、適合度指標を用いて日本語版 MFVs の構成概念妥当性を評価した。

想定したのは、Care (emotional), Care (physical), Fairness, Liberty, Authority, Loyalty, Sanctity の 7 因子構造 (Model-II-V-7) で、比較したのは、Care の領域を Care(emotional), Care (physical-animal), Care (physical-human) の 3 つに分けた 8 因子構造 (Model-II-V-8), Care の領域を emotional と physical に分けない 6 因子構造 (Model-II-V-6), 5 つの道徳基盤の上位概念とされる 2 因子 (Care と Fairness を 1 因子, Loyalty, Authority, Sanctity を 1 因子とする) に Liberty の因子を加えた 3 因子構造 (Model-II-V-3) である。さらに、検証 1 の探索的因子分析の結果抽出された 4 因子構造 (Model-II-V-4R) と、高い因子負荷量の

<sup>11</sup> 調査 5 は青山 (2016) で実施されたものである。

項目だけを抜粋した 10 因子構造 (Model-II-V-10R) とも比較した。この 10 因子は, Care, Fairness, Loyalty の各領域を細分化した, Care (emotional), Care (physical-animal), Care (physical-human), Fairness (equality), Fairness (deception), Liberty, Loyalty (non-national), Loyalty (national), Authority, Sanctity を仮定した。

検証 3 では, 日本語版 MFQ を外的基準として, 2 つの調査票のそれぞれの道徳基盤領域との相関係数を算出し, 対応する領域の相関の相対的な高さから日本語版 MFVs の基準関連妥当性を統計的に評価した。

## 調査 5 の結果と考察

日本語版 MFQ の 2 問の操作チェックにより, 800 の標本うち 133 のデータ (17%) を無効とし, 667 のデータを採用した。

**検証 1** 日本語版 MFVs の 90 項目について探索的因子分析 (最尤法, プロマックス回転, 負荷量 .4 以上を基準とする) を行った結果, 8 つの因子を抽出した (表 4)。因子負荷量の値から, Liberty を代表しているとみられる因子 (第 3 因子) や, Sanctity の特に性的な行為や態度に関する独立した因子 (第 6 因子) とみられる因子が認められたが, それ以外は第 1 因子と第 2 因子にほぼ集中し, Care (emotional), Fairness, Authority, Sanctity を代表しているとみられる因子はとらえられなかった。この結果は, Clifford *et al.* (2015) の結果とはかなり異なっていた。因子間相関は, 第 1 因子から第 6 因子まで全体的に相互に比較的高い相関を示していた。

表 4 日本語版 MFVs の探索的因子分析結果 (調査 5・検証 1) ( $n=667$ )

No	道徳基盤	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	第 5 因子	第 6 因子	第 7 因子	第 8 因子
v1	Care(e)	.00	<b>.79</b>	-.07	.15	-.03	.08	-.04	.07
v2	Care(e)	.34	.26	.07	.20	-.02	-.04	.01	.00
v3	Care(e)	.07	.29	.14	<b>.44</b>	-.03	-.09	.09	.03
v4	Care(e)	<b>.47</b>	.08	.12	.27	-.02	-.14	.01	-.09
v5	Care(e)	.23	.06	-.09	<b>.60</b>	.00	-.02	.09	.01
v6	Care(e)	.05	<b>.57</b>	.03	.34	-.09	.00	.00	-.12
v7	Care(e)	-.01	<b>.69</b>	-.05	.34	-.10	.06	-.04	-.06
v8	Care(e)	.27	.25	-.08	<b>.49</b>	.03	-.07	-.14	-.05
v9	Care(e)	.16	.25	-.13	<b>.59</b>	-.15	.12	-.08	.06
v10	Care(e)	.33	.09	.02	.39	-.12	.03	-.08	-.07
v11	Care(e)	-.01	.15	.15	.37	-.07	.00	.11	.10
v12	Care(e)	<b>.55</b>	-.01	-.02	<b>.51</b>	.08	-.17	.04	.00
v13	Care(e)	<b>.52</b>	-.07	.15	.17	-.01	-.01	.07	.03
v14	Care(e)	<b>.49</b>	-.18	.31	.13	-.22	.02	.01	.05
v15	Care(e)	<b>.52</b>	-.02	.04	.25	-.01	-.09	.01	.08
v16	Care(e)	.03	<b>.83</b>	-.02	.09	-.08	.04	-.06	.04
v17	Care(p-a)	-.08	<b>.82</b>	-.05	-.21	.02	.01	.10	-.05
v18	Care(p-a)	-.03	<b>.53</b>	.15	.04	.00	.07	-.07	.05

v19	Care(p-a)	-.04	.38	.14	.05	-.09	.22	-.03	.17
v20	Care(p-a)	-.07	<b>.63</b>	-.09	.14	.03	.01	-.06	.11
v21	Care(p-a)	.17	<b>.42</b>	.01	.17	-.02	-.09	-.01	.16
v22	Care(p-a)	.17	.30	.08	.10	-.19	.00	-.07	.18
v23	Care(p-a)	.05	<b>.82</b>	-.11	-.16	.11	-.01	.01	-.03
v24	Care(p-a)	.06	<b>.82</b>	-.04	-.18	.00	.00	.07	-.06
v25	Care(p-h)	-.12	<b>.71</b>	.07	-.15	.23	-.05	.08	.00
v26	Care(p-h)	.29	.09	.10	-.02	.16	-.08	-.13	<b>.50</b>
v27	Care(p-h)	-.04	.15	.18	.07	-.06	.12	-.09	<b>.54</b>
v28	Fairness	.17	.29	-.07	.00	.39	.00	-.03	.12
v29	Fairness	-.11	<b>.42</b>	.04	.02	.30	.13	-.04	-.01
v30	Fairness	.25	.04	.23	.06	.16	.20	-.07	.05
v31	Fairness	.15	.13	.16	.21	.07	.00	.09	.02
v32	Fairness	.16	.23	-.12	.25	.26	.13	-.10	-.06
v33	Fairness	-.15	<b>.62</b>	-.03	.11	.08	-.04	-.01	-.06
v34	Fairness	<b>.46</b>	.12	.01	-.05	.08	-.03	-.01	.00
v35	Fairness	.01	<b>.43</b>	.01	-.08	<b>.65</b>	-.08	.04	-.07
v36	Fairness	.18	.33	.11	.06	.21	-.09	.05	-.04
v37	Fairness	.02	.27	.06	-.09	<b>.67</b>	.00	-.03	.08
v38	Fairness	-.19	<b>.64</b>	-.03	.06	.05	-.02	.02	.12
v39	Fairness	-.10	<b>.63</b>	-.12	-.10	.08	.05	.07	.15
v40	Liberty	.19	.14	<b>.59</b>	-.15	.04	.07	.00	-.05
v41	Liberty	.14	-.02	<b>.85</b>	-.13	-.03	.00	-.10	.00
v42	Liberty	-.09	.20	<b>.46</b>	.14	.01	.09	.06	-.07
v43	Liberty	-.18	.34	<b>.41</b>	.14	.02	-.01	.06	-.07
v44	Liberty	-.16	.14	<b>.43</b>	.22	.13	.10	.10	-.03
v45	Liberty	-.17	.15	.15	<b>.45</b>	.13	-.14	.05	.07
v46	Liberty	.03	.00	<b>.63</b>	.03	.13	.02	.01	.11
v47	Liberty	<b>.47</b>	-.02	.33	.09	-.08	.02	.05	-.02
v48	Liberty	-.01	.00	<b>.85</b>	-.06	-.03	-.08	.03	.06
v49	Liberty	.34	-.12	<b>.67</b>	-.21	.00	-.05	-.08	.15
v50	Liberty	<b>.40</b>	-.15	.22	.04	-.11	.06	-.14	.17
v51	Authority	<b>.56</b>	.12	-.11	.00	.06	-.01	-.10	-.04
v52	Authority	.23	.23	.15	.11	.03	-.02	.10	.03
v53	Authority	<b>.47</b>	.06	-.01	.10	.11	.00	-.05	-.06
v54	Authority	<b>.48</b>	-.02	-.13	.13	.07	.09	-.04	-.03
v55	Authority	.08	.02	.03	<b>.44</b>	-.03	.07	.10	-.04
v56	Authority	.39	-.05	-.01	.39	-.04	.07	-.04	-.07
v57	Authority	.26	.10	.09	.06	.12	.12	-.04	-.05

v58	Authority	<b>.60</b>	-.08	-.08	.23	.03	.04	-.04	-.08
v59	Authority	.35	-.14	-.20	<b>.45</b>	.13	.02	.08	.09
v60	Authority	.17	.15	.07	.10	.27	-.05	.21	.01
v61	Authority	-.02	.22	.09	.15	.22	.04	.09	.10
v62	Authority	.24	.08	.10	.17	.17	.00	.00	.12
v63	Authority	<b>.44</b>	-.04	-.12	.32	-.06	-.02	.09	.19
v64	Authority	.38	.13	.02	.05	-.05	-.05	.05	.06
v65	Loyalty	<b>.49</b>	.08	-.07	.06	.01	.04	.07	.07
v66	Loyalty	<b>.67</b>	.05	.06	-.15	-.05	-.11	.02	.05
v67	Loyalty	<b>.60</b>	.02	-.04	-.06	-.17	.10	.31	-.05
v68	Loyalty	<b>.69</b>	.02	.00	-.07	-.01	-.04	.14	.04
v69	Loyalty	.32	.13	-.08	.10	-.02	-.01	<b>.54</b>	-.07
v70	Loyalty	<b>.67</b>	-.17	.11	.10	-.13	.10	-.04	-.07
v71	Loyalty	<b>.54</b>	.15	.01	.07	.05	.05	-.03	-.07
v72	Loyalty	<b>.51</b>	.01	.11	.21	.05	-.07	-.01	-.07
v73	Loyalty	<b>.68</b>	-.11	-.04	.04	-.05	.01	.04	.05
v74	Loyalty	<b>.55</b>	-.01	-.18	.20	-.01	.15	.30	-.02
v75	Loyalty	<b>.48</b>	.09	.03	.07	.14	-.02	.07	.02
v76	Loyalty	<b>.70</b>	-.11	.08	.02	.20	.02	-.09	-.10
v77	Loyalty	.34	.05	.03	.01	.04	.14	<b>.58</b>	-.14
v78	Loyalty	<b>.71</b>	.01	.17	-.21	.07	-.03	.00	.09
v79	Loyalty	<b>.65</b>	-.07	.04	-.22	-.05	.10	.37	-.05
v80	Loyalty	<b>.83</b>	.05	.01	-.27	-.07	-.10	.01	.03
v81	Sanctity	.17	.31	.00	-.11	-.11	<b>.45</b>	.01	-.07
v82	Sanctity	.24	.14	.06	-.01	.01	<b>.51</b>	.05	-.03
v83	Sanctity	.25	.08	.04	.06	-.09	<b>.49</b>	.09	.01
v84	Sanctity	<b>.59</b>	-.12	.12	-.01	.00	.23	-.02	-.01
v85	Sanctity	<b>.44</b>	-.05	-.22	.11	.07	<b>.48</b>	.08	.11
v86	Sanctity	<b>.57</b>	.05	.04	.10	-.02	.08	.01	-.15
v87	Sanctity	<b>.62</b>	-.01	-.08	.02	.08	.19	-.02	.05
v88	Sanctity	.04	<b>.41</b>	.06	-.06	.11	.30	-.04	-.03
v89	Sanctity	<b>.69</b>	-.13	-.08	-.05	.07	.07	.02	.11
v90	Sanctity	<b>.43</b>	-.03	.09	-.16	.07	.38	-.01	.16

因子相關行列	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	第 5 因子	第 6 因子	第 7 因子	第 8 因子
第 1 因子	1.00							
第 2 因子	.20	1.00						
第 3 因子	.59	.41	1.00					
第 4 因子	.57	.58	.69	1.00				

第 5 因子	.38	.43	.49	.61	1.00			
第 6 因子	.42	.35	.43	.52	.41	1.00		
第 7 因子	.25	.33	.24	.41	.39	.24	1.00	
第 8 因子	.34	.26	.32	.24	.12	.10	.27	1.00

調査 5 でも、90 のシナリオうち 4 つのシナリオで回答者の半数以上が不道徳とはみなしておらず、また不道徳とみなされている割合とみなされていない割合が拮抗しているシナリオがあった（表 5）。

表 5 日本語版 MFVs のうち不道徳とみなされなかった割合が高かったシナリオ(調査 5)

v13	Care (e)	バスの中ででっぷり太った女性の隣に座ることを明らかに避けている女性がいる
v14	Care (e)	ある少年にお兄さんの方がはるかに魅力的だと言っている少女がいる
v47	Liberty	フード付きトレーナーの着用を禁じようとテレビで先導している著名人がいる
v49	Liberty	息子に家族で経営しているレストランの事業を継ぐよう要求している父親がいる
v50	Liberty	信者が鮮やかな色合いの服装で教会に集まることを禁じている牧師がいる
v68	Loyalty	隣り町のほうがはるかに良い町だと言っている町長がいる
v70	Loyalty	最大の商売敵の会社で働くために家業を辞めようとしている男性がいる
v73	Loyalty	ライバル校の方がより優れているとテレビで発言している生徒会長がいる
v76	Loyalty	地元の美人コンテストで妻への反対票をこっそり投じている男性がいる
v78	Loyalty	ある監督の妻は夫のライバルチームのために焼菓子販売を後援している
v79	Loyalty	日本国籍を公然と放棄しようとしている元大臣がいる
v80	Loyalty	同じ水泳チームの仲間を破り優勝しようとしているライバル国の選手に声援を送っている日本人選手がいる
v84	Sanctity	最近愛する人を亡くした男性と親密な(性的な)関係を持っている女性がいる
v85	Sanctity	あるゲイバーで一杯おごってくれたら誰とでも性交すると言っている同性愛者の男性がいる
v87	Sanctity	死んだ仲間の肉を食べるという未開の地の種族がいる
v89	Sanctity	兄妹として育った養子の兄と実子の妹が盛大な式を挙げて結婚しようとしている
v90	Sanctity	自分の秘書に似たゴム製のダッチワイフ(セックス人形)を注文している独身男性がいる

これらを除き、回答者の 61%以上が不道徳とみなした 73 のシナリオについて同様に探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転、負荷量 .4 以上を基準とする）を行った結果、最終的に 4 つの因子を抽出した(表 6)。Liberty を代表しているとみられる因子(第 3 因子)以外は、明確に 1 つの領域を代表する因子とみることはできず、Care (emotional), Loyalty, Authority の項目からなる因子(第 1 因子)と、Care (physical), Fairness の項目からなる因子(第 2 因子)を、主な構成因子としてみることができた。このなかで、Care (emotional) は、Clifford *et al.* (2015) の結果とは異なり、日本人においては Loyalty や Authority と同じ Binding foundations (義務などへの拘束) の領域に含まれる因子としてみる事ができた。

因子間相関は、全体として高く、特に第 1 因子と第 3 因子の相関が高かった ( $r=.70$ )。

表 6 日本語版 MFVs の探索的因子分析の結果（調査 5・検証 1）（ $n=667$ ）  
（不道徳とみなされたシナリオのみを分析）

No	Foundation	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
v2	Care (e)	<b>.53</b>	.16	.09	.11
v4	Care (e)	<b>.55</b>	-.05	.17	.07
v5	Care (e)	<b>.64</b>	.10	-.01	.06
v8	Care (e)	<b>.48</b>	.21	.00	.12
v10	Care (e)	<b>.55</b>	.08	.08	.06
v12	Care (e)	<b>.66</b>	-.21	.06	.19
v15	Care (e)	<b>.70</b>	-.13	.12	.08
v17	Care (p)	-.09	<b>.83</b>	-.11	.04
v18	Care (p)	-.06	<b>.44</b>	.17	.39
v20	Care (p)	.02	<b>.66</b>	-.04	.28
v21	Care (p)	.12	.28	.04	<b>.47</b>
v22	Care (p)	.09	.16	.12	<b>.49</b>
v23	Care (p)	-.03	<b>.75</b>	-.08	.22
v24	Care (p)	-.07	<b>.71</b>	-.07	.26
v25	Care (p)	-.10	<b>.74</b>	.07	.00
v29	Fairness	.13	<b>.59</b>	.10	-.16
v33	Fairness	-.02	<b>.75</b>	.00	-.06
v38	Fairness	.01	<b>.76</b>	.00	-.06
v39	Fairness	.03	<b>.69</b>	-.13	-.03
v40	Liberty	.17	.03	<b>.61</b>	-.06
v41	Liberty	.00	-.18	<b>.87</b>	.04
v42	Liberty	.09	.27	<b>.50</b>	-.09
v44	Liberty	-.02	.18	<b>.48</b>	.08
v46	Liberty	.00	-.09	<b>.74</b>	.15
v48	Liberty	-.08	-.08	<b>.87</b>	.05
v51	Authority	<b>.71</b>	.08	-.07	-.07
v53	Authority	<b>.75</b>	.10	.03	-.15
v54	Authority	<b>.70</b>	.00	-.07	-.06
v56	Authority	<b>.65</b>	-.03	.03	.02
v57	Authority	<b>.43</b>	.14	.11	-.04
v58	Authority	<b>.77</b>	-.17	-.01	.03
v59	Authority	<b>.71</b>	-.05	-.11	.08
v62	Authority	<b>.53</b>	.13	.15	-.07
v63	Authority	<b>.77</b>	-.03	-.02	.04
v64	Authority	<b>.63</b>	.19	.06	-.22
v65	Loyalty	<b>.71</b>	.06	-.04	-.02

v66	Loyalty	.67	-.13	.02	-.05
v67	Loyalty	.70	-.08	-.11	.08
v71	Loyalty	.65	.08	-.01	-.03
v72	Loyalty	.61	-.10	.10	.11
v74	Loyalty	.74	-.10	-.18	.09
v75	Loyalty	.63	.03	.04	-.04

因子相関行列	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子	1.00	-	-	-
第2因子	.42	1.00	-	-
第3因子	.70	.45	1.00	-
第4因子	.41	.35	.42	1.00

検証1では、Clifford *et al.* (2015) と同じ 40 歳以下を対象とした分析や、さらに若い 30 歳以下を対象とした分析も行ったが、いずれの結果も、仮定された 7 因子あるいは道徳基盤理論に基づく 6 因子は明確には抽出できなかった。しかし、いずれも複数の因子が抽出され、道徳的判断に関する複数の判断領域の存在が示唆された。

まず、Liberty の領域を代表すると考えられる因子がとらえられ、道徳基盤理論のなかで最も新しく提案されたこの領域の存在を裏付けるような結果となった。また、異なる 2 つの因子として示されていた、Care (physical) と Fairness の混合領域と、Authority と Loyalty の混合領域は、道徳基盤理論の Individualizing foundations (個人の尊厳) と Binding foundations (義務などへの拘束) の 2 つの上位概念に合致しており、本調査票が道徳基盤理論の構成概念にある程度基づいているといえるのではないかと考えられた。一方、全 90 項目の分析からは、Clifford *et al.* (2015) で示された、人間 (human) と動物 (animal) の区別がとらえられている可能性がうかがえた。また、Care (emotional) の領域の社会的弱者 (weak) に関する項目や、Loyalty の領域の国家 (national) に関する項目、Sanctity の領域の性的な行為や態度 (sexual) に関する項目が、他の項目とは区別されている可能性がうかがえた。これらは、それぞれの道徳基盤領域に含有されている判断基準の下位概念としてみることができるかもしれない。

日本語版 MFVs の分析結果が Clifford *et al.* (2015) と大きく異なった要因として、まず考えられるのは、シナリオが日本人に適していなかった可能性があるということ、もう一つは、Care (emotional) の領域は他の領域に含有されている可能性があるということである。さらに、Authority と Loyalty の区別がほとんどなされていないという結果は、米国人とは異なる日本人の道徳的判断の特徴を示している可能性があるということである。

**検証2** 確認的因子分析では、仮定している 7 因子モデル (Model-II-V-7) よりも、8 因子モデル (Model-II-V-8) のほうが若干適合度がよいという結果になり、6 因子モデル (Model-II-V-6) や 3 因子モデル (Model-II-V-3) では 7 因子モデル以上の適合性は示されなかった (表 7)。一方、10 因子モデル (Model-II-V-10) は、GFI, AGFI の適合度は他のモデルよりも高かったが、RMSEA の適合度は他のモデルと比較して低かった。これらの結



果，日本語版 MFVs は，仮定した 7 因子モデルよりも，むしろ 8 因子モデル，あるいはさらに多因子構造の 10 因子モデルのほうが当てはまりがよいのではないかと考えられた。

表 7 日本語版 MFVs の確認的因子分析の結果（調査 5・検証 2）（ $n=667$ ）

Model	Items	Factors	$\chi^2$	$df$	$\chi^2/df$	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	90% C.L.	AIC
<b>II-V-8</b>	<b>73</b>	<b>8</b>	<b>4,397.03</b>	<b>2,527</b>	<b>1.74</b>	<b>.819</b>	<b>.807</b>	<b>.249</b>	<b>.033</b>	<b>.032~.035</b>	<b>4745.029</b>
II-V-7	73	7	4460.02	2,534	1.76	.817	.804	.227	.034	.032~.035	4794.016
II-V-6	73	6	4577.12	2,540	1.80	.812	.800	.182	.035	.033~.036	4899.121
II-V-3	73	3	4688.44	2,552	1.84	.807	.796	.142	.035	.034~.037	4986.444
II-V-4R	42	4	1818.73	813	2.24	.870	.856	.330	.043	.040~.046	1998.728
<b>II-V-10R</b>	<b>33</b>	<b>10</b>	<b>939.533</b>	<b>450</b>	<b>2.09</b>	<b>.915</b>	<b>.893</b>	<b>.615</b>	<b>.040</b>	<b>.037~.044</b>	<b>1161.533</b>

**検証 3** 日本語版 MFVs が仮定する 7 因子構造（Model-II-V-7）と，外的基準である日本語版 MFQ が仮定する 5 因子構造の各道徳基盤領域との相関をみた結果，MFVs の Care（physical）（ $r=.51$ ），Loyalty（ $r=.50$ ），Sanctity（ $r=.41$ ）の 3 つの領域では，MFQ のそれぞれ対応する領域との相関が相対的に最も高かったが，MFVs の Care（emotional）では MFQ の Fairness や Sanctity の領域により高い相関を示し，MFVs の Authority では MFQ の Loyalty の領域により高い相関を示していた（表 8）。また，MFVs の Liberty は MFQ の Care, Fairness, Sanctity の領域とわずかな相関が認められただけであった。Care と Fairness, Loyalty と Authority の間に比較的高い相関が認められ，Sanctity が各領域に幅広い相関を示していること，また Liberty がいずれの領域とも高い相関を示していない，という結果は，8 因子構造（Model-II-V-8）や 4 因子構造（Model-II-V-4R），10 因子構造（Model-II-V-10R）でも同様であった。

表 8 日本語版 MFVs と日本語版 MFQ の各道徳基盤領域の相関（調査 5・検証 3）（ $n=667$ ）

			MFQ				
			Care	Fairness	Loyalty	Authority	Sanctity
MFVs	Model-II-V-7	Care (e)	<b>.43</b>	.41	.38	.35	<b>.46</b>
		Care (p)	<b>.51</b>	.43	.17	.18	.45
		Fairness	.46	<b>.50</b>	.32	.33	<b>.54</b>
		Liberty	.23	.26	.17	.18	.29
		Loyalty	.16	.22	<b>.50</b>	.45	.37
		Authority	.23	.27	<b>.44</b>	<b>.43</b>	.40
		Sanctity	.28	.26	.36	.34	<b>.41</b>
MFVs	Model-II-V-8	Care (e)	<b>.43</b>	.41	.38	.35	<b>.46</b>
		Care (p-a)	<b>.51</b>	.43	.17	.19	.46
		Care (p-h)	<b>.44</b>	.40	.15	.13	.39
		Fairness	.46	<b>.50</b>	.32	.33	<b>.54</b>
		Liberty	.23	.26	.17	.18	.28

		Loyalty	.16	.22	<b>.50</b>	.45	.37
		Authority	.23	.27	<b>.44</b>	<b>.43</b>	.40
		Sanctity	.28	.26	.36	.34	<b>.41</b>
MFVs	Model-II-V-4R	Care (p-a)	<b>.34</b>	.34	.20	.22	.37
		Care (p-h)+Fairness	<b>.56</b>	<b>.48</b>	.17	.18	<b>.49</b>
		Liberty	.17	.20	.16	.16	.23
		Care (e)+Authority+Loyalty	.18	.23	<b>.45</b>	<b>.42</b>	.36
MFVs	Model-II-V-10R	Care (e)	<b>.58</b>	<b>.52</b>	.28	.25	<b>.51</b>
		Care (p-a)	<b>.52</b>	.43	.17	.19	.47
		Care (p-h)	<b>.56</b>	<b>.51</b>	.16	.15	.48
		Fairness (e)	<b>.56</b>	<b>.53</b>	.20	.20	<b>.53</b>
		Fairness (d)	.35	<b>.43</b>	.29	.28	<b>.45</b>
		Liberty	.18	.21	.16	.18	.24
		Loyalty (n-n)	.18	.23	<b>.41</b>	.38	.36
		Loyalty (n)	.17	.24	<b>.52</b>	.43	.37
		Authority	.14	.22	.42	<b>.43</b>	.37
		Sanctity	.28	.27	.36	.34	<b>.41</b>

検証 1, 検証 2 の結果から, 日本語版 MFVs が複数の因子によって構成されている調査票であることが示された。しかしその因子構造は想定したものと異なっており, 構成概念妥当性を明確に示すことはできなかった。検証 3 の結果からも, 日本語版 MFVs の概念構造が外的基準から十分に説明されたとはいえず, 基準関連妥当性を明確に示すことはできなかった。しかし, この調査票が道徳基盤理論の構成概念にある程度基づいた複数の因子構造を持ち, そのなかで異なる道徳的判断領域が区別してとらえられていた。

調査 5 では, 40%以上の回答者が不道徳的とみなした 73 のシナリオについて検証した結果, 探索的因子分析では, 最終的に 4 つの因子がとらえられた。また, 確認的因子分析では, 8 因子モデルの当てはまりがよいとみられたが, 各領域で因子負荷量の高かった項目を抜粋した 10 因子モデルがより高い適合度を示していた。この 10 因子には, 7 因子あるいは 8 因子構造に含有される因子が含まれていると考えられ, この構造を中心にさらなる検証が必要であると考えられた。調査 5 の結果, 複数の因子に高い負荷量を示されたり, いずれの因子にも明確な負荷量を示さなかったシナリオを除き, 各領域で高い因子負荷量を示した 33 のシナリオに, 日本人がより理解しやすいシナリオを加え, 道徳基盤理論の構成概念が反映されたより高い妥当性を備えた調査票が必要であると考え, 調査 6 を行った。

## 調査 6 日本語版 (改訂版) MFVs の検証 (1 回目)

調査 6 では, 調査 4 および調査 5 の結果をふまえ, MFVs の原版から翻訳された日本語版のうち, 日本人には適さないと考えられたシナリオ (不道徳とみなされなかったシナリオ) を除き, さらに日本人がより理解しやすいと考えるシナリオを新たに追加して, 合わせて 90 項目からなる新たな調査票を作成し, その構成概念妥当性について検証した。

**方法** 調査 6 の調査期間は 2020 年 4 月 16 日から 4 月 18 日で、データ収集は調査 5 と同じ調査会社に委託し、オンライン調査として行った。調査票はマトリックス形式で、それぞれの評定法で選択回答させ、これをデータとして収集した。

**対象** 標本は、同社に登録されている日本全国のモニターから無作為に抽出した、前回調査（調査 5）の回答者に含まれない 18 歳以上 60 歳以下の日本人 500 人で、性別（男性 250 人／女性 250 人）、年齢層（18～20 歳 40 人／21～30 歳 115 人／31～40 歳 115 人／41～50 歳 115 人／51～60 歳 115 人）の割合を平均化した（平均 38.66 歳、 $SD=12.58$ ）。

**材料** フェイスシートでは、性別（男／女）（2 択）と年齢層（20 歳以下／21～30 歳／31～40 歳／41～50 歳／51～60 歳）（5 択）について確認した。

先ず、調査 5 の結果から得られた日本語版 MFVs の 33 のシナリオセットに、新たに 57 のシナリオを追加した（付録 3）。Care (weak), Care (physical-animal), Care (physical-human), Fairness, Liberty, Authority, Loyalty (nation), Loyalty (non-nation), Sanctity (sexual), Sanctity (non-sexual), の 10 の道徳的判断領域に基づき作成した 47 のシナリオは、原版のシナリオを、日本人が理解しやすいと考える対象や場所、光景に変更したものや、より現実的な場面を新たに設定し直したものである。原版同様に、定型的な書式や長さ、語彙の選択、イメージの想起のしやすさ等について考慮した。また、原版作成時の検証にも含まれていた Social Norms の 10 のシナリオも加えた。これは、新たなシナリオも Social Norms とは異なる判断基準であることを改めて示すためである。

日本語版 MFQ（付録 1）は、調査 5 と同じものを使用した。

調査票は、フェイスシート、日本語版 MFVs、日本語版 MFQ の順番で提示し、2 つの尺度のそれぞれの項目の順番は無作為に提示した。

**分析** 検証 4 では、新たに追加したシナリオを含む 90 項目からなる日本語版 MFVs について探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転、負荷量.4 以上を基準とする）を行い、因子構造について確認した。

検証 5 では、検証 4 で示された因子構造（Model-II-VI-4a および Model-II-VI-4b）について、構造方程式モデリング（SEM）を用いて確認的因子分析（一般化最小二乗法）を行い、適合度指標を用いて構成概念妥当性を評価した。その際、想定する 7 因子構造（Model-II-VI-7）、および 8 因子構造（Model-II-VI-8）とも比較して評価した。

検証 6 では、日本語版 MFQ を外的基準として、2 つの調査票のそれぞれの道徳基盤領域との相関係数を算出し、対応する領域の相関の相対的な高さから日本語版 MFVs の基準関連妥当性を統計的に評価した。

## 調査 6 の結果と考察

日本語版 MFQ の操作チェックから、500 の標本うち 94 のデータ（19%）を無効とし、406 のデータを採用した。さらに、新しい日本語版 MFVs の 90 のシナリオのうち、不道徳とみなされなかった、あるいはみなされた割合とみなされない割合が拮抗していた 14 のシナリオ（表 9）を除外し、76 のシナリオについて検討した。除外された 14 のうち 10 のシナリオは Social Norms のシナリオで、これにより対象となる 76 のシナリオは Social Norms とは異なる判断領域として区別されていることを確認した。

表 9 日本語版 MFVs のうち不道徳とみなされなかった割合が高かったシナリオ(調査 6)

v57	Loyalty (n-n)	自分のチームが試合で負けた直後に勝った相手チームの選手と一緒に勝利を祝っている監督がいる
v72	Sanctity (s)	複数の中年男女が入り乱れた乱交ビデオを見て興奮している人がある
v75	Sanctity (n-s)	電車の中で隣に座った人が咳をしたらすぐに遠くの離れた席に移動した人がある
v76	Sanctity (n-s)	初めて会った外国人と握手した後すぐに石鹸で手を洗っている人がある
v81	Social Norms	新しい電話を購入することを拒否して古いダイヤル式電話を使っている人がある
v82	Social Norms	素晴らしく晴れ渡った日にブラインド(窓の覆い)を下ろして暗い部屋に閉じ籠っている人がある
v83	Social Norms	カップ一杯に入ったコーヒーを小さなスプーンを使って飲んでる人がある
v84	Social Norms	メインディッシュ(主菜)がテーブルに運ばれてくる前にデザートを食べている人がある
v85	Social Norms	大きな日除け帽子をアパートの中でも被り続けている人がある
v86	Social Norms	立派なビジネススーツを着たまますポーツジムでダンベル(鉄アレイ)を上げている人がある
v87	Social Norms	サングラスをかけたまま暗い廊下を歩いて来る人がある
v88	Social Norms	カラーではなく白黒テレビでスポーツの試合を見ている人がある
v89	Social Norms	スパイ小説を最初からではなく結末から読んでいる人がある
v90	Social Norms	“こんにちは”という代わりに“さようなら”と言って電話に出ている人がある

検証 4 76 項目について探索的因子分析を行った結果,最終的に 5 つの因子を抽出した(表 10)。30 項目からなるこの 5 因子構造(Model-II-VI-5a)は, Care(weak), Care(physical-animal), Care(physical-human) と Fairness の混合, Liberty と Loyalty の混合, Sanctity を 5 因子としてみなしたものである。因子間相関は全体として比較的高く, なかでも, 第 1 因子と第 4 因子 ( $r=.62$ ), 第 3 因子と第 4 因子 ( $r=.53$ ) の相関が相対的にみて高かった。

表 10 日本語版 MFVs の探索的因子分析の結果 (30 項目) (調査 6・検証 4) ( $n=406$ )

No	道徳基盤	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	第 5 因子
v1	Care (e-w)	.04	-.07	.05	<b>.86</b>	-.04
v3	Care (e-w)	-.05	.02	.01	<b>.71</b>	.18
v4	Care (e-w)	.11	.05	-.06	<b>.77</b>	-.04
v11	Care (p-a)	.27	-.21	.25	.04	<b>.44</b>
v16	Care (p-a)	.01	-.06	.23	.09	<b>.57</b>
v19	Care (p-h)	<b>.52</b>	.00	-.04	.28	-.03
v20	Care (p-h)	<b>.61</b>	.05	.01	.07	.08
v22	Care (p-h)	<b>.94</b>	-.09	-.06	-.04	-.08
v23	Care (p-h)	<b>.85</b>	-.05	.05	-.15	-.08
v25	Care (p-h)	<b>.80</b>	.00	-.07	.01	-.01
v26	Care (p-h)	<b>.87</b>	-.14	.03	-.14	.12
v27	Care (p-h)	<b>.52</b>	.12	-.01	.20	.04
v28	Care (p-h)	<b>.54</b>	-.09	.16	.03	.21

v32	Fairness	<b>.78</b>	.04	-.08	.06	-.06
v33	Fairness	<b>.67</b>	.05	.02	-.05	.05
v36	Fairness	<b>.61</b>	.32	-.13	-.03	.07
v38	Fairness	<b>.80</b>	-.03	-.06	.05	-.03
v42	Liberty	.04	<b>.48</b>	-.05	-.03	.36
v43	Liberty	-.03	<b>.44</b>	-.19	-.06	<b>.54</b>
v58	Loyalty	-.11	<b>.69</b>	.03	.02	.13
v59	Loyalty	-.14	<b>.56</b>	-.03	-.03	.26
v63	Loyalty	.08	<b>.60</b>	.12	.08	-.15
v64	Loyalty	.04	<b>.75</b>	.16	-.05	-.10
v65	Loyalty	.16	<b>.54</b>	.08	.07	.03
v68	Loyalty	-.04	<b>.56</b>	.04	-.03	-.11
v69	Sanctity	-.05	.16	<b>.48</b>	.05	-.02
v71	Sanctity	-.10	.11	<b>.61</b>	-.08	.15
v73	Sanctity	.06	.06	<b>.63</b>	-.05	.03
v74	Sanctity	-.14	-.02	<b>.84</b>	.07	.01
v80	Sanctity	.32	.17	<b>.45</b>	-.04	-.11

因子相関行列	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	第 5 因子
第 1 因子	1.00	-	-	-	-
第 2 因子	0.30	1.00	-	-	-
第 3 因子	0.43	0.48	1.00	-	-
第 4 因子	0.62	0.47	0.53	1.00	-
第 5 因子	0.36	0.37	0.43	0.48	1.00

しかし、この構造には Authority の領域が含まれず、Care (physical-human), Fairness, Liberty, Loyalty も独立した領域としてとらえられていない。そのため、Care (weak), Fairness, Liberty, Loyalty, Sanctity を 5 因子としてみなす 20 項目からなる 5 因子構造 (Model-II-VI-5b) (表 11) がより適合的なのではないかと考えた。因子間相関は 30 項目以上に全体として高く、第 1 因子と第 3 因子 ( $r=.60$ ), 第 4 因子 ( $r=.52$ ), 第 5 因子 ( $r=.55$ ), 第 2 因子と第 4 因子 ( $r=.63$ ), 第 3 因子と第 4 因子 ( $r=.53$ ) の相関が相対的にみて高かった。この構造においても、Authority や Care (physical-animal), Care (physical-human) の独立した因子はとらえられておらず、想定したような概念構造は見いだせなかった。

表 11 日本語版 MFVs の探索的因子分析の結果 (20 項目) (調査 6・検証 4) ( $n=406$ )

No	道徳基盤	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	第 5 因子
v1	Care(e-w)	-.06	.00	.03	<b>.89</b>	-.05
v3	Care(e-w)	.01	-.04	.03	<b>.76</b>	.08
v4	Care(e-w)	.02	.11	-.05	<b>.76</b>	-.01

v32	Fairness(d)	-.10	<b>.92</b>	-.01	-.03	.02
v33	Fairness(d)	.03	<b>.62</b>	.04	.01	-.01
v36	Fairness(e)	.25	<b>.57</b>	-.09	.01	.07
v38	Fairness(e)	-.15	<b>.86</b>	.01	.03	.00
v42	Liberty	.18	.08	.08	.02	<b>.51</b>
v43	Liberty	-.02	.02	-.02	.00	<b>.87</b>
v58	Loyalty(n-n)	<b>.64</b>	-.09	.01	.02	.15
v59	Loyalty(n-n)	<b>.47</b>	-.10	-.01	-.01	.26
v63	Loyalty(n)	<b>.74</b>	.03	-.01	.05	-.14
v64	Loyalty(n)	<b>.88</b>	-.03	.03	-.05	-.08
v65	Loyalty(n)	<b>.59</b>	.11	.01	.10	.03
v68	Loyalty(n)	<b>.57</b>	-.04	-.01	-.09	.01
v69	Sanctity(s)	.18	.02	<b>.46</b>	.02	-.07
v71	Sanctity(s)	-.04	-.02	<b>.69</b>	-.07	.16
v73	Sanctity(s)	.02	.06	<b>.65</b>	-.01	-.02
v74	Sanctity(s)	-.09	-.11	<b>.90</b>	.07	-.02
v80	Sanctity(n-s)	.17	.27	<b>.42</b>	-.01	-.08

因子相関行列	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
第1因子	1.00	-	-	-	-
第2因子	.41	1.00	-	-	-
第3因子	<b>.60</b>	.38	1.00	-	-
第4因子	<b>.52</b>	<b>.63</b>	<b>.53</b>	1.00	-
第5因子	<b>.55</b>	.22	.34	.35	1.00

**検証5** 検証4をふまえ、日本語版 MFVs の30項目からなる5因子構造 (Model-V-5a) と、20項目からなる5因子構造 (Model-V-5b) について確認的因子分析を行った結果、30項目の5因子モデル (Model-V-5a) は20項目の5因子構造 (Model-V-5b) と比較して、*GFI* や *AGFI* の適合度は低かったが、*RMSEA* は高い適合度を示していた (表12)。一方、全76項目の8因子構造 (Model-V-8) や7因子構造 (Model-V-7) との比較においては、逆に *GFI* や *AGFI* の適合度は高かったが、*RMSEA* は低かった。

表12 日本語版 MFVs の確認的因子分析の結果 (調査6・検証5) ( $n=406$ )

Model	Items	Factors	$\chi^2$	$df$	$\chi^2/df$	<i>GFI</i>	<i>AGFI</i>	<i>CFI</i>	<i>RMSEA</i>	90% <i>C.L.</i>	<i>AIC</i>
II-VI-8	76	8	3972.655	2746.000	1.447	.742	.725	.233	.033	.031~.035	4332.655
II-VI-7	76	7	3999.199	2753.000	1.453	.740	.724	.221	.033	.031~.036	4345.199
II-VI-5	76	5	4047.107	2764.000	1.464	.737	.722	.197	.034	.032~.036	4371.107
<b>II-VI-5a</b>	<b>30</b>	<b>5</b>	<b>837.716</b>	<b>395.000</b>	<b>2.121</b>	<b>.862</b>	<b>.838</b>	<b>.436</b>	<b>.053</b>	<b>.048~.058</b>	<b>977.716</b>
<b>II-VI-5b</b>	<b>20</b>	<b>5</b>	<b>362.16</b>	<b>161.000</b>	<b>2.249</b>	<b>.911</b>	<b>.883</b>	<b>.669</b>	<b>.056</b>	<b>.048~.063</b>	<b>460.160</b>

**検証 6** 日本語版 MFVs の 2 つの 5 因子構造 (Model-II-VI-5a および Model-II-VI-5b) と、日本語版 MFQ が仮定する 5 因子構造の各道徳基盤領域との相関をみた結果、日本語版 MFVs のいずれの構造の道徳基盤領域も、日本語版 MFQ の対応する領域に相対的にみて最も高い相関を示していた (表 13)。Care と Fairness や、Loyalty と Authority の、2 つの領域に同等の相関を示す傾向は、検証 3 と同様にみられたが、検証 6 の結果からは、新しい日本語版 MFVs が日本語版 MFQ と同様の構成概念を有しているとみることができるのではないかと評価した。

表 13 日本語版 MFVs と日本語版 MFQ の各道徳基盤領域の相関 (調査 6・検証 6) (n=406)

		MFQ					
		Care	Fairness	Loyalty	Authority	Sanctity	
MFVs	Model-II-VI-5a	Care (e-w)	<b>.60</b>	<b>.56</b>	.29	.27	.46
		Care (p-a)	<b>.52</b>	.43	.18	.14	.37
		Care (p-h)+Fairness	<b>.56</b>	<b>.53</b>	.08	.08	.36
		Liberty+Loyalty	.29	.41	<b>.58</b>	<b>.51</b>	.43
		Sanctity	.44	.39	.35	.32	<b>.51</b>
MFVs	Model-II-VI-5b	Care (e-w)	<b>.60</b>	<b>.56</b>	.29	.27	.46
		Fairness	<b>.50</b>	<b>.51</b>	.11	.09	.36
		Liberty	.30	.37	.31	.27	.25
		Loyalty	.28	.39	<b>.60</b>	<b>.53</b>	.44
		Sanctity	.43	.39	.35	.32	<b>.51</b>

調査 6 の結果、新しい日本語版 MFVs からは 5 つの独立した因子があることが示唆された。それらは想定している 7 つ、あるいは道徳基盤理論に基づく 6 つの道徳基盤領域とは若干異なる構造であったが、日本語版 MFVs のそれぞれの領域は、外的基準となる日本語版 MFQ の対応する領域との間に、他の領域と比較してより高い相関が認められ、調査 5 の結果と比較して、新しい調査票が道徳基盤理論により近く、より明らかな概念構造を表しているといえ、より日本人に合った調査票になったといえるのではないかと考えられた。

一方、検証 4 でも Authority や Care (physical-human) の独立した因子がとらえられていなかった。この抽出された 5 つの因子構造が日本人に特有であるのか、あるいは、さらに新たなシナリオを加えることで、新たな独立した因子をとらえることができるのか、再度検証が必要であると考え、調査 7 を行った。

#### 調査 7 日本語版 (改訂版) MFVs の検証 (2 回目)

調査 7 では、調査 6 の結果をふまえ、一定の妥当性が評価された日本語版 MFVs の 30 のシナリオセットに、さらにシナリオを追加して、合わせて 45 の項目からなる調査票 (付録 4) の構成概念妥当性について再度確認的な検証を行った。

**方法** 調査7の調査期間は2020年5月29日から5月31日で、データ収集は調査5～6と同じ調査会社に委託し、オンライン調査として行った。調査票はマトリックス形式で、それぞれの評定法で選択回答させ、これをデータとして収集した。

**対象** 標本は、同社に登録されている日本全国のモニターから無作為に抽出した、前回調査（調査5および調査6）の回答者に含まれない18歳以上60歳以下の日本人500人で、性別（男性250人／女性250人）、年齢層（18～20歳40人／21～30歳115人／31～40歳115人／41～50歳115人／51～60歳115人）の割合を平均化した（平均年齢；38.9歳， $SD=12.56$ ）。

**材料** フェイスシートでは、性別（男／女）（2択）と年齢層（20歳以下／21～30歳／31～40歳／41～50歳／51～60歳）（5択）について確認した。

日本語版MFVsは、調査6で示された日本語版MFVsの2種類の5因子構造を構成するシナリオを主体として、独立した因子としてとらえられていなかったAuthorityや、項目数の少なかったLibertyの領域のシナリオを追加し、合わせて45項目からなる調査票（付録4）を作成した。

日本語版MFQ（付録1）は、調査4～6と同じものを使用した。

調査票は、フェイスシート、日本語版MFVs（付録4）、日本語版MFQ（付録1）の順番で提示し、2つの尺度のそれぞれの項目の順番は無作為に提示した。

**分析** 検証7では、新たに追加したシナリオを含む日本語版MFVsの探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転、負荷量.4以上を基準とする）を行い、因子構造について確認した。

検証8では、検証7で示された因子構造について、構造方程式モデリング（SEM）を用いて確認的因子分析（一般化最小二乗法）を行い、適合性指標を用いて構成概念妥当性を評価した。

検証9では、日本語版MFQを外的基準として、日本語版MFVsの各道徳基盤領域との相関係数を算出し、2つの調査票の対応する領域の相関の高さから日本語版MFVsの基準関連妥当性を統計的に評価した。

## 調査7の結果と考察

日本語版MFQの操作チェックから、500の標本うち82のデータ（16%）を無効とし、418のデータを採用した。さらに、日本語版MFVsの45のシナリオのうち、不道徳とみなされなかった割合とみなされた割合が拮抗していたシナリオ「v43 複数の中年男女が入り乱れた乱交ビデオを見て興奮している人がいる」を外して、残りの44のシナリオについて検討した。

**検証7** 44項目からなる日本語版MFVsの探索的因子分析を行ったところ、最終的に、28項目からなるCare (weak), Care (physical-human)とFairnessの混合、Liberty, Loyalty, Sanctityの5つの因子構造を確認した（表14）。この結果は、調査6の検証4で示された因子構造とほぼ同様で、Authorityを代表すると考えられる因子はとらえられず、また、Care (physical-animal)やCare (physical-human)の独立した因子もとらえられなかった。因子間相関も全体として比較的高く、なかでも、第1因子と第4因子 ( $r=.69$ )、第2因子と第3



因子 ( $r=.58$ ), 第 4 因子 ( $r=.59$ ), 第 3 因子と第 4 因子 ( $r=.62$ ), 第 5 因子 ( $r=.60$ ), 第 4 因子と第 5 因子 ( $r=.54$ ) の相関が特に高かった。

表 14 日本語版 MFVs の探索的因子分析の結果 (最終) ( $n=418$ )

No	道徳基盤	Scenario	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
v1	Care (e-w)	すれ違いざまに腕のない障害者を見てクスクス笑っている人がいる	.00	-.08	-.10	<b>.93</b>	.05
v2	Care (e-w)	知り合いの父親が清掃作業員だと知って嘲笑している人がいる	.04	.08	.16	<b>.66</b>	-.08
v3	Care (e-w)	治療で頭髪が抜け落ちた患者を見て忍び笑いをしている人がいる	.07	.03	.07	<b>.71</b>	-.01
v4	Care (e-w)	会社のソフトボール大会で障害を持つ同僚のプレイを見て面白がっている人がいる	.09	.03	-.09	<b>.84</b>	-.01
v5	* Care (e-w)	車椅子に乗っている人に向かって「邪魔だ」と言っている人がいる	.12	.07	-.06	<b>.66</b>	.02
v12	* Care (p-h)	食事が運ばれてくるのが遅いという理由でウェイターにコップを投げつけている人がいる	<b>.63</b>	.04	.00	.14	.04
v13	* Care (p-h)	アパートの上の階から無差別に通行人に向かって瓶を投げつけている人がいる	<b>.94</b>	-.01	-.13	-.09	.06
v14	* Care (p-h)	道路にワイヤーを仕掛けて自転車で通りがかった人が横転するのを楽しんでいる人がいる	<b>.80</b>	-.02	-.14	.06	.05
v15	* Care (p-h)	邪魔だと言ってよちよち歩きの子どもの蹴飛ばしている若い親がいる	<b>.79</b>	.00	-.05	-.02	.03
v16	* Care (p-h)	むしゃくしゃすると言って見知らぬ通行人をいきなり殴っている人がいる	<b>.92</b>	-.03	-.07	-.08	.02
v21	Fairness	自分がひいきにしているチームが勝てるようにわざと誤審をしている審判がいる	<b>.47</b>	.09	.18	.13	.00
v22	Fairness	自分の家の増築のために税金を使っている政治家がいる	<b>.71</b>	-.01	.17	.01	-.13
v23	* Fairness	地域の自治会で集めた会費を無断で自分の買い物に使っている人がいる	<b>.78</b>	.08	.04	-.02	-.04
v24	* Fairness	バスを降りるとき乗車運賃を支払わずに走って逃げていく人がいる	<b>.65</b>	-.05	.20	.04	-.05
v25	Liberty	自分が所属する政党に鞍替えするよう婚約者に求めている人がいる	-.03	<b>.55</b>	.25	.02	.01
v26	Liberty	自分のような民間航空会社のパイロットになるよう息子に要求している父親がいる	.02	<b>.86</b>	-.07	-.02	.01
v27	Liberty	有名なニュース番組のキャスターになるよう子どもに圧力をかけている親がいる	.10	<b>.81</b>	.01	.02	-.05

v28	Liberty	大学の医学部に進学するよう子どもに強制している親がいる	.01	<b>.90</b>	-.04	-.08	-.02
v29	* Liberty	自分の理想とするパートナーになるよう婚約者に言い聞かせている人がある	-.10	<b>.60</b>	-.02	.14	.10
v35	Loyalty	数学の全国競技大会で他校が勝つことを望んでいると公言している教師がいる	-.08	.13	<b>.43</b>	.08	.14
v37	Loyalty	海外で日本国民の愚かさについて冗談を言っている日本人の大使がいる	.03	-.06	<b>.86</b>	-.04	-.02
v38	Loyalty	外国人に日本は世界の邪悪勢力だと言っている日本人がいる	.00	-.07	<b>.85</b>	.02	.01
v39	* Loyalty	インターネットで日本人を辱めるような作り話を発信している日本人がいる	.07	-.07	<b>.55</b>	.14	.09
v40	* Loyalty	日本人よりも他国民の幸せのために働くと言っている日本人の外交官がいる	-.06	.10	<b>.69</b>	-.16	-.02
v41	Sanctity	夕食の料理前の冷凍鶏肉を使って性行為をしている男性がいる	-.01	.09	.07	-.05	<b>.62</b>
v42	Sanctity	インターネットで動物と性交している人達を鑑賞して楽しんでいる人がある	-.07	.07	.17	-.08	<b>.66</b>
v44	* Sanctity	動物が死んでいくときに強い性的興奮を覚えると言っている人がある	-.01	-.03	-.12	.08	<b>.78</b>
v45	Sanctity	昔から食べてはいけないと言われていた人間の肉をこっそり食べている人がある	.23	-.10	.06	.02	<b>.51</b>

注: \*は追加項目

因子相関行列	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
第1因子	1.00	-	-	-	-
第2因子	.30	1.00	-	-	-
第3因子	.44	<b>.58</b>	1.00	-	-
第4因子	<b>.69</b>	<b>.59</b>	<b>.62</b>	1.00	-
第5因子	.39	.47	<b>.60</b>	<b>.54</b>	1.00

**検証 8** 検証 7 で示された 5 因子構造について確認的因子分析を行ったところ、適合度は比較的高いといえ ( $\chi^2=551.75$ ,  $df=343$ ,  $p<.001$ ,  $\chi^2/df=1.61$ ,  $GFI=.91$ ,  $AGFI=.89$ ,  $CFI=.69$ ,  $RMSEA=.04$ ,  $AIC=677.75$ )、この結果から、日本語版 MFVs が構成概念妥当性を有していると評価した。

**検証 9** 日本語版 MFVs と、外的基準である日本語版 MFQ の各道徳基盤領域との相関をみたところ、それぞれが対応している領域の相関係数は、他の領域と比較して最も高い数値を示していた (表 15)。調査 6 の検証 6 同様に、他にも同等の相関を示している領域もあったが、概ね日本語版 MFVs が日本語版 MFQ と同様の概念構造を有し、外的基準に合致した調査票であることが示されていると評価した。

表 15 日本語版 MFVs と日本語版 MFQ の各道徳基盤領域の相関(調査 7・検証 9) (n=418)

		MFQ				
		Care	Fairness	Loyalty	Authority	Sanctity
MFVs	Care (e-w)	<b>.46</b>	<b>.43</b>	.22	.28	.41
	Care (p-h)	<b>.50</b>	<b>.51</b>	.23	.26	.43
	+Fairness					
	Liberty	.30	.29	.22	.29	.28
	Loyalty	.28	.32	<b>.52</b>	.47	.40
	Sanctity	.30	.21	.25	.25	<b>.37</b>

調査 7 の結果から、28 の項目からなる日本語版 MFVs (付録 5) が、独立した 5 つの因子構造をとらえる調査票として、Clifford *et al.* (2015) が作成した原版以上の妥当性を有するものであると評価した。

## 研究 2 考察

MFVs は、もともと米国人を対象として、既存の尺度 (MFQ や MFSS) には含まれていなかった Liberty の領域を含む 7 つの道徳的判断領域 (道徳基盤領域) を明確にとらえるシナリオセットとして作成されたものである。研究 2 では、道徳基盤理論に基づき仮定されている複数の道徳的判断領域が、日本語版 MFVs のなかで明確に示されるようになることで、道徳基盤理論の概念構造をより明らかにとらえられるようになることを目指した。調査 4 および調査 5 では、原版を忠実に翻訳して用いたが、日本人においては不道徳的とはみなされないシナリオが少なからずあり、検証結果も Clifford *et al.* (2015) とは異なっていた。そのため、Clifford *et al.* (2015) の原版を改良し、新たに日本人が理解しやすいと考えるシナリオを追加することで、日本語版 MFVs は日本人を対象とする調査票として、より高い妥当性を備え、より明らかな構造を示すことができるようになった。調査 6 および調査 7 の検証を経て、最終的に構成概念および外的基準の妥当性を有する調査票として、Care, Harm+Fairness, Loyalty, Sanctity, Liberty の 5 つの因子構造を持つ、28 の項目からなる日本語版 MFVs を提案した。しかし、最終的に示された MFVs の因子構造は、道徳基盤理論が提案している 6 つの因子構造とは若干異なっていた。Care の領域は、Clifford *et al.* (2015) の Care (emotional) のうち主として弱者 (weak) に対して焦点が当てられていると考えられ、Harm+Fairness の領域は、Clifford *et al.* (2015) の Care (physical-human) と、Fairness の領域のうち主として欺瞞 (deception) に対して焦点が当てられていると考えられた。また、Authority の領域は、いずれの調査においても独立した領域としてとらえられることはできなかった。そのなかで、明確にとらえることができなかった Care (physical) と Fairness の区別や、Loyalty と Authority の区別は、Graham *et al.* (2013) が主張している道徳基盤の 2 つの上位概念と合致するものであり、研究 1 から同様の結果がみられた。このことは、これらの領域がそれぞれ共通の基盤に基づいており、そもそも明確に区別できない領域である可能性もある (Graham *et al.*, 2013) という疑念を裏付ける結果ともなっていると考えることができた。

また、Care の領域のなかの特に弱者（weak）に対する関心や、Loyalty の領域のなかの特に国家に対する関心、また Sanctity の領域のなかの特に性的な異常さに対する関心は、それぞれの領域のなかでも特にとらえやすい、明らかな関心として示されていた。それらは、領域を代表する概念としてみられる一方、Graham *et al.* (2011) によって目指された、さまざまな角度からとらえられる道徳基盤領域の下位概念構造を正確に表しているとは言い難かった。また、このような特定の道徳的価値への関心が、日本人特有のものであるかどうかについても含め、道徳基盤理論の概念構造、すなわち道徳基盤領域の区分、およびそれぞれの下位概念や上位概念についてさらに詳細な検討が必要であると考えた。それによって、研究 1 および研究 2 で示された概念構造をより詳しく説明することが可能になるのではないかと考え、研究 3 および研究 4 を行った。

## 研究 3<sup>12</sup>

### 目的

研究 3 の目的は、道徳基盤理論の構成概念のうち、2 つの上位概念 *Individualizing foundations* (個人の尊厳) と *Binding foundations* (義務などへの拘束) から、個人の政治的志向 (イデオロギー) が予測できるとする *Graham et al.* (2009) の主張に基づき、日本人においても、これらの中に同様の関係性が認められるかどうかを検証することと、合わせて、この 2 つの上位概念と、個人の独立的／協調的、個人主義／集団主義への志向との間に関係性があるかどうかについても検討することである。

### 方法

調査期間は、2018 年 9 月 14 日～20 日で、データ収集は研究 1・研究 2 と同じ調査会社に委託し、オンライン調査として行った。調査票はマトリックス形式で、それぞれの評定法で選択回答させ、これをデータとして収集した。

**対象** 標本<sup>13</sup>は、18 歳以上 60 歳以下の日本人 800 人で、同社に登録されている日本全国の 100 万人を超えるモニターパネルのなかから、男女比、年齢層比が平均化されるよう配慮して、無作為に抽出された。

**材料** フェイスシートでは、性別 (男／女) (2 択)、年齢層 (18～20 歳／21～30 歳／31～40 歳／41～50 歳／51～60 歳) (5 択)、政治的な考え方 (保守主義的／やや保守主義的／やや自由主義的／自由主義的／どちらでもない) (5 択)、最も興味を持つニュース (選択肢 12, 付録 8) について確認した。

日本語版 MFQ は、研究 1, 研究 2 で使用したのと同じものを用いた (付録 1)。MFQ1 では、「ある人の行為が倫理的に正しいか間違っているかを判断するとき、次のような判断材料はあなたの考え方にどの程度関係するか」を、「1: まったく関係しない (判断にまったく無関係)」から「6: 極めて関係する (判断に最も重要)」の 6 段階で評価させた。MFQ2 では、道徳原理にかかる内容に対して「あなたはどの程度同意するか」を、「1: まったく同意しない」から「6: 非常に同意する」の 6 段階で評価させた。そして、MFQ1, MFQ2 のそれぞれにおいて、操作チェックの 2 項目を除く各 15 項目のそれぞれ 1～6 点の得点を 5 つのカテゴリー (道徳基盤領域) 毎に合算し、さらに平均を算出した。

相互独立的－相互協調的自己観尺度 (高田, 2000) は、個人は他者とは区別される独立した存在と考える「相互独立的自己観」と、個人はさまざまな人間関係により成り立っていると考える「相互協調的自己観」という 2 つの自己観 (Markus & Kitayama, 1991) を測る尺度である。本調査では、短縮版 10 項目 (高田, 2000) (付録 6) を用い、それぞれの項目内容に対し「あなた自身にどの程度あてはまるか」を「1: 全くあてはまらない」から「7: ぴったりあてはまる」の 7 段階で評価させた。そして、「相互独立的自己観」(4 項目) と「相互協調的自己観」(6 項目) のそれぞれにおいて各項目 1～7 点の得点を合算し、さらに平均を算出した。

<sup>12</sup> 研究 3 は、青山 (2019b) で実施されたものである。

<sup>13</sup> 標本は、研究 1・調査 2 と同じ標本である。

縦型／横型－集団主義・個人主義尺度 (Triandis & Gelfand, 1998; 大橋, 2007; 富岡, 2017) は、従来の「個人主義」とそれに対する「集団主義」という考え方に、「平等」(横型)と「階層」(縦型)の水準を加えた、個人主義でありながら平等をより重視する「横型個人主義」と、階層をより重視する「縦型個人主義」、集団主義のなかでも平等をより重視する「横型集団主義」と、階層をより重視する「縦型集団主義」の4つの文化的志向を測る尺度 (Triandis, 1995; 1996) である。本調査では、短縮版16項目 (大橋, 2007; 富岡, 2017) (付録7) を用い、それぞれの項目内容に対し「あなた自身にどの程度あてはまるか」を「1: 全くあてはまらない」から「7: 非常にあてはまる」の7段階で評価させた。そして、「横型個人主義」(4項目)、「縦型個人主義」(4項目)、「横型集団主義」(4項目)、「縦型集団主義」(4項目)のそれぞれにおいて各項目1～7点の得点を合算し、さらに平均を算出した。

設問にあたっては、それぞれの尺度内で同じカテゴリーの項目が続かないよう、また、それぞれの項目を無作為に提示して順序効果を回避した。

**分析** 検証10では、日本語版MFQの5つの道徳基盤のそれぞれの得点の平均を、政治的な考え方(政治的志向)として示された5水準(自由主義的／やや自由主義的／どちらでもない／やや保守的／保守的)で分散分析を行い、政治的志向によって道徳基盤の得点に有意な差があるかどうかを評価し、さらにこの結果をGraham *et al.* (2009) および青山 (2016) の調査データを用いて分析した結果と比較して評価した。また、5つの道徳基盤の上位概念を仮定した2因子構造について、先行研究 (Graham *et al.*, 2011; 村山・三浦) に倣い、5因子構造 (Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctity の5つの道徳基盤を仮定) および3因子構造 (Care, Fairness を1因子, Loyalty, Authority を1因子, Sanctity を1因子と仮定) の適合度と比較して評価した。

検証11では、日本語版MFQの上位概念2因子 Individualizing foundations (個人の尊厳), Binding foundation (義務などへの拘束) と、相互独立的－相互協調的自己観尺度 (高田, 2000) の2因子「相互独立的自己観」「相互協調的自己観」の間の相関係数を算出し、相関の度合いを評価した。さらに、政治的な考え方(政治的志向)の5水準における「相互独立的自己観」「相互協調的自己観」のそれぞれの合計得点の平均を比較し、政治的志向によって独立的－協調的な志向を示す得点に有意な差があるかどうかを評価した。

検証12では、日本語版MFQの上位概念2因子 Individualizing foundations (個人の尊厳), Binding foundations (義務などへの拘束) と、縦型／横型－集団主義・個人主義尺度 (Triandis & Gelfand, 1998; 大橋, 2007; 富岡, 2017) の4因子「横型個人主義」「縦型個人主義」「横型集団主義」「縦型集団主義」の間の相関係数を算出し、相関の度合いを評価した。また合わせて、政治的な考え方(政治的志向)の5水準における「縦型個人主義」「横型個人主義」「縦型集団主義」「横型集団主義」のそれぞれの合計得点の平均を比較し、政治的志向によって個人主義－集団主義的な志向を示す得点に有意な差があるかどうかを評価した。

### 研究3の結果

まず、MFQの2問の操作チェックから、800のうち144のデータを無効とし、残りの656(82%)のデータを採用した。

**検証10** 日本語版MFQで想定されている5つの道徳基盤領域毎に1項目あたりの平均得点を算出し、政治的な考え方(政治的志向)の5水準において比較したところ、MFQ1で

は、Care ( $F=2.52, p<.05$ ), Fairness ( $F=3.71, p<.01$ ), Loyalty ( $F=3.79, p<.01$ ), Authority ( $F=3.08, p<.05$ ), Sanctity ( $F=2.59, p<.05$ ) の 5 つの因子は、いずれも政治的志向において有意な差があると認められ、上位概念においても、Individualizing foundations ( $F=3.43, p<.01$ ), Binding foundations ( $F=3.57, p<.01$ ) はいずれも政治的志向において有意な差があると認められた。

MFQ2においても、Care ( $F=2.33, p=.06$ ), Fairness ( $F=2.82, p<.05$ ), Loyalty ( $F=5.36, p<.05$ ), Authority ( $F=8.16, p<.05$ ), Sanctity ( $F=2.59, p<.05$ ) と、Care 以外の 4 つの因子については、政治的志向における有意な差があると認められ、上位概念においても、Individualizing foundations ( $F=5.59, p<.05$ ), Binding foundations ( $F=9.81, p<.01$ ) はいずれも政治的志向において有意な差があると認められた。

MFQ1 および MFQ2 を通して、Graham *et al.* (2009) における米国人を対象に行われた調査結果と比較し、Individualizing foundations の 2 因子 (Care, Fairness) は保守主義者よりも自由主義者 (リベラル) で得点が高く、Binding foundations の 3 因子 (Loyalty, Authority, Sanctity) のうち Loyalty と Authority は、自由主義者 (リベラル) よりも保守主義者のほうが得点が高いという特徴を同様に示していた。しかし、その有意差は米国人ほど顕著ではなく、また、Binding foundations のうちの Sanctity は、日本人では自由主義者 (リベラル) でも保守主義者と同様あるいはそれ以上の得点の高さを示し、米国人とは異なる傾向をみせた。この傾向は、Graham *et al.* (2011) においても言及され、また、村山・三浦 (2019) でも同様の傾向が報告された。

一方、青山 (2016) の調査データを用いて分析した MFQ1 では、Care ( $F=1.47, p=.21$ ), Fairness ( $F=.78, p=.54$ ), Loyalty ( $F=6.26, p<.01$ ), Authority ( $F=4.66, p<.01$ ), Sanctity ( $F=3.74, p<.01$ ) という結果で、政治的志向において Loyalty, Authority, Sanctity のみに有意な差が認められ、上位概念においては、Individualizing foundations ( $F=1.15, p=.33$ ), Binding foundations ( $F=5.50, p<.01$ ) のうち、Binding foundations にのみ有意な差が認められた。

青山 (2016) の調査データを用いて分析した MFQ2 においても、Care ( $F=1.10, p=.36$ ), Fairness ( $F=1.08, p=.36$ ), Loyalty ( $F=13.24, p<.01$ ), Authority ( $F=15.34, p<.01$ ), Sanctity ( $F=9.76, p<.01$ ) という結果で、政治的志向において Loyalty, Authority, Sanctity のみに有意な差が認められ、上位概念においても、Individualizing foundations ( $F=1.11, p=.35$ ), Binding foundations ( $F=18.73, p<.01$ ) のうち、Binding foundations にのみ有意な差が認められた。

これらを Graham *et al.* (2009) の結果と比較したグラフを図 1～図 6 に示す。ただし、Graham *et al.* (2009) で用いられた調査票は、現在 MFQ として用いられている項目とは若干異なっており全く同じとはいえない。また、米国のデータは 0～5 点、本調査は 1～6 点の 6 段階で配点しているため、算出された平均値は本調査のほうが高くなっている。

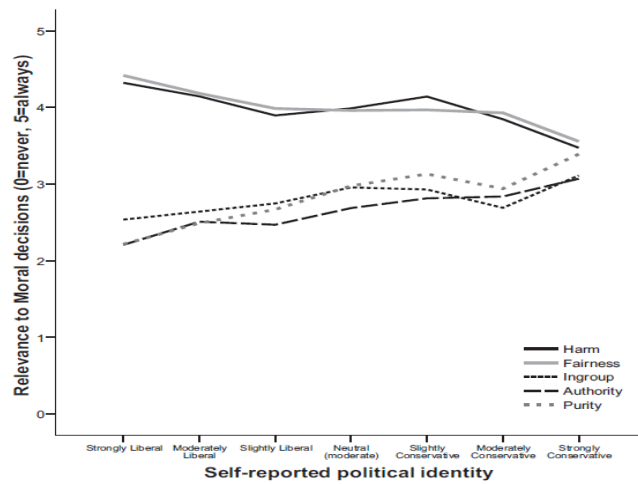


図 1 MFQ1 道徳基盤と政治的志向 (Graham *et al.*, 2009)

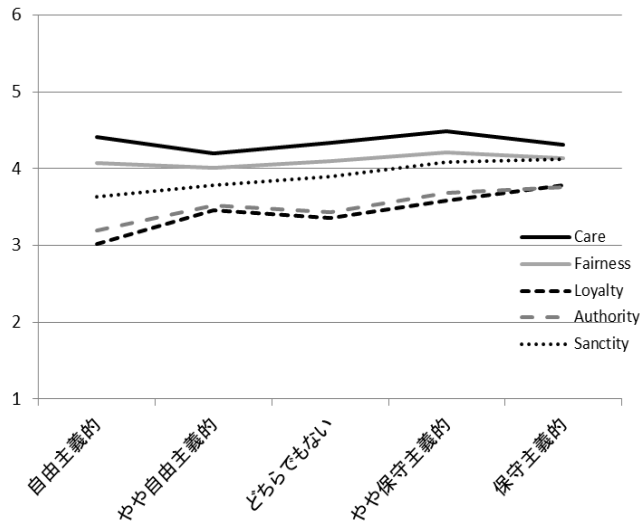


図 2 MFQ1 道徳基盤と政治的志向 (青山, 2016)

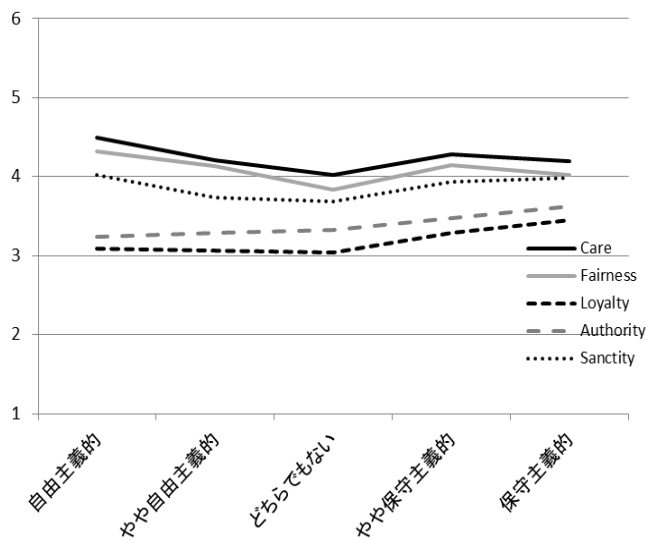


図 3 MFQ1 道徳基盤と政治的志向 (青山, 2019b)



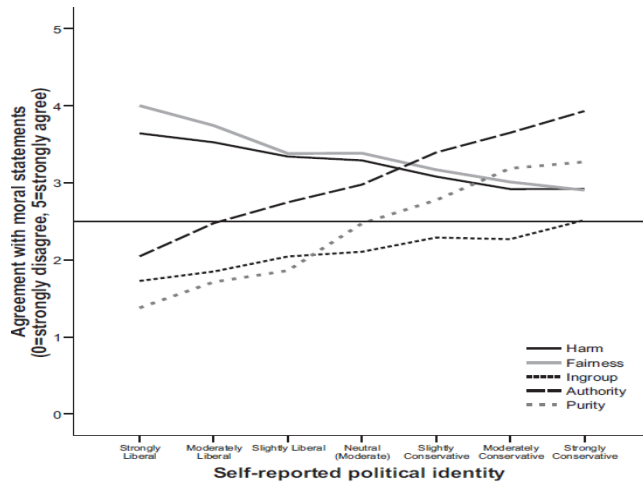


図 4 MFQ2 道德基盤と政治的志向 (Graham *et al.*, 2009)

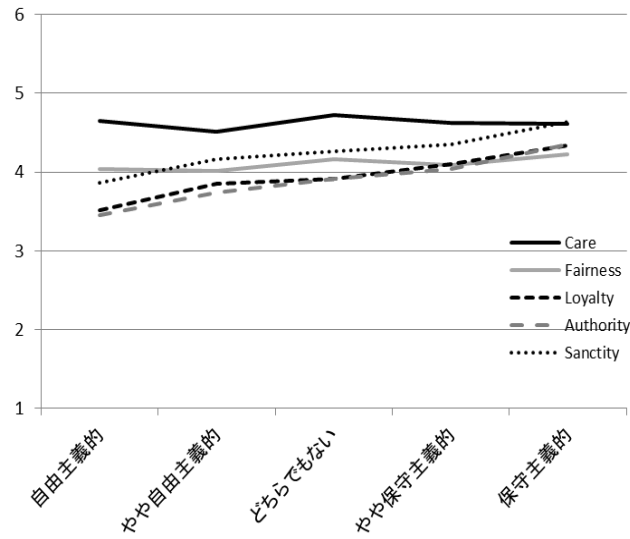


図 5 MFQ2 道德基盤と政治的志向 (青山, 2016)

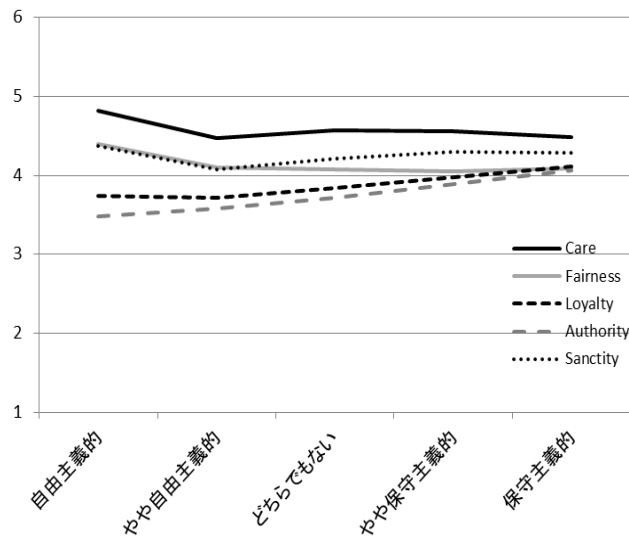


図 6 MFQ2 道德基盤と政治的志向 (青山, 2019b)

**検証 11** 日本語版 MFQ の上位概念 2 因子 Individualizing foundations (個人の尊厳), Binding foundations (義務などへの拘束) と、相互独立的—相互協調的自己観尺度 (高田, 2000) の 2 因子「相互独立的自己観」「相互協調的自己観」の相関について検証した結果を表 16 に示す。MFQ1 では、Individualizing foundations, Binding foundations のいずれの因子も、「相互独立的自己観」「相互協調的自己観」のいずれの因子にも相関はほとんど示さなかった。MFQ2 では、Individualizing foundations, Binding foundations とともに「相互独立的自己観」の因子には相関をほとんど示さなかったが、「相互協調的自己観」には低いながらも正の相関を示した (Individualizing foundations:  $r=.21, p<.01$ ; Binding foundations:  $r=.28, p<.01$ )。また、MFQ1 と MFQ2 を合わせた全体でも「相互独立的自己観」には相関をほとんど示さず、「相互協調的自己観」には低い正の相関を示した (Individualizing foundations:  $r=.22, p<.01$ ; Binding foundations:  $r=.27, p<.01$ )。

表 16 MFQ の 2 つの上位概念と個人主義／集団主義の相関 (青山, 2019b)

	MFQ	相互独立 的自己観	相互協調 的自己観	横型(平等) 個人主義	縦型(階層) 個人主義	横型(平等) 集団主義	縦型(階層) 集団主義
個人の尊厳	1	.034	.164**	.010	.007	.256**	.134**
Individualizing foundations	2	.091*	.212**	.120**	-.006	.303**	.288**
	1+2	.069	.222**	.066	.002	.333**	.237**
義務などへの拘束	1	.070	.177**	.067	.148**	.228**	.291**
Binding foundations	2	.105**	.282**	.166**	.215**	.256**	.500**
	1+2	.102**	.266**	.131**	.212**	.288**	.455**

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

また、政治的な考え方 (政治的志向) の 5 水準毎に「相互独立的自己観」「相互協調的自己観」のそれぞれの得点の平均を算出した (図 7) と、ところ、「相互独立的自己観」( $F=6.97, p<.01$ )、「相互協調的自己観」( $F=5.07, p<.01$ ) とともに、政治的志向において有意な差が認められた。

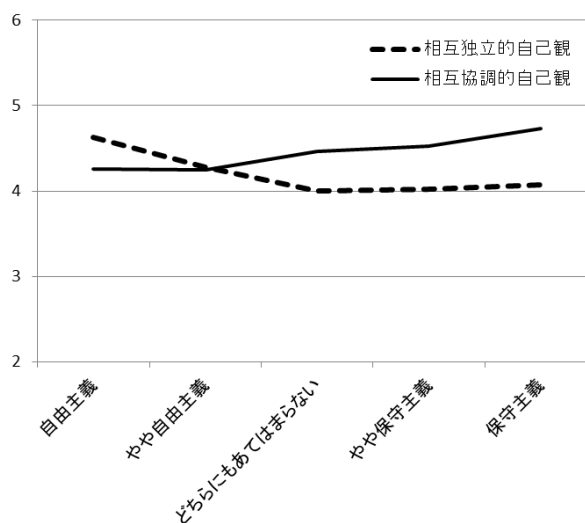


図 7 相互独立的／相互協調的自己観と政治的志向の関係 (青山, 2019b)

**検証 12** 日本語版 MFQ の上位概念 2 因子 Individualizing foundations (個人の尊厳), Binding foundations (義務などへの拘束) と, 縦型／横型－集団主義・個人主義尺度 (Triandis & Gelfand, 1998; 大橋, 2007; 富岡, 2017) の 4 因子「横型個人主義」「縦型個人主義」「横型集団主義」「縦型集団主義」との相関について検証した結果を表 16 に示す。MFQ1 では, Individualizing foundations は「横型集団主義」( $r=.26, p<.01$ ) にのみ低い正の相関を示し, Binding foundations は「横型集団主義」( $r=.23, p<.01$ ) と「縦型集団主義」( $r=.29, p<.01$ ) にのみ低い正の相関を示した。MFQ2 では, Individualizing foundations は「横型集団主義」( $r=.30, p<.01$ ) と「縦型集団主義」( $r=.29, p<.01$ ) にのみ低い正の相関を示し, Binding foundations は「縦型個人主義」( $r=.22, p<.01$ ), 「横型集団主義」( $r=.26, p<.01$ ) および「縦型集団主義」( $r=.50, p<.01$ ) に正の相関を示した。MFQ1 と MFQ2 を合わせた全体でも, Individualizing foundations は「横型集団主義」( $r=.33, p<.01$ ) と「縦型集団主義」( $r=.24, p<.01$ ) に低い正の相関を示し, Binding foundations は「縦型個人主義」( $r=.21, p<.01$ ), 「横型集団主義」( $r=.29, p<.01$ ) および「縦型集団主義」( $r=.46, p<.01$ ) に正の相関を示し, 全体として Individualizing foundations, Binding foundations とともに集団主義との相関を示した。

また, 政治的な考え方 (政治的志向) の 5 水準毎に「横型個人主義」「縦型個人主義」「横型集団主義」「縦型集団主義」のそれぞれの得点の平均を算出した (図 8) と, 「横型個人主義」( $F=4.36, p<.01$ ), 「縦型個人主義」( $F=2.65, p<.05$ ) で政治的志向において有意な差が認められたが, 「横型集団主義」( $F=.48, p=.75$ ), 「縦型集団主義」( $F=1.73, p=.14$ ) では有意な差は認められなかった。

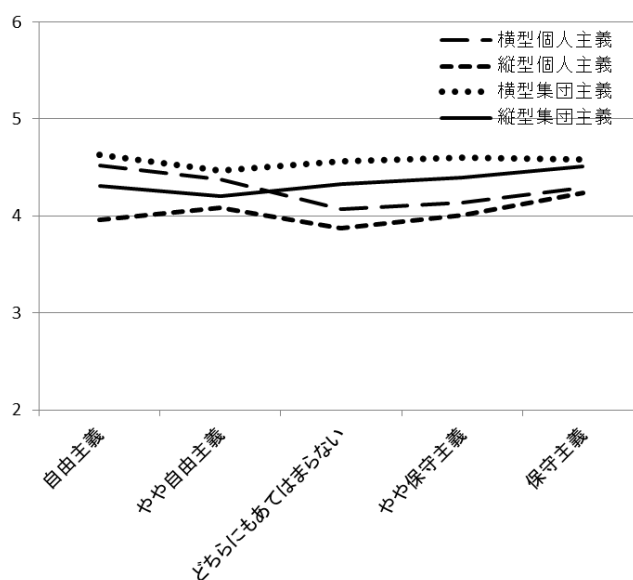


図 8 個人主義的／集団主義的志向と政治的志向の関係 (青山, 2019b)

### 研究3の考察

研究3の結果から、日本語版 MFQ が仮定する道徳基盤の5因子（MFQ1ではCareを除く4因子のみ）と、その上位概念とされる *Individualizing foundations* と *Binding foundations* の2因子のいずれにおいても、政治的志向において有意な差があることが示された。これは、日本人においても、5つの道徳基盤から個人の政治的志向をある程度予測することができることを意味しており、Graham *et al.* (2009) が主張する、自由主義者（リベラル）は保守主義者よりも *Individualizing foundations*（個人の尊厳）に関する基準により高く依拠し、保守主義者は自由主義者（リベラル）よりも *Binding foundations*（義務などへの拘束）に関する基準により高く依拠していることを意味している。

しかし、これらの有意差は Graham *et al.* (2009) の結果と比較してかなり低く、このことは、道徳的判断において、日本人はそれぞれの道徳基盤への依拠の比重に極端な差がないということの意味しており、また、自由主義者（リベラル）も保守主義者も、道徳的な価値観に米国人ほど大きな違いを示していないということの意味している。

一方、道徳基盤と個人の独立的／協調的、個人主義的／集団主義的な志向との関係では、自由主義者（リベラル）がより高い依拠を示すとされる *Individualizing foundations*（個人の尊厳）と、保守主義者がより高い依拠を示すとされる *Binding foundations*（義務などへの拘束）という道徳基盤の2つの上位概念からは、個人の独立的／協調的、あるいは個人主義的／集団主義的な志向を説明することはできなかった。このことは、2つの上位概念が「個人志向」や「集団志向」を直接的に示しているものではないことを意味していると考えられた。

独立的／協調的な自己観と政治的志向の関係では、自由主義（リベラル）への信条が強いほど、より独立的な自己観を持ち、保守主義への信条が強いほど、より協調的な自己観を持っていることが明らかになり（図7）、政治的志向から独立的／協調的な自己観（あるいはその逆）を予測することができうることが示された。一方、平等性／階層性を持つ個人主義／集団主義と政治的志向の関係では、政治的志向にかかわらず、いずれも「横型集団主義」への志向が最も高く、「縦型個人主義」への志向が最も低かった。

これらの結果から、日本人は自由主義（リベラル）も保守主義も、政治的志向にかかわらず、協調的あるいは平等に重きをおく集団主義的な価値体系を志向しているとみることができ、そのなかで、自由主義者（リベラル）がどちらかといえば平等に重きをおく個人主義を支持し、保守主義者がどちらかといえば階層に重きをおく集団主義を支持しているところに、その違いをみることができると考えられた。

本調査において、米国人とは異なるもう一つの傾向としてとらえられたのが *Sanctity* の基盤の得点の高さであった。自由主義（リベラル）、保守主義にかかわらず、日本人は *Sanctity* に関する基準に比較的高い依拠を示し（図1～図6）、この傾向が東アジアの人びとに多くみられるとする Graham *et al.* (2011) や村山・三浦 (2019) の研究結果を支持するものとなった。本調査の結果は、青山 (2016) の特に自由主義者（リベラル）の傾向において若干の違いがみられたが、本調査の結果からは、*Sanctity* の傾向が *Binding foundations* (*Loyalty & Authority*) よりもむしろ *Individualizing foundations* (*Care & Fairness*) の傾向に近い、あるいはいずれの傾向とも異なる、独立した体系としてとらえられるのではないかと考えられた。

また、参考までに、5つの道徳基盤のそれぞれの平均得点を、「最も興味を持つニュース」毎に算出したところ、Sanctityの基盤を想定した「寺社仏閣の文化財の毀損や窃盗」のニュースに最も関心を示した人は、Sanctityのみならず全ての基盤で高い得点を示していた（図9）。このことは、寺社仏閣という精神性にも関りうる問題に高い関心を有している人は、他の道徳的問題にも高い関心を示し、全体として高い道徳性を持っていることをうかがわせるものであった（図9）。

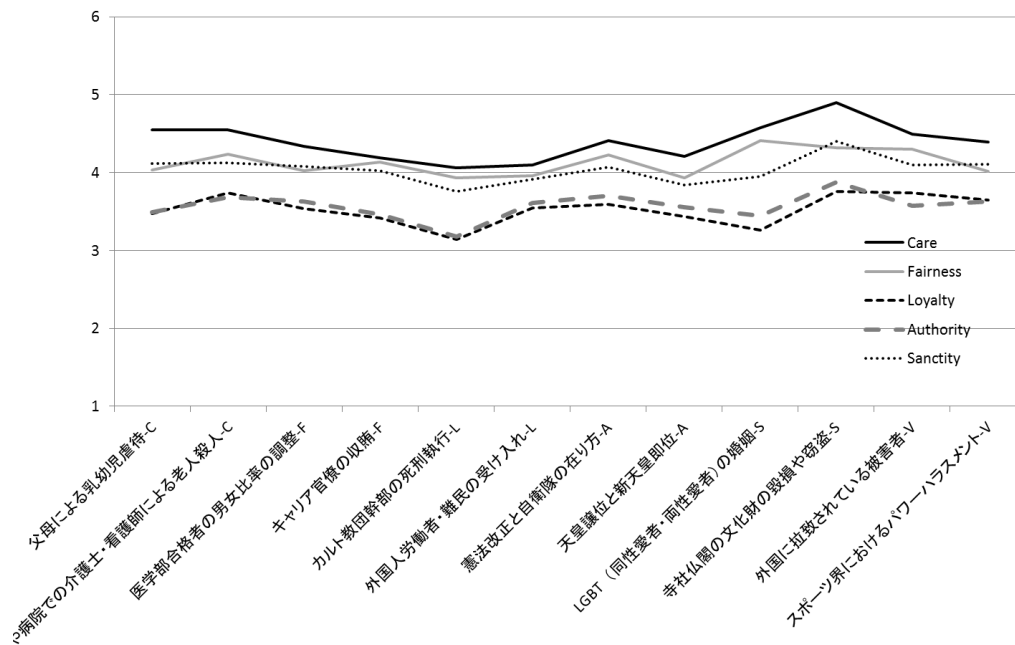


図9 道徳基盤とニュースへの関心（青山, 2019b）

研究3の結果から、道徳基盤領域の2つの上位概念が、個人のイデオロギーを予測できるとする道徳基盤理論の主張は、日本人においてもある程度予測できることが示された。しかし、先行研究で示された米国人の結果と比較して、日本人の個体差は小さく、Sanctityの領域への依拠も、米国人とは若干異なる傾向を持っている可能性が示唆された。また、道徳基盤領域の2つの上位概念から示された個人の傾向性は、単純な個人／集団への志向から説明できるものではなく、他の要因によって説明されうるものである可能性がうかがえた。道徳基盤理論に基づく構成概念をさらに詳しくとらえていくために、それぞれの道徳基盤領域の下位概念についても研究4で検討していく。

## 研究 4

### 目的

研究 4 の目的は、道徳基盤領域のそれぞれについて、影響関係にあると考えられる感受性あるいは傾向性との関係性をとらえていくことである。具体的には、個体の援助規範意識、正当世界信念、公正感受性、愛国心／国家主義に代表される国民意識（ナショナル・アイデンティティ）、嫌悪感受性と、道徳的判断の関係性をとらえていくことを試みた。それによって、それぞれの道徳基盤の概念が含有するより詳細な意味をとらえ、説明していくことを目指した。

### 方法

調査期間は、2020 年 5 月 29 日～31 日で、データの収集は研究 1～3 と同じ調査会社に委託し、オンライン調査として行った。調査票はマトリックス形式で、それぞれの評定法で選択回答させ、これをデータとして収集した。

**対象** 標本<sup>14</sup>は、18 歳以上 60 歳以下の、日本で生まれ育った日本人 500 人で、同社に登録されている日本全国の 100 万人超のモニターから、男女比、年齢層比が平均化されるように、無作為に抽出された。

**材料** フェイスシートでは、性別（男／女）（2 択）、年齢層（18～20 歳／21～30 歳／31～40 歳／41～50 歳／51～60 歳）（5 択）、政治的な考え方（保守主義的／やや保守主義的／やや自由主義的／自由主義的／どちらでもない）（5 択）を確認した。

日本語版 MFQ は、研究 1～3 で用いたものと同じものを使用した（付録 1）。MFQ1 では、「ある人の行為が倫理的に正しいか間違っているかを判断するとき、次のような判断材料はあなたの考え方にどの程度関係しますか」という問いに続き、各項目について「1: まったく関係しない（判断にまったく無関係）」から「6: 極めて関係する（判断に最も重要）」の 6 段階で評価させた。MFQ2 では、「次の文を読んで、あなたがどの程度同意するかを、以下の 6 段階から選んでください」という問いに続き、各項目について「1: まったく同意しない」から「6: 非常に同意する」の 6 段階で評価させた。そして、操作チェックの 2 項目を除く各 15 項目のそれぞれの得点を 5 つのカテゴリー（道徳基盤領域）毎に合算して平均得点を算出した。

日本語版 MFVs は、MFQ の補助的な調査票として、研究 2 で用いたものと同じものを使用した（付録 5）。「次にあげるシナリオを実際あなたが目にしている光景として想像してください。そのうえで、それらの行為を以下の 5 段階で評価してください。」という問いに続き、各シナリオが描写している第三者の態度を「1: まったく悪くない」から「5: 極めて悪い」の 5 段階で評価させた。そして、それぞれの得点を 5 つのカテゴリー（道徳基盤領域）毎に合算して平均得点を算出した。

援助規範意識尺度（箱井・高木, 1987）は、「返済規範意識」（9 項目）、「自己犠牲規範意識」（8 項目）、「交換規範意識」（5 項目）、「弱者救済規範意識」（7 項目）の 4 つの側面から、個人に内在化する愛他的行動の基準となる規範意識の高さを測定する尺度である（付

<sup>14</sup> 標本は、研究 2・調査 7 と同じ標本である。

録 9)。箱井・高木（1987）によれば、「返済規範意識」は、「恩」として表される互惠的—補償的な規範意識を含み、「自己犠牲規範意識」は、「愛他心」として表される自己犠牲的—利己的な規範意識を含んでいる。「交換規範意識」は、「見返り」として表される援助を相互交換的にとらえる意識から構成され、「弱者救済規範意識」は、「救済」として表される弱者や困っている人に手をさしのべる意識から構成されている、と説明されている。「以下にはさまざまなきまりが示されています。それぞれの内容について、あなたはどのように考えますか。項目ごとに該当する番号を選択して下さい。」という教示に続き、それぞれの設問について、「1: 非常に反対する」から「5: 非常に賛成する」の 5 段階で評価させた。そして、それぞれの項目の得点をカテゴリー毎に合算して平均得点を算出した。

正当世界尺度（今野・堀，1998）は、正当世界への原因帰属、すなわち秩序や経験的な感覚からは説明できない出来事の原因帰属を、正義に適った本来的で妥当な結果であるという見方に発展させる、その認知的傾向を測定する尺度として作成された。正当（公正）世界信念の強さを、「正の投入に対して正の結果が伴う」、「負の投入に対して負の結果が伴う」という主旨に基づく 2 項目と、それぞれの逆転項目の、合計 4 項目からとらえようとした調査票である（今野・堀，1998）（付録 11）。「以下の文章を読んで、あなたの普段の考え方にあてはまる程度を選んでください。」という教示に続き、「Q1 この世の中では、努力はいつか報われるようになっている。」「Q2 この世の中では、努力や実力が報われない人が数多くいる。」「Q3 この世界では、悪いことをしたものは必ずその報いを受ける。」「Q4 この世の中では、悪いことや間違ったことをしても見逃される人が数多くいる。」の各項目（このうち Q2 と Q4 は逆転項目である）について、「1: あてはまらない」から「5: あてはまる」の 5 段階で評価させた。そして、それぞれの項目の得点をカテゴリー毎に合算して平均得点を算出した。

日本語版公正感受性尺度（ターン・橋本・シュミット・唐沢，2019；以下，JSI-J という）は、Schmitt, Baumert, Gollwitzer, & Maes (2010) が作成した公正感受性尺度 (Justice Sensitivity Inventory) を忠実に日本語訳したもので、個体毎に異なる公正さに対する感じやすさ（感受性）を、他者から不公正に扱われたときの被害者としての反応 (victim sensitivity) : 被害者公正感受性 (JS<sub>victim</sub>: 以下, 被害者 JS という), 不公正な出来事を第三者として見聞きしたときの観察者としての反応 (observer sensitivity) : 第三者公正感受性 (JS<sub>observer</sub>: 以下, 第三者 JS という), 他者の損失によって自己に利益がもたらされたときの受益者としての反応 (Beneficiary sensitivity) : 受益者公正感受性 (JS<sub>beneficiary</sub>: 以下, 受益者 JS という), 自己が不当に利益を得たときの加害者としての反応 (perpetrator sensitivity) : 加害者公正感受性 (JS<sub>perpetrator</sub>: 以下, 加害者 JS という), の 4 つの側面からとらえようとする調査票である。本調査では、ターンら (2019) のなかで、ある程度の妥当性があるとみなされた、8 項目からなる短縮版を使用した (付録 10)。「これから、不公平な状況に関するあなたの考えをおたずねします。不公平な状況が起きたとき、その不公平を引き起こした人、それによって不利な状況に置かれる人、それによって有利な状況に置かれる人、それを第三者として見ている人など、様々な立場の人がいます。次ページ以降では、それぞれの立場におけるあなたの考えについてお答えください。」という教示に続き、それぞれの設問について、「1: まったく当てはまらない」から「6: 大変よく当てはまる」の 6 段階で評価させた。そして、それぞれの項目の得点をカテゴリー毎に合算して平均得点を算出した。

国民意識（ナショナル・アイデンティティ）尺度（唐沢, 1994）は、「国家的遺産への愛着」（8項目）「愛国心」（7項目）、「国家主義」（6項目）、「国際主義」（6項目）の4つの概念（合計27項目）から、個人毎に異なるナショナル・アイデンティティ（国民的・民族的な連帯意識）の高さを測る尺度である。これは、Kosterman & Feshbach（1989）の国民意識の3因子（「愛国心」「国家主義」「国際主義」）に、日本人に特有と考える1因子（「国家的遺産への愛着」）が加えられたものである。本調査では、このうちの「愛国心」と「国家主義」の合計13項目のみを使用した（付録12）。「以下の各文について、あなたの考えにあてはまる評価を選択してください」という問いに、「1: 反対」から「5: 賛成」の5段階から選択させた。そして、それぞれの項目の得点を2つのカテゴリー毎に合算して平均得点を算出した。

改訂嫌悪尺度（Disgust Scale-Revised; DS-R; Haidt, McCauley & Rozin, 1994; Olatunji, Williams, Tolin, Abramowitz, Sawchuk, Lohr, & Elwood, 2007; Olatunji, Haidt, McKay, & David, 2008）は、中核的嫌悪（12項目）、動物性嫌悪（8項目）、汚染嫌悪（5項目）の3つの概念（合計25項目）から、個体毎に異なる嫌悪感受性を測る尺度である。日本語版（Japanese version of the Disgust Scale-Revised; 以下、DS-R-Jという）は、岩佐・田中・山田（2018）によって検証され、信頼性が低いとみなされた7項目が除外されて、2つのパートを合わせて18項目と、各パートに1問ずつの操作チェックを含め、合計20項目で構成されている（付録13）。最初のパートは、「以下の文章を読んで、それぞれの文章が自分にどの程度当てはまるかを、1: 全く当てはまらない、から、5: とても当てはまる、までで評価してください」という問いに続き、各項目5段階で評価させた。次のパートでは、「以下のような経験によって、どの程度嫌悪感（嫌な気持ち）を感じるか、1: 全く嫌な気持ちにならない、から、5: 極度に嫌な気持ちになる、までの間で、評価してください」という問いに続き、各項目5段階で評価させた。そして、それぞれの項目の得点をカテゴリー毎に合算して平均得点を算出した。

調査票は、フェイスシート、日本語版 MFVs, 日本語版 MFQ, 援助規範意識尺度, 正当世界尺度, JSI-J, 国民意識尺度, DS-R-J の順に提示し、それぞれの尺度内で同じカテゴリーが続かないよう、また、それぞれの項目を無作為に提示して順序効果を回避した。



## 調査 8 援助規範意識と道徳基盤

調査 8 の目的は、個体における援助規範意識と、道徳的判断の関係性についてとらえ、さらに、道徳基盤理論に基づく道徳基盤の下位概念からの説明を試みていくことである。

### 分析

検証 13 援助規範意識の 4 因子（「返済規範意識」「自己犠牲規範意識」「交換規範意識」「弱者救済規範意識」と、MFQ の 5 因子（Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctity）と上位概念の 2 因子（Individualizing foundations, Binding foundations）、および MFVs の 6 因子（Care(weak), Harm, Fairness, Liberty, Loyalty, Sanctity）との関係性について、相関係数を算出し、関係性の高さを統計的に評価した。

検証 14 援助規範意識の 4 因子と、MFQ の 30 全ての項目、すなわち道徳基盤の下位概念との関係性について、相関係数を算出し、関係性の高さを統計的に評価した。

### 調査 8 の結果

まず、MFQ の 2 問の操作チェックから、500 のデータのうち 82 のデータを無効とし、418 (83.6%) のデータを採用した。

検証 13 援助規範意識と道徳基盤の相関の結果を表 17 に示す。援助規範意識の 4 因子のうち、「返済規範意識」と「弱者救済規範意識」は、MFQ の全ての道徳基盤と有意な正の相関を示した。一方、「自己犠牲規範意識」と「交換規範意識」は、MFQ の Care の領域にのみ低い相関を示しただけであった。MFVs でも、「返済規範意識」「弱者救済規範意識」が Individualizing Foundation に近い Care (weak), Harm, Fairness の 3 つの領域との低い相関を示したが、他の Liberty, Loyalty, Sanctity の領域では、有意ではあったものの相関は非常に低くほとんど認められなかった。また、「自己犠牲規範意識」は MFVs のいずれの道徳基盤ともほとんど相関を示さず、「交換規範意識」は MFVs の Sanctity の領域に低い相関を示したのみであった。

表 17 援助規範意識と道徳基盤との相関（調査 8・検証 13）（ $n=418$ ）

尺度	道徳基盤	返済規範意識	自己犠牲 規範意識	交換規範意識	弱者救済 規範意識
MFQ	Care	.331**	.210**	.248**	.512**
	Fairness	.331**	.074	.149**	.434**
	Loyalty	.309**	.027	.095	.336**
	Authority	.257**	-.084	.086	.227**
	Sanctity	.391**	.051	.184**	.408**
	Individualizing foundations	.358**	.157**	.217**	.514**
	Binding foundations	.361**	-.002	.138**	.366**
MFVs	Care (weak)	.225**	.132**	.166**	.365**
	Harm	.226**	-.021	.089	.342**
	Fairness	.224**	-.030	.147**	.305**

Liberty	.099*	.066	.044	.193**
Loyalty	.153**	-.007	.179**	.195**
Sanctity	.126*	.107*	<b>.234**</b>	.146**

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

**検証 14** 援助規範意識と道徳基盤の下位項目の相関の結果を表 18 に示す。「弱者救済規範意識」は、MFQ の Care の項目の全てと有意な正の相関を示し、Fairness, Loyalty, Sanctity でもほとんどの項目との相関を示していた。「返済規範意識」も、Care, Fairness, Sanctity の多くの項目と、低いながらも幅広い相関を示していた。一方、「自己犠牲規範意識」は、Care の領域の「思いやり compassion」( $r=.24$ )と「殺人 kill」( $r=.21$ )の項目に低い相関を示したのみで、「交換規範意識」も、Care の領域の「殺人 kill」( $r=.36$ )の項目のほか、「動物 animal」( $r=.22$ )、Fairness の領域の「公平 fairly」( $r=.20$ )、Sanctity の領域の「不快 harmless disgusting」( $r=.23$ )の項目に低い相関を示したのみであった。

表 18 援助規範意識と道徳基盤の下位項目との相関（調査 8・検証 14）( $n=418$ )

No.	道徳基盤	下位概念		返済	自己犠牲	交換	弱者救済
				規範意識	規範意識	規範意識	規範意識
q1	Care	emotionally	精神	.207**	.112*	.020	<b>.341**</b>
q2		weak	弱者	.220**	.111*	.129**	<b>.386**</b>
q3		cruel	残虐	.210**	.061	.137**	<b>.320**</b>
q16		compassion	思いやり	<b>.333**</b>	.240**	.127**	<b>.474**</b>
q17		animal	動物	.280**	.129**	.223**	<b>.342**</b>
q18		kill	殺人	.138**	.213**	<b>.362**</b>	.256**
q4	Fairness	treated	待遇	.173**	.051	.074	.256**
q5		unfairly	不当	.299**	-.020	.137**	<b>.302**</b>
q6		rights	権利	.220**	-.028	-.020	.283**
q19		fairly	公平	.254**	.143**	.201**	<b>.412**</b>
q20		justice	正義	<b>.320**</b>	.087	.137**	.285**
q21		rich	裕福	-.008	.056	.044	.093
q7	Loyalty	love country	愛国	.157**	-.043	.047	.146**
q8		betray	裏切り	.202**	-.130**	.013	.224**
q9		loyalty	忠誠	.161**	.040	.136**	.179**
q22		history	歴史	.213**	-.025	.060	.200**
q23		family	家族	.192**	.155**	.034	.270**
q24		team	チーム	.243**	.120*	.066	.251**
q10	Authority	respect	敬意	.128**	-.079	.037	.111*
q11		traditions	伝統	.154**	.033	.107*	.160**
q12		chaos	無秩序	.239**	-.017	.114*	.246**
q25		kid respect	尊敬	.135**	-.055	.066	.096

q26	sex roles	性役割	.205**	-.115*	.029	.157**
q27	soldier	兵士	.107*	-.078	-.031	.087
q13	Sanctity	品位	.267**	.045	.184**	.232**
q14	disgusting	嫌悪	.317**	.039	.108*	.318**
q15	divine	神聖	.178**	-.063	-.032	.259**
q28	harmless disgusting	不快	.279**	.069	.229**	.330**
q29	unnatural	異常	.327**	.067	.143**	.354**
q30	chastity	純潔	.213**	.079	.154**	.147**

\*\*  $p < .01$ ; \*  $p < .05$

### 調査 8 の考察

援助規範意識尺度は、個体に内在化していると考え、互惠的、補償的な「返済規範意識」、自己犠牲を含む愛他的な「自己犠牲規範意識」、相互交換的な「交換規範意識」、そして、弱者や困っている人に対する「弱者救済規範意識」の個体差を説明する。そのなかで、特に「弱者救済規範意識」が MFQ の道徳基盤領域の全般と深く関わっていることが示され、なかでも、MFQ の Care の領域や Individualizing foundations とのより強い結びつきを示していた。「返済規範意識」も同様に MFQ の道徳基盤領域全般に広く相関を見せていた。その一方、「自己犠牲規範意識」や「交換規範意識」は、Care の特定の項目を除いてはほとんど相関を示さず、特に Loyalty, Authority の領域では相関は有意ではなかった。これは道徳基盤の下位項目でみた場合にはより顕著に表れていた。このことは、われわれの道徳的判断においては、主として弱者救済や互惠的な意識が大きな意味を持っている一方、愛他的あるいは相互交換的な意識はほとんど影響していないということを意味している。それらはまた、MFQ の道徳基盤ではより明らかで、Care, Harm, Fairness の領域では、低いながらも他の領域よりも高い相関を示しながら、Liberty, Loyalty, Sanctity の領域では、有意ながらも相関はほとんど認められなかった。このことは、互惠的あるいは弱者に対する内在化された意識とは、道徳的判断においては、Individualizing foundations（個人の尊厳）といった個人の内的な動機として働き、Binding foundations（義務などへの拘束）といった社会的な動機にはさほど影響していないと考えることができ、そのなかでも、「弱者救済規範意識」というものが、道徳的判断においてもっとも強い影響力となっていることが示されていた。

## 調査 9 公正感受性、正当世界信念と道徳基盤

調査 9 の目的は、個体における公正への感じやすさ（公正感受性）や、因果応報への認知的傾向（正当世界信念）と、道徳的判断の関係性についてとらえ、さらに、道徳基盤理論に基づく道徳基盤の下位概念からの説明を試みていくことである。

### 分析

検証 15 公正感受性 (JS) の 4 因子（「被害者 JS」「第三者 JS」「受益者 JS」「加害者 JS」）と、MFQ の 5 因子（Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctity）と上位概念 2 因子（Individualizing foundations, Binding foundations）、および MFVs の 6 因子（Care(weak), Harm, Fairness, Liberty, Loyalty, Sanctity）との関係性について、相関係数を算出し、関係性の高さを統計的に評価した。同様に、正当世界信念についても、MFQ の 5 因子、MFVs の 6 因子との相関係数を算出し、関係性の高さを統計的に評価した。

検証 16 公正感受性の 4 因子と、MFQ の 30 全ての項目（道徳基盤の下位概念）との関係性について、相関係数を算出し、関係性の高さを統計的に評価した。同様に、正当世界信念についても、MFQ の全ての項目との相関係数を算出し、関係性の高さを統計的に評価した。

### 調査 9 の結果

検証 15 公正感受性と道徳基盤の相関の結果を表 19 に示す。公正感受性の 4 因子についてみると、第三者 JS は、MFQ の Fairness ( $r=.25$ ) と Sanctity ( $r=.23$ ) の領域と低い相関を示し、上位概念である Individualizing foundations（個人の尊厳）( $r=.24$ ) にも同様の相関を示した。加害者 JS も同様に、MFQ の Fairness ( $r=.22$ )、Sanctity ( $r=.23$ ) の領域と、上位概念である Individualizing foundations（個人の尊厳）( $r=.28$ ) に有意な正の相関を示し、またそれ以上に Care ( $r=.30$ ) の領域に相関を示した。一方、被害者 JS および受益者 JS は、MFQ のいずれの領域ともほとんど相関を示さず、特に受益者 JS は Fairness 以外の領域との相関は有意ではなかった。また、4 因子のいずれも、MFVs のいずれの領域ともほとんど相関を示さなかった。

表 19 公正感受性と道徳基盤との相関（調査 9・検証 15）（ $n=418$ ）

尺度	道徳基盤	被害者 JS	第三者 JS	受益者 JS	加害者 JS
MFQ	Care	.078	.189**	.014	<b>.302**</b>
	Fairness	.153**	<b>.248**</b>	.126*	<b>.219**</b>
	Loyalty	.106*	.166**	.087	.120*
	Authority	.133**	.115*	.081	.048
	Sanctity	.191**	<b>.232**</b>	.043	<b>.231**</b>
	Individualizing foundations	.123*	<b>.235**</b>	.073	<b>.284**</b>
	Binding foundations	.163**	.194**	.079	.151**
MFVs	Care (weak)	.067	.118*	.021	.184**
	Harm	.014	.014	-.125*	.102*
	Fairness	-.033	.027	-.095	.110*

Liberty	-.004	.083	.079	.087
Loyalty	.016	.122*	.068	.118*
Sanctity	-.019	.106*	.039	.124*

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

次に、正当世界信念と道德基盤の相関の結果を表 20 に示す。正当世界信念の 1 因子についてみると、MFQ のいずれの領域ともほとんど相関を示しておらず、特に、Authority, Sanctity の領域では相関は有意ではなかった。また MFVs でも、Harm ( $r = -.23$ ) の領域との低い負の相関を示した以外はほとんど相関は示されず、特に Liberty, Loyalty, Sanctity の領域との相関は有意ではなかった。

表 20 正当世界信念と道德基盤との相関 (調査 9・検証 15) ( $n=418$ )

尺度	道德基盤	正当世界信念
MFQ	Care	-.138**
	Fairness	-.109*
	Loyalty	.154**
	Authority	.077
	Sanctity	-.072
	Individualizing foundations	-.135**
	Binding foundations	.058
	MFVs	Care (weak)
Harm		-.226**
Fairness		-.191**
Liberty		.020
Loyalty		-.011
Sanctity		-.016

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

**検証 16** 公正感受性と道德基盤の全ての下位項目との相関の結果を表 21 に示す。検証 15 では MFQ の Fairness や Sanctity の領域に低い相関を示していた第三者 JS の因子は、さらに詳しくそれぞれの下位項目をみると、Fairness の「裕福 rich」( $r = .22$ )の項目と、Sanctity の「異常 unnatural」( $r = .25$ )の項目に低いながらも相関を示していた。また、それ以外にも、Care の「思いやり compassion」( $r = .22$ )の項目にも低い相関を示していた。検証 15 で MFQ の Care, Fairness, Sanctity の領域に低い相関を示していた加害者 JS は、MFQ の下位項目でみると、Care の「精神 emotionally」( $r = .20$ )、「弱者 weak」( $r = .24$ )、「残虐 cruel」( $r = .26$ )、「思いやり compassion」( $r = .25$ )の幅広い項目に低いながらも相関を示したが、他の領域ではほとんど相関は認められなかった。また、被害者 JS は Sanctity の「神聖 divine」( $r = .27$ )に、受益者 JS は Fairness の「裕福 rich」( $r = .30$ )に、それぞれ低いながらも相関を示したが、他の領域ではほとんど相関は認められなかった。

表 21 公正感受性と道徳基盤の全ての下位項目との相関（調査 9・検証 16）（ $n=418$ ）

項目No.	道徳基盤	下位概念	被害者 JS	第三者 JS	受益者 JS	加害者 JS	
q1	Care	emotionally	精神	.077	.114*	-.006	<b>.204**</b>
q2		weak	弱者	.055	.170**	-.011	<b>.239**</b>
q3		cruel	残虐	.130**	.135**	-.005	<b>.263**</b>
q16		compassion	思いやり	-.026	<b>.215**</b>	.039	<b>.254**</b>
q17		animal	動物	.026	.076	-.088	.159**
q18		kill	殺人	.040	.071	.109*	.120*
q4	Fairness	treated	待遇	.104*	.187**	.107*	.123*
q5		unfairly	不当	.068	.132**	-.047	.167**
q6		rights	権利	.082	.090	.002	.073
q19		fairly	公平	.136**	.168**	.078	.163**
q20		justice	正義	-.040	.100*	-.012	.146**
q21		rich	裕福	.188**	<b>.222**</b>	<b>.298**</b>	.139**
q7	Loyalty	love country	愛国	.101*	.139**	.104*	.092
q8		betray	裏切り	.154**	.157**	.035	.105*
q9		loyalty	忠誠	.118*	.105*	.026	.063
q22		history	歴史	-.049	.067	.010	.059
q23		family	家族	.057	.028	.021	.069
q24		team	チーム	-.001	.124*	.135**	.062
q10	Authority	respect	敬意	.156**	.068	.083	-.017
q11		traditions	伝統	.169**	.126**	.130**	.123*
q12		chaos	無秩序	.099*	.174**	.035	.163**
q25		kid respect	尊敬	.027	.022	.002	-.026
q26		sex roles	性役割	.012	.006	-.027	-.050
q27		soldier	兵士	.028	.036	.083	-.006
q13	Sanctity	decency	品位	.139**	.185**	.041	.180**
q14		disgusting	嫌悪	.103*	.127**	-.089	.146**
q15		divine	神聖	<b>.266**</b>	.164**	.020	.110*
q28		harmless disgusting	不快	.028	.060	-.024	.149**
q29		unnatural	異常	.120*	<b>.254**</b>	.141**	.187**
q30		chastity	純潔	.057	.129**	.094	.162**

\*\*  $p<.01$ ; \*  $p<.05$

次に、正当世界信念と道徳基盤の全ての下位項目の相関の結果を表 22 に示す。検証 15 では MFVs の Harm に相対的にみて最も高い相関（負の相関）を示していた正当世界信念は、MFQ の下位項目でみると、低いながらも Care の「動物 animal」( $r=-.21$ ) に負の相関を、Loyalty の「チーム team」( $r=.20$ ) に正の相関をわずかながら示していたが、Fairness の領域を含む他のいずれの下位項目とも相関はほとんど示さなかった。

表 22 正当世界信念と道徳基盤の全ての下位項目との相関（調査 9・検証 16）（ $n=418$ ）

項目No.	道徳基盤	下位概念	正当世界信念		
q1	Care	emotionally	精神	-.192**	
q2		weak	弱者	-.128**	
q3		cruel	残虐	-.148**	
q16		compassion	思いやり	-.037	
q17		animal	動物	<b>-.205**</b>	
q18		kill	殺人	.117*	
q4		Fairness	treated	待遇	-.091
q5			unfairly	不当	-.152**
q6	rights		権利	-.169**	
q19	fairly		公平	-.084	
q20	justice		正義	.013	
q21	rich		裕福	.077	
q7	Loyalty		love country	愛国	.122*
q8		betray	裏切り	.004	
q9		loyalty	忠誠	.113*	
q22		history	歴史	.082	
q23		family	家族	.068	
q24		team	チーム	<b>.201**</b>	
q10		Authority	respect	敬意	.058
q11			traditions	伝統	.099*
q12	chaos		無秩序	-.181**	
q25	kid respect		尊敬	.133**	
q26	sex roles		性役割	.058	
q27	soldier		兵士	.120*	
q13	Sanctity		decency	品位	-.036
q14		disgusting	嫌悪	-.165**	
q15		divine	神聖	-.082	
q28		harmless disgusting	不快	-.034	
q29		unnatural	異常	.079	
q30		chastity	純潔	-.019	

\*\*  $p < .01$ ; \*  $p < .05$

### 調査 9 の考察

検証 15 および検証 16 の結果から、公正感受性と道徳基盤の関係は、MFQ では、第三者 JS と加害者 JS が、Fairness や Sanctity の領域との低い相関を示し、また、加害者 JS では Care の領域との相関が相対的にみて最も高かった。特定の JS のみが、特定の道徳基盤、

とりわけ関係性が想定されていた Fairness の領域を超えた、Care や Sanctity などの領域でも低いながらも相関を示し、逆に、被害者 JS や受益者 JS は、Fairness を含むいずれの領域ともほとんど相関を示さなかった。さらに MFVs では、4 つの JS (公正感受性) はいずれの道徳基盤ともほとんど相関を示さなかった。MFQ の下位概念との関係でも、Fairness の領域では、第三者 JS と受益者 JS のみが「裕福 rich」の項目に相関を示していたものの、加害者 JS が低いながらも相関を示していたのは Care の領域の下位項目であり、また、被害者 JS は Sanctity の領域の一部にのみ、受益者 JS は Fairness の領域の一部にのみ低い相関を示しただけであった。このことから、公正感受性は、その一側面においては Care の領域を説明しうるとしても、想定されたような Fairness の領域との強い関係性は示されず、この領域を説明できる因子であるとはいい難かった。

正当世界信念と道徳基盤の関係もまた、MFQ のすべての領域と、MFVs の Harm 以外のすべての領域で、正当世界信念との相関はほとんど示されなかった<sup>15</sup>。また、MFQ の下位項目との関係においても、Care と Loyalty の領域の一部にわずかな相関が示されたのみで、Fairness を含む他のいずれの領域とも相関はほとんど示されなかった。

これらの結果から、公正感受性や正当世界信念は、道徳基盤の Fairness の概念とは直接的には連関しておらず、またいずれの道徳基盤の概念からも直接的に説明しうるものではないと評価した。

---

<sup>15</sup> 公正世界信念尺度 (村山・三浦, 2013) と改訂日本語版 MFQ (北村, 2019) を用いて行われた、公正世界信念と道徳基盤の検討 (北村, 2019) では、Fairness への依拠が高い人と低い人では、責任帰属への影響に違いがあり、また、公正世界信念の内在的公正世界信念の高い人と低い人でも、同様の結果が示されたと報告されている。



## 調査 10 国民意識（ナショナル・アイデンティティ）と道徳基盤

調査 10 の目的は、個体における「愛国心」や「ナショナリズム（国家主義）」に代表される国民意識（ナショナル・アイデンティティ）と、道徳的判断の関係性をとらえ、さらに、道徳基盤理論に基づく道徳基盤、とりわけ Loyalty の領域に焦点を当てながら、この基盤の下位概念からの説明を試みていくことである。

### 分析

検証 17 国民意識の 2 因子（「愛国心」「国家主義」）と、MFQ の 5 因子（Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctity）、MFVs の 6 因子（Care(weak), Harm, Fairness, Liberty, Loyalty, Sanctity）との関係性について、相関係数を算出し、関係性の高さを統計的に評価した。

検証 18 国民意識の 2 因子と、MFQ の 30 全ての項目、すなわち道徳基盤の下位概念との関係性について、相関係数を算出し、関係性の高さを統計的に評価した。

検証 19 国民意識の 2 因子と、MFQ の Loyalty の因子、MFVs の Loyalty の因子について、それぞれの得点の平均値を、政治的な考え方（政治的志向）の 5 水準毎に比較して検討した。さらに、分散分析を行い、政治的志向によって、それぞれの因子の得点に有意な差があるかどうかを評価した。

### 調査 10 の結果

検証 17 国民意識と道徳基盤の相関の結果を表 23 に示す。国民意識の「愛国心」「国家主義」の 2 因子と道徳基盤との相関についてみたところ、MFQ の Loyalty の領域に、「愛国心」( $r=.40$ )、「国家主義」( $r=.32$ )とともに、相対的にみて最も高い相関を示した。しかし、いずれも Loyalty のみならず、Authority や Sanctity の領域にも低い相関を示し、「愛国心」では Care の領域にも低い相関を示すなど、複数の因子との幅広い相関を示した。MFVs の Loyalty の領域では、「愛国心」( $r=.21$ )、「国家主義」( $r=.29$ )と、低いながらも相対的にみて高い相関を示していたが、その他の領域ではほとんど相関は認められず、Liberty や Sanctity の領域との相関は有意ではなかった。また、MFQ では、全体として「愛国心」が「国家主義」よりも高い値を示していたが、MFVs の Loyalty の領域では、「愛国心」( $r=.21$ )よりも「国家主義」( $r=.29$ )のほうが若干高い値を示していた。これは、MFQ の Loyalty の項目が、国家に限らずより幅広い概念を想定しているのに対して、MFVs の Loyalty の項目は国家に関する内容をより多く含んでいることに関係しているのではないかと考えられた。

表 23 国民意識と道徳基盤との相関（調査 10・検証 17）（ $n=418$ ）

尺度	道徳基盤	愛国心	国家主義
MFQ	Care	<b>.239**</b>	.171**
	Fairness	.191**	.115*
	<b>Loyalty</b>	<b>.399**</b>	<b>.318**</b>
	Authority	<b>.321**</b>	<b>.273**</b>
	Sanctity	<b>.260**</b>	<b>.217**</b>
MFVs	Care (weak)	.109*	.065
	Harm	.193**	.186**

Fairness	.182**	.179**
Liberty	-.027	-.014
<b>Loyalty</b>	<b>.211**</b>	<b>.291**</b>
Sanctity	.056	.091

\*\*  $p < .01$ ; \*  $p < .05$

**検証 18** 国民意識と道徳基盤の下位項目の相関の結果を表 24 に示す。国民意識の「愛国心」「国家主義」の 2 因子と道徳基盤の 30 の下位項目との相関についてみたところ、MFQ1 では、Loyalty の下位項目の「愛国 love country」(q7) で「愛国心」( $r=.24$ )、「国家主義」( $r=.23$ )、「裏切り betray」(q8) で「愛国心」( $r=.22$ )、「国家主義」( $r=.23$ ) と、低いながらも相関を示したが、「忠誠 loyalty」(q9) では「愛国心」( $r=.18$ )、「国家主義」( $r=.20$ ) と相関はほとんど認められなかった。また、MFQ2 では、Loyalty の下位項目の「歴史 history」(q22) で、「愛国心」( $r=.50$ )「国家主義」( $r=.35$ ) と相対的に最も高い相関を示したが、他の「家族 family」(q23) では「愛国心」( $r=.14$ )、「国家主義」( $r=.09$ )、「チーム team」(q24) でも「愛国心」( $r=.23$ )、「国家主義」( $r=.10$ ) と、特に「国家主義」との相関はほとんど認められなかった。検証 18 でも、道徳基盤の下位項目に対して、全体として「愛国心」は「国家主義」よりも高い相関を示していた。

表 24 国民意識尺度と道徳基盤の下位項目との相関 (調査 10・検証 18) ( $n=418$ )

項目No.	道徳基盤	下位概念	愛国心	国家主義	
q1	Care	emotionally	精神	.092	.037
q2		weak	弱者	.118*	.092
q3		cruel	残虐	.167**	.112*
q16		compassion	思いやり	.218**	.101*
q17		animal	動物	.215**	.194**
q18		kill	殺人	.183**	.170**
q4	Fairness	treated	待遇	.130**	.112*
q5		unfairly	不当	.194**	.160**
q6		rights	権利	.054	-.019
q19		fairly	公平	.126**	.069
q20		justice	正義	.260**	.185**
q21		rich	裕福	-.025	-.055
q7	Loyalty	love country	愛国	.239**	.229**
q8		betray	裏切り	.221**	.226**
q9		loyalty	忠誠	.178**	.198**
q22		history	歴史	.504**	.351**
q23		family	家族	.142**	.090
q24		team	チーム	.234**	.099*
q10	Authority	respect	敬意	.159**	.150**

q11		traditions	伝統	.178**	.174**
q12		chaos	無秩序	.129**	.095
q25		kid respect	尊敬	.249**	.232**
q26		sex roles	性役割	.271**	.235**
q27		soldier	兵士	.222**	.136**
q13	Sanctity	decency	品位	.080	.107*
q14		disgusting	嫌悪	.089	.086
q15		divine	神聖	.182**	.168**
q28		harmless disgusting	不快	.258**	.202**
q29		unnatural	異常	.259**	.158**
q30		chastity	純潔	.204**	.159**

\*\*  $p < .01$ ; \*  $p < .05$

**検証 19** 「愛国心」, 「国家主義」, MFQ の Loyalty, MFVs の Loyalty の得点の平均値 (MFQ のみ 6 段階評価) を, 政治的な考え方 (政治的志向) の 5 水準毎に比較したところ, 全体としては予想されたように, 自由主義と比較して, 保守主義のほうが得点は高く, その傾向はいずれの因子においても一致していた (図 10)。これらの 4 つの因子のうち, MFQ の Loyalty ( $F(4, 413)=5.53, p<.001$ ), 「愛国心」 ( $F(4, 413)=8.17, p<.001$ ), 「国家主義」 ( $F(4, 413)=5.15, p<.001$ ), はいずれも政治的志向によって有意な差があることが示されたが, MFVs の Loyalty ( $F(4, 413)=2.34, p=.06$ ) では有意差があるとはいえなかった。「国家主義」については, 保守主義の得点の高さは明らかであったものの, やや保守主義, やや自由主義, 自由主義の平均得点の高さはほぼ同じであった。また, 4 つの因子の平均得点は, やや保守主義, あるいは, やや自由主義を志向する人では若干の開きがあった。

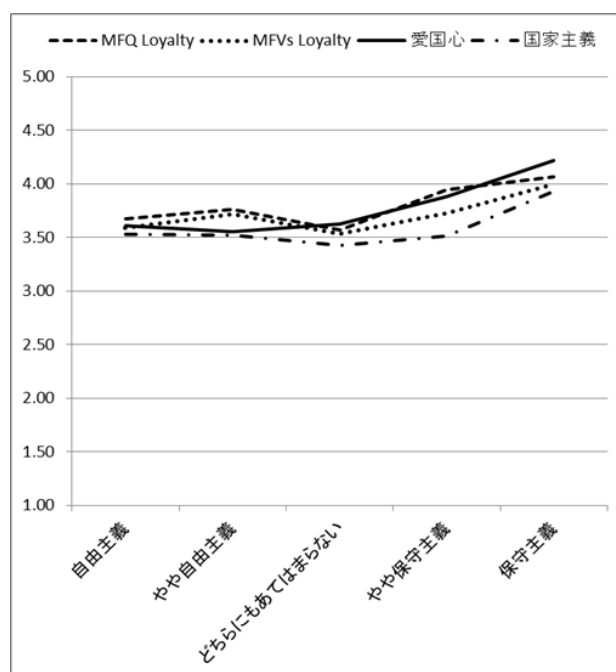


図 10 「愛国心」「国家主義」, Loyalty の道徳基盤と政治的志向の関係 (調査 10・検証 19)

## 調査 10 の考察

検証 17~19 の結果から、道徳基盤理論によって仮定されている Loyalty の領域と、「愛国心」「国家主義」との関係性がとらえられた。そのなかで、「愛国心」と「国家主義」は、Kosterman & Feshbach (1989) が主張しているように似て非なるものであったといえ、たとえば MFQ の Loyalty の下位項目である「チーム team」に対しては、「愛国心」( $r=.23$ )、「国家主義」( $r=.10$ ) と相関の強さに開きがあり、「家族 family」に対しては、「国家主義」が有意な相関を示していなかった。このことから、国家に限らず幅広い内集団を対象としている Loyalty の概念を説明するうえでは、「国家主義」よりも「愛国心」がより近い概念を有しているのではないかと考えられた。また、国家の優位性への志向を含む「国家主義」の考え方が、国家的内容を多く含む MFVs の Loyalty に対して、「愛国心」よりも高い相関を示していたが、より幅広い概念を持つ MFQ の Loyalty に対しては、「愛国心」ほど高い相関は示していなかった。

「愛国心」と「国家主義」が、MFQ の Loyalty と同様に Authority の領域にも相関を示していたことは、MFQ の因子分析において Loyalty と Authority が一つの領域としてとらえられていることから予測でき、また、Sanctity の領域にも同様の相関が示されたことは、Koleva, Graham, Iyer, Ditto, & Haidt (2012) でも示されており、先行研究と同様であったといえることができる。

さらに、MFQ の Loyalty の下位項目のなかで、「愛国心」と「国家主義」が最も高い相関を示したのは、「歴史 history」の項目 (Q22「私は自分の国の歴史を誇りに思う」) であった。このことは、「愛国心」や「国家主義」が、Loyalty の概念のなかの、特に「歴史 history」という道徳的価値を説明しうるものであり、「家族 family」や「チーム team」を説明するものではないとみることができた。またそれは、「愛国 love country」や「裏切り betray」を説明しうるものではあったが、「忠誠 loyalty」の説明となるものではないという結果であった。これらの結果から、道徳基盤理論の Loyalty の概念のなかでも、主として「歴史 history」の概念、さらに「愛国 love country」や「裏切り betray」の概念が、「愛国心」や「国家主義」という、アイデンティティーの要素を含んだ概念によって説明されることが示された。

また、個人の Loyalty や「愛国心」「国家主義」への志向と、政治的志向の間にはある程度関係性があることは予測されていたが、実際、アイデンティティーの要素を含む「愛国心」「国家主義」にはその志向に有意な違いがみられ、MFQ の Loyalty の領域でも有意差が示されたが、MFVs の Loyalty の領域では政治的志向による有意差は示されなかった。

本研究の結果から、道徳基盤理論が仮定する Loyalty の基盤の概念は、集団にかかるさまざまな概念を含有しているものの、そのなかで個人のアイデンティティーに関する側面において、「愛国心」や「国家主義」、特に「愛国心」への志向からも説明しうることを示された。また、Loyalty の下位項目である「歴史 history」という道徳的価値に、「愛国心」や「国家主義」が最も高い相関を示していたことから、「歴史 history」という価値的要素が、個人において形成されるナショナル・アイデンティティーと深くつながっていることが示唆されていた。

## 調査 11 嫌悪感受性と道徳基盤

調査 11 の目的は、個体における嫌悪 (disgust) の感受性と、道徳的判断の関係、とりわけ Sanctity/Purity の領域に焦点を当てながら、その関係性についてとらえ、さらに、道徳基盤理論に基づく道徳基盤の下位概念からの説明を試みていくことである。

### 分析

検証 20 DS-R-J の 3 因子 (「中核的嫌悪」「動物性嫌悪」「汚染嫌悪」と、MFQ の 5 因子 (Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctity), MFVs の 6 因子 (Care(weak), Harm, Fairness, Liberty, Loyalty, Sanctity) との関係性について、相関係数を算出し、関係性の高さを統計的に評価した。

検証 21 DS-R-J の 3 因子と、MFQ の 30 全ての項目、すなわち道徳基盤の下位概念との関係性について、相関係数を算出し、関係性の高さを統計的に評価した。

検証 22 さらに、DS-R-J の 3 因子と MFQ の 5 因子のそれぞれの得点の平均値を、政治的な考え方 (政治的志向) の 5 水準毎に比較して検討した。さらに、分散分析を行い、政治的志向によって、それぞれの因子の得点に有意な差があるかどうかを評価した。

### 調査 11 の結果

418 のデータから、DS-R-J の 2 問の操作チェックによって 145 のデータを無効とし<sup>16</sup>、残りの 273 (65.3%) のデータを採用した。

検証 20 嫌悪感受性と道徳基盤の相関の結果を表 25 に示す。「中核的嫌悪」は、MFQ のほとんどの道徳基盤領域と有意な正の相関を示し、なかでも Sanctity の領域との相関が相対的にみて最も高かった。MFVs でもほとんど全ての道徳基盤領域と有意な正の相関を示し、なかでも、Liberty, Loyalty, Sanctity との相関が相対的にみて高かった。一方、「動物性嫌悪」は、MFQ の Loyalty の領域と低い相関を示していたものの、他の領域との相関はほとんど認められず、なかでも Care や Fairness との相関は有意ではなかった。MFVs でもいずれの領域との相関も極めて低く、Loyalty と Sanctity 以外の領域との相関はいずれも有意ではなかった。「汚染嫌悪」は、MFQ, MFVs とともに、Loyalty と Sanctity の領域に低い相関を示したのみで、他の領域との相関はほとんど認められず、MFQ の Care や MFVs の Harm や Liberty の領域との相関は有意ではなかった。

表 25 嫌悪感受性と道徳基盤の相関 (調査 11・検証 20) (n=273)

尺度	道徳基盤	中核的嫌悪	動物性嫌悪	汚染嫌悪
MFQ	Care	.153*	.108	.104
	Fairness	.227**	.109	.129*
	Loyalty	.269**	.212**	.208**
	Authority	.275**	.167**	.194**

<sup>16</sup> 先行研究に倣い、Part 1 では、「紙切れよりも果物を一切れ食べたい」というチェック項目について、「1: 全く当てはまらない」「2: あまり当てはまらない」「3: どちらとも言えない」と回答した者、Part 2 では、「りんごをナイフとフォークで食べている人を見る」というチェック項目について、「3: やや嫌な気持ちになる」「4: とても嫌な気持ちになる」「5: 極度に嫌な気持ちになる」と回答した者を無効とした。

	Sanctity	<b>.315**</b>	.166**	<b>.214**</b>
MFVs	Care (weak)	<b>.282**</b>	.018	.125*
	Harm	.163**	-.049	.031
	Fairness	<b>.224**</b>	.042	.131*
	Liberty	<b>.311**</b>	-.005	.054
	Loyalty	<b>.396**</b>	.150*	<b>.210**</b>
	Sanctity	<b>.316**</b>	.160**	<b>.218**</b>

\*\*  $p < .01$ ; \*  $p < .05$

**検証 21** 嫌悪感受性と道徳基盤の下位項目の相関の結果を表 26 に示す。検証 20 では、「中核的嫌悪」の因子は、MFQ の Care を除く全ての道徳的判断領域との相関を示していたが、さらに詳細に MFQ の下位項目との関係を見ていくと、Fairness の領域では、「裕福 rich」( $r=.21$ ) の領域にのみ低い相関を示し、Loyalty の領域では、「裏切り betray」( $r=.25$ )、「忠誠 loyalty」( $r=.31$ )、「チーム team」( $r=.22$ ) に、Authority の領域では、「敬意 respect」( $r=.26$ )、「伝統 traditions」( $r=.27$ )、「尊敬 kid respect」( $r=.22$ ) に、Sanctity の領域では、「品位 decency」( $r=.22$ )、「不快 harmless disgusting」( $r=.25$ )、「異常 unnatural」( $r=.22$ )、「純潔 chastity」( $r=.24$ ) にのみ相関を示し、なかでも、「忠誠 loyalty」の領域に最も高い相関を示していた。「動物性嫌悪」の因子は、Loyalty の領域の「忠誠 loyalty」( $r=.20$ )、「チーム team」( $r=.21$ )、Authority の領域の「伝統 traditions」( $r=.20$ ) にのみ、それぞれ低い相関を示していた。「汚染嫌悪」の因子は、Loyalty の領域の「忠誠 loyalty」( $r=.25$ )、Authority の領域の「敬意 respect」( $r=.22$ )、「伝統 traditions」( $r=.20$ )、「尊敬 kid respect」( $r=.21$ ) にのみ、それぞれ低い相関を示し、検証 1 では相関が認められた Sanctity の領域では、いずれの下位項目とも相関はほとんど認められなかった。

表 26 嫌悪感受性と道徳基盤の下位項目との相関 (調査 11・検証 21) ( $n=273$ )

項目No.	道徳基盤	下位概念		中核的嫌悪	動物性嫌悪	汚染嫌悪
q1	Care	emotionally	精神	.040	.021	.006
q2		weak	弱者	.105	.051	.073
q3		cruel	残虐	.095	.042	.056
q16		compassion	思いやり	.181**	.117	.095
q17		animal	動物	.114	.011	.128*
q18		kill	殺人	.075	.152*	.059
q4	Fairness	treated	待遇	.100	.070	.099
q5		unfairly	不当	.159**	.063	.053
q6		rights	権利	.053	-.021	.015
q19		fairly	公平	.092	.010	.038
q20		justice	正義	.190**	.109	.066
q21		rich	裕福	<b>.212**</b>	.145*	.169**
q7	Loyalty	love country	愛国	.148*	.138*	.149*

q8		betray	裏切り	<b>.251**</b>	.142*	.187**
q9		loyalty	忠誠	<b>.312**</b>	<b>.204**</b>	<b>.247**</b>
q22		history	歴史	.045	.080	-.030
q23		family	家族	.035	.031	.047
q24		team	チーム	<b>.222**</b>	<b>.212**</b>	.181**
q10	Authority	respect	敬意	<b>.262**</b>	.156**	<b>.217**</b>
q11		traditions	伝統	<b>.272**</b>	<b>.204**</b>	<b>.201**</b>
q12		chaos	無秩序	.063	.041	.006
q25		kid respect	尊敬	<b>.220**</b>	.145*	<b>.214**</b>
q26		sex roles	性役割	.100	.024	.020
q27		soldier	兵士	.126*	.062	.070
q13	Sanctity	decency	品位	<b>.218**</b>	.164**	.172**
q14		disgusting	嫌悪	.149*	.045	.123*
q15		divine	神聖	.177**	.111	.181**
q28		harmless disgusting	不快	<b>.248**</b>	.074	.085
q29		unnatural	異常	<b>.223**</b>	.134*	.107
q30		chastity	純潔	<b>.243**</b>	.117	.154*

\*\*  $p < .01$ ; \*  $p < .05$

**検証 22** 政治的な考え方（政治的志向）の 5 水準毎にみた嫌悪感受性と道徳基盤の関係を図 11 に示す。MFQ は 6 段階評価、DS-R-J は 5 段階評価で測定しているため、MFQ の 5 つの道徳基盤の平均値のほうが若干高くなっている。MFQ の Care:  $F(4, 268)=0.18, p=.95$ , Fairness:  $F(4, 268)=1.24, p=.30$ , Sanctity:  $F(4, 268)=0.63, p=.64$  は、政治的志向による有意差はなかったが、Loyalty:  $F(4, 268)=3.45, p<.01$  と、Authority:  $F(4, 268)=5.61, p<.001$  では有意差がみられた。嫌悪の領域では、「動物性嫌悪」は  $F(4, 268)=2.84, p<.05$ , 「汚染嫌悪」は  $F(4, 268)=3.37, p<.05$  と、政治的志向による有意差がみられたが、「中核的嫌悪」では  $F(4, 268)=1.01, p=.40$  と有意差は示されなかった。

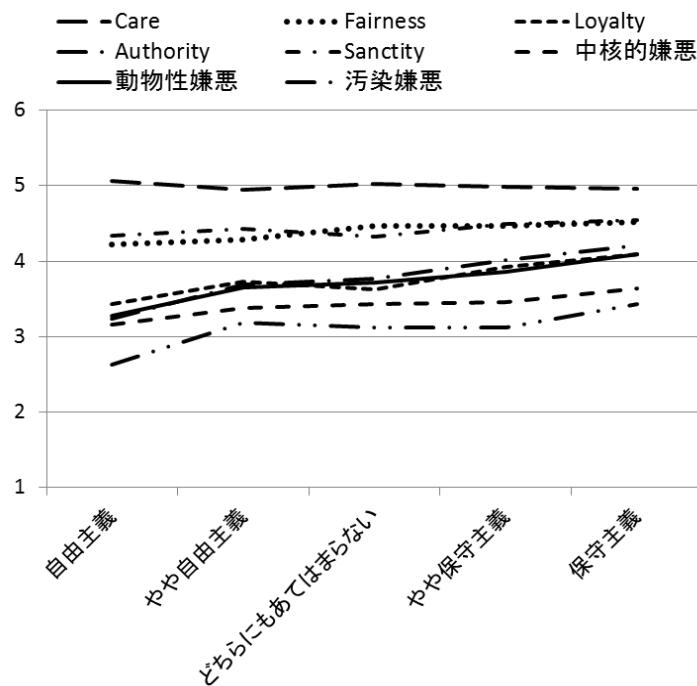


図 11 政治的志向毎にみた嫌悪感受性と道徳基盤の関係（調査 11・検証 22）

### 調査 11 の考察

検証 20 の結果、嫌悪の 3 領域（「中核的嫌悪」、「道徳的嫌悪」、「汚染嫌悪」）における感受性は、それぞれ異なる道徳基盤領域と関連していることが示された。「中核的嫌悪」は、複数の幅広い道徳基盤領域と関連し、そのなかで Sanctity や Loyalty の領域との相関が高かった。「動物性嫌悪」は、Loyalty の領域以外には相関をほとんど示さず、「汚染嫌悪」も、Loyalty や Authority, Sanctity の領域との相関を示していた。Van Leeuwen, Dukes, Tybur, & Park (2017) が TDDS を用いて行った調査では、「道徳的嫌悪」はすべての道徳基盤に、また「性的嫌悪」も Fairness を除くすべての道徳基盤に有意な相関を示し、「病原体嫌悪」は、Loyalty, Authority, および Purity の領域との低い相関を示していた。これらの 2 つの調査を比較すると、「中核的嫌悪」は Van Leeuwen *et al.* (2017) の「道徳的嫌悪」と、「汚染嫌悪」は Van Leeuwen *et al.* (2017) の「病原体嫌悪」とある程度対応しているとみることができ、同様の領域をとらえているのではないかと考えられた。一方、Van Leeuwen *et al.* (2017) では、「性的嫌悪」が、「病原体嫌悪」よりも Purity の領域により強い関係性を示し、Purity



の基盤が、感染症に関する懸念よりも生殖に関する懸念に基づいていることが示唆されていた。本調査からとらえられた「動物性嫌悪」は、Van Leeuwen *et al.* (2017) の「性的嫌悪」とは異なり、Loyalty 以外のいずれの領域にも関係性を示さなかった。このことから、「動物性嫌悪」と「性的嫌悪」が同じ領域をとらえていない可能性が示唆された。

検証 21 の結果からは、嫌悪の 3 領域における感受性は、MFQ の Loyalty の下位項目「忠誠 loyalty」や「チーム team」、Authority の下位項目「伝統 traditions」や「尊敬 kids respect」とのより強い関係性を示していた。この結果からは、想定されていたような嫌悪 (disgust) と Sanctity の領域の明確な関係性は示されず、嫌悪というものが、「さまざまな汚染環境から集団を防御し、危険を忌避する」ために獲得されてきた Sanctity の基盤と同等か、むしろそれ以上に、「集団への脅威に対処するために結束する」ために獲得されてきた Loyalty の基盤や、「階層社会のなかで有利な協力関係を形成する」ために獲得されてきた Authority の基盤と、深く関連していることが示されていた。

Steiger & Reyna (2017) が述べているように、嫌悪の感情と道徳基盤領域の関係性は、用いた尺度によってとらえられている側面が異なり、結果が大きく変わってくる。Tybur, Lieberman, & Griskevicius (2009) が分類した、「病原体嫌悪」、「性的嫌悪」、「道徳的嫌悪」という嫌悪の 3 つの領域と、Haidt *et al.* (1994) や Olatunji *et al.* (2008) が分類した、「中核的嫌悪」、「動物性嫌悪」、「汚染嫌悪」の 3 つの概念は、それぞれ重なり合う部分はあるものの、単純に比較することはできない。これらの分類の正しさについては、今後のさらなる研究によって明らかにされていくであろう。

検証 22 の結果からは、嫌悪の 3 領域における感受性と、道徳基盤の 5 領域への志向における、政治的志向による有意な違いは、Loyalty と Authority の領域と、「動物性嫌悪」および「汚染嫌悪」について認められた。この結果は、嫌悪の感受性のなかでも、中核的な領域においては個人の観念形態 (イデオロギー) との有意な関係は認められず、一方、「動物性嫌悪」や「汚染嫌悪」の領域においては、保守主義者が自由主義者に比べてより嫌悪を生起しやすいとする研究 (e.g., Inbar, Pizarro, & Bloom, 2009) を部分的に支持する結果となった。

検証 20 から検証 22 を通して、嫌悪の感受性が、多元的な領域から説明され、それらは道徳的判断において、異なる複数の道徳基盤領域に連関していることが改めて示された。そのなかで、日本人においては、個人的なイデオロギー (政治的な志向) とはほとんど関係なく、一定して道徳的判断に影響を与えている中核的な領域がある可能性が示唆された。一方で、嫌悪に対する感受性の強さと、道徳基盤領域への依拠の強さは、最も結びつきが強いと想定されていた Sanctity の領域よりも、むしろ Loyalty や Authority の領域とより強く結ばれており、嫌悪の感受性が、日本人においては他者との関係性や自らが所属する集団の防衛や維持に関する問題に対して、より強い影響を与えている可能性があることが示唆された<sup>17</sup>。

---

<sup>17</sup> Van Leeuwen, Park, Koenig & Graham (2012) でも、病原体の汚染の脅威を最小化する手段として、Sanctity と同様に、集団の結束や規範に対する Loyalty や Authority を強化しているかもしれないとしている (Graham *et al.*, 2013)。

#### 研究 4 の考察

研究 4 では、Care, Fairness, Loyalty, Sanctity の道徳基盤領域に焦点を当て、それぞれの領域を説明しうると考えた、援助規範意識、公正感受性、正当世界信念、国民意識（愛国心／国家主義）、嫌悪感受性との関係性をとらえていくことを試みた。

援助規範意識は、弱者救済や返済意識といった側面から Care の概念を部分的に説明していたが、Fairness や Sanctity の領域との関係性も同様に示し、単独で一つの道徳基盤領域を明らかに説明しているとみることはできなかった。しかし、道徳的判断において、いずれも Individualizing foundations（個人の尊厳）としてとらえられる内的動機により強く影響しているとみることができた。

公正感受性も、加害者や第三者といった側面から、Care, Fairness, Sanctity の領域との関係性を示していた。なかでも Care の領域に最も強く影響していると考えられ、もっとも相関が高いと考えていた Fairness の領域では、Care の領域ほどには明らかな関係性は示されなかった。正当世界信念では、いずれの道徳基盤領域とも相関は低く、道徳的判断において正当世界信念は関係性の低いものであることが示されていた。

「愛国心」と「国家主義」は、異なる概念を持つ 2 つの因子であり、なかでも「愛国心」の因子は、道徳基盤領域の全般において、「国家主義」以上に影響力のある因子としてみることができた。そのなかで、2 つの因子と特に深く結びついていたのは、Loyalty のなかの「歴史 history」の下位概念であった。道徳基盤領域における「歴史 history」の概念とは、それが道徳的判断の基準としてとらえられている道徳的価値のひとつであり、日本人としての国民意識を成している Loyalty の重要な側面としてみることができるとは思えないかと考えられた。

嫌悪感受性は、主として Sanctity の概念を説明する因子として想定していたが、本研究では、Sanctity の価値よりも、むしろ Loyalty や Authority の領域により深い関係性を示した側面があった。これは、道徳的判断において、汚染を回避することに対する価値よりも、集団を維持することに対する価値により高く依拠していることを示しており、これらも日本人の観念形態を説明しうる重要な側面としてみることができるとは思えないかと考えられた。

研究 4 の結果から、複数の道徳基盤領域が、感じやすさ（感受性）や主義といった個体の志向性や傾向性から部分的に説明できうることが示された。それらを説明しているのは道徳基盤の概念構造をささえている下位概念であり、5 つの道徳基盤へのインパクトとしてはとらえられなかった概念をより詳細にとらえていた。道徳的判断にはほとんど影響しないとみられた傾向性でさえ、下位概念によってその微少な影響範囲が示されていた。下位概念は道徳基盤理論で仮定されている道徳的価値のひとつひとつであり、志向性や傾向性はそれらのなかの特定の道徳的価値への依拠の強さとしてみることができるとは思えない。

## 総合考察

本研究では、道徳基盤理論に基づく6つの構成概念の妥当性について、日本人を対象に改めて検証するとともに、同理論において主張されている道徳基盤と個人の政治的志向(すなわちイデオロギー)との関係性についても検証し、さらにそれぞれの道徳基盤領域について、個体の志向性・傾向性との関係性を、下位概念の水準まで掘り下げてとらえることで、道徳性の概念構造をより深く理解し、提案されている構造が日本人においてもあてはまるのか、あるいは異なる構造を持っているのかについて検討した。

研究1では、Care, Fairness, Liberty, Loyalty, Authority, Sanctityの6つの道徳基盤のうちの、Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctityの5つの基盤に基づく調査票、モラル・ファンデーションズ・クエスチョネア(MFQ)を用いて、その構成概念妥当性について日本人を対象として改めて検証した。複数回に亘り行った調査の結果、探索的因子分析からとらえられたのはいずれも2因子構造で、この構造は、道徳基盤の2つの上位概念とされるIndividualizing foundations(個人の尊厳)とBinding foundations(義務などへの拘束)からなる2因子に近いものであった。しかし、MFQ1のSanctityにおいては、LoyaltyやAuthorityと同じ上位概念を持つ因子としてはみなされず、この傾向が村山・三浦(2019)でもある程度みられたことから、これが先行研究で示された米国人の傾向とは異なっている可能性がうかがえた。また、MFQ2のCareとFairnessでも、ほとんどの項目がいずれの因子にもはっきりとした負荷を示していない、あるいは2つの因子への負荷にバラツキがあり、この傾向が村山・三浦(2019)でもある程度みられたことから、この点についても先行研究で示された米国人の傾向とは異なっている可能性がうかがえた。確認的因子分析では、探索的因子分析では明確にとらえられなかった5つの因子構造が、他の構造と比較してもっとも適合度がよいという結果であった。しかし、5因子構造としての妥当性は決して高いとはいえず、村山・三浦(2019)でも、5因子よりも2因子として検討されるほうがより妥当性・信頼性が高いとして推奨されている。MFQは、5つの道徳基盤を構成する広範な概念をバランスよく盛り込み、その全体像をとらえようとする微妙な均衡のうえに成り立っている調査票と思われる。5つの道徳基盤を個々に取り出すことなく、全体構造から5つの道徳基盤をとらえてみるのがより適切であると考えられた。

研究2では、6つの道徳基盤を、より直観的にとらえることが目指された調査票、モラル・ファンデーションズ・ビネット(MFVs)を用いて、その構成概念妥当性について新たな測度から検証した。この調査票では、特に日本人のイメージのしやすさや、日常の情景に合ったシナリオが重要な意味を持つと考えられたことから、原版を改訂した新たな調査票として作成し検証を行った。その結果、最終的にとらえられたのは、Care(weak), Harm & Fairness, Liberty, Loyalty, Sanctityの5つの因子であった。Care(weak)は、特に弱者に対する保護の概念であり、最も古くから道徳的価値としてとらえられてきた基本的要素であるといえる。HarmとFairnessの混合領域は、身体的な保護と公正さの概念を合わせ持つ概念であり、それぞれが独立した因子とはみなされていなかった。これらをあえて一つ概念として説明するならば、Shweder *et al.* (1997)が示した自律(autonomy)の概念に近いのではないかと考えられ、この概念も最も古くから道徳的価値としてとらえられてきた基本的要素の一つであるといえる。Libertyは、道徳基盤理論のなかでも最も新しく提案さ

れた概念であるが、MFVs のなかでは明らかな独立した因子として示されていた。Loyalty は、道徳基盤理論では、Care や Fairness とは異なる上位概念を持つものとして考えられている。広範な集団や社会を対象としたシナリオがあったなかで、とりわけ国家に関するシナリオの多くが Loyalty の概念に明らかな負荷を示していた。その一方で、Authority の領域は、研究 2 の調査全体を通して、さまざまなシナリオを用いて検討したものの、結果として独立した因子として再現されることは一度もなかった。Sanctity でも、幅広い概念を含んだシナリオのなかで、とりわけ性的な異常さに関するシナリオの多くがこの概念に明らかな負荷を示していた。MFVs で最終的にとらえられた、Care (weak) , Autonomy (Harm & Fairness), Liberty, Loyalty, Sanctity の 5 つの因子は、MFQ の Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctity の 5 つの因子ともある程度の相関が認められ、外的基準から説明することもできた。一方、研究 2 で特に目指してきたのは、道徳的判断領域を明確に区別することであり、MFQ ではとらえられなかった 5 つの領域の区分を、MFVs のなかでとらえようとした。そのなかで、もともと因子間相関が高かった因子は、MFVs の構造のなかでも独立した因子として現れてこなかった可能性がある。また、MFVs 作成の過程では、明確な領域の区別を追求するなかで、それぞれの領域を代表するシナリオは、他のシナリオに比べてより高い負荷を示したものが選択されていくため、その対象はより狭くなり、道徳的判断領域の部分的な範囲を説明するような構成になっている可能性があると考えられた。

研究 3 では、さらに、MFQ の Individualizing foundations (Care, Fairness) と Binding foundations (Loyalty, Authority, Santity) の 2 つの上位概念について、道徳基盤理論で主張されている個人の政治的志向（すなわちイデオロギー）との関係性について、日本人を対象に改めて検証し、さらに、個人の独立的／協調的、個人主義／集団主義への志向との関係性について検証した。まず、2 つの上位概念から個人の政治的志向をある程度予測することができたが、その個体差は先行研究で示された米国人の分析結果と比較して小さく、自由主義者（リベラル）も保守主義者も道徳的判断に大きな違いは示さなかった。それは、日本人の道徳的判断におけるそれぞれの道徳基盤への依拠の比重が、米国人ほど極端な違いがないことを意味していた。また、5 つの道徳基盤のなかでも特に Sanctity は、先行研究でとらえられた米国人の傾向とは若干異なり、MFQ1 では、Binding foundations よりも Individualizing foundations に近い傾向をみせ、また、政治的志向にかかわらず、全体的に Sanctity の領域への依拠が高いところにも、米国人とは異なる日本人の特徴が示されていた。一方、2 つの上位概念から、独立的／協調的自己観や、個人主義／集団主義への志向を直接的に説明することはできなかった。日本人は政治的志向にかかわらず、協調的あるいは平等に重きをおく集団主義的な志向を持っており、そのなかで、自由主義者（リベラル）がどちらかといえば平等に重きをおく個人主義を支持し、保守主義者がどちらかといえば階層に重きをおく集団主義を支持しているところに、政治的志向による僅かな違いをみることができた。これらの結果から、Individualizing foundations と Binding foundations という道徳基盤の 2 つの上位概念は、単純な個人志向や集団志向と直接的に対応しているわけではなく、特に日本人においては、Sanctity への依拠の傾向によって示されているように、より内的な、あるいは外的な動機によって説明されうる概念だといえるのではないかと考えられた。

研究 4 では、さらに、それぞれの道徳基盤領域と個体の志向性や傾向性との関係性をとらえていくことを試みた。道徳基盤領域については、研究 1 で Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctity の 5 つの領域について検討し、研究 2 では Care, Autonomy (Harm & Fairness), Liberty, Loyalty, Sanctity の 5 つの領域を提案してきた。なかでも研究 2 では、Care の領域は、弱者 (weak) の保護を主体とし、Loyalty の領域では、国家 (nation) に対する高い関心や、Sanctity の領域でも、性的な異常 (sexual deviance) に対する高い関心が示され、これらによって MFVs の道徳的判断領域としての概念構造が構成された。研究 4 ではこれらの結果にも注目しながら、Care の領域、援助規範意識と道徳基盤の関係、Fairness の領域、公正感受性や正当世界信念と道徳基盤の関係、Loyalty の領域、愛国心／国家主義と道徳基盤の関係、さらに Sanctity の領域にも注目し、嫌悪感情と道徳基盤の関係について検証した。

援助規範意識との関係では、道徳的判断において、弱者救済や互恵的な意識が大きな意味を持っている一方、愛他的・相互交換的な意識はほとんど影響していないということが示された。さらに、これらの意識が、より内的な動機となっていると考えられる *Indivisualizing foundations* とは強く結びついているとみられるものの、社会的な動機に関する *Binding foundations* とはほとんど連関していないとみることができた。

公正への感じやすさ (公正感受性) との関係では、道徳的判断において、加害者の立場として理解する公正への感受性が Care の領域と最も強く結びつき、さらに加害者や第三者の立場での感受性が Fairness や Sanctity の領域への影響を示していたものの、それ以外は、いずれの領域にも明らかな関係性を示していなかった。このことは、加害者の立場での公正感受性は、関係性が深いのではないかと考えられた Fairness の領域よりも、むしろ Care の領域を説明していた。一方で、他の被害者や受益者、第三者の立場での公正感受性は、道徳基盤を説明する因子とはなりえていないということが示されていた。因果応報への認知的傾向 (正当世界信念) との関係についても、Fairness を含むいずれの道徳基盤とも明らかな関係性は示されず、これは、道徳基盤の下位概念でみた場合も同様であった。これらの結果から、公正や正当といった観念に関する個人の志向性・傾向性は、道徳基盤の Fairness の概念とは直接的には連関しておらず、公正への感じやすさがある側面では Care の領域を説明している一方、正当世界への傾向性は特定の道徳基盤の概念を説明するものではないとみなされる。

愛国心／国家主義との関係では、「国家主義」よりも「愛国心」の概念が、Loyalty の概念により近いものとしてとらえられ、Loyalty のなかの幅広い概念を説明するものであることが示されていた。しかし本研究の結果では、いずれも Loyalty のみならず Authority にも同様の関係性を示しており、これらの 2 つの領域が同様のものとしてとらえられていた可能性がうかがえた。さらに、「愛国心」や「国家主義」という、個人のナショナル・アイデンティティーは、Loyalty のなかの特に「歴史 history」の下位概念と深く結びついていた。また、「愛国 love country」や「裏切り betray」の概念とも関係性を示しており、これらが個人のナショナル・アイデンティティーから説明される Loyalty の価値的要素としてみることができた。また、「愛国心」や「国家主義」が Sanctity の領域との結びつきをみせていたことは興味深い結果であった。同様の結果が Koleva *et al.* (2012) でも示されていたことから、個人のアイデンティティーを形成している国家に対する意識が、単に人びとを結

びつけるための概念領域ではなく、より内的な意味を持つ概念領域とも結びついているとみることができた。

嫌悪の感じやすさ（感受性）との関係では、道徳的判断において、嫌悪は異なる複数の道徳基盤領域に影響していた。「中核的嫌悪」は、複数の幅広い道徳基盤領域と関連し、なかでも Sanctity の領域との結びつきが強かったが、「動物性嫌悪」は、Loyalty の領域にのみ、「汚染嫌悪」も、Loyalty と Sanctity の領域のみに関連を示していた。下位概念でも、Loyalty の領域の「忠誠 loyalty」や「チーム team」、Authority の領域の「伝統 traditions」や「尊敬 kids respect」とのより強い関係性が示されていた。そして、それらは、個人的な政治的志向（すなわちイデオロギー）にはほとんど関係なく、一定して道徳的判断に影響を与えている可能性が示唆されていた。この結果からは、想定していたような嫌悪と Sanctity の領域の明確な関係性は示されず、むしろ、Loyalty や Authority の領域との深い連関が示された。これは、日本人において嫌悪の感受性は、汚染から集団を防御し、危険を忌避すること以上に、自らが所属する集団への脅威のために他者と結束することや、有利な協力関係を築くことに、より強い影響を与えている可能性があるともみることができた。

日本人のデータに基づき研究 1 から 4 を通してとらえられてきた、道徳基盤理論に基づく道徳性の構成概念は、先ず注目すべき点として、Care と Fairness の領域の混合と、Loyalty と Authority の混合の問題があった。MFQ の探索的因子分析では、これらはそれぞれが 1 つの因子としてとらえられていた。また、MFVs においても、Care のうちの Harm の側面と Fairness が混合し、Authority の独立した領域は一度もとらえられなかった。Graham *et al.* (2013) でも言及されてきたように、平等さへの関心が他者に対する Care の考え方によって動機づけられている可能性があるとする指摘や、Loyalty と Authority の考え方は、所属する集団に対する関心という 1 つの基盤に基づく部分的な概念としてみることができないかといった疑問があった。そのような議論がなされてきたなかで、本研究の結果もまた、Care と Fairness, Loyalty と Authority の領域の、それぞれが 1 つの基盤に基づいている可能性を示した。Graham *et al.* (2009) では、5 つの道徳基盤の 2 つの上位概念として、Individualising foundations と Binding foundations が説明され、村山・三浦 (2019) でも、この 2 因子による考察が 5 因子による考察よりも信頼性および妥当性が高い可能性があり、より望ましいのではないかと述べられていた。Lewis, Kanai, Bates, & Rees (2012) の神経科学的研究からも、Individualising foundations すなわち Care と Fairness の領域と、Binding foundations すなわち Loyalty, Authority, Sanctity の領域の、2 つの大きな基盤領域に関する問題と、それによって機能している 2 つの異なる脳部位の相関が示されており、これらがそれぞれ 1 つの基盤領域として存在する可能性を裏付けていた。この Individualising foundations と Binding foundations という 2 つの上位概念は、古くから考えられているような物事の大きく 2 つの見方、すなわち、個人と社会という 2 つの重要な側面から道徳性がとらえられていることを意味している。しかし、この 2 つの基盤領域への依拠は、単純な個人志向／集団志向といったものとして説明されるのではなく、それらはより内的な、あるいは外的な動機として説明されうるものであり (青山, 2019b), Graham *et al.* (2013) が説いているように、人びとの行動に方向性をもたらしているイデオロギー (観念形態) として示されるものであろう。

一方、西洋的な哲学の考え方とは異なる、美德倫理 (Graham *et al.*, 2011) に基づく道德性の概念構造として、Shweder *et al.* (1997) が提案した「自律 *Autonomy*」, 「共同体 *Community*」, 「神性 *Divinity*」の3つの倫理がある。この倫理観では、*Care* と *Fairness* は、「危害 *harm*」や「正義 *justice*」を含み、個人の自律を守る「自律 *Autonomy*」の倫理によって、*Loyalty* と *Authority* は、「相互依存 *interdependency*」や「階層 *hierarchy*」を含み、組織や社会秩序を維持する「共同体 *Community*」の倫理によって、そして、*Sanctity* は「自然の秩序 *natural order*」や「神聖さ *sanctity*」を含み、快樂主義者の利己的行動を制御し、人間に生来備わる固有の神性を保護する「神性 *Divinity*」の倫理によって説明されるのではないかと考えられた。本研究のなかでもう一つ注目すべき点としてあげられるのが、*Sanctity* の領域の問題である。探索的因子分析では、先行研究では *Binding foundations* に含まれていた *Sanctity* の領域は、MFQ1 では *Individual foundations* により高い負荷を示し、*Care* や *Fairness* の領域に近い傾向をみせていた。また、先行研究では、自由主義 (リベラル) に低く、保守主義に高いとされていた *Sanctity* の領域への依拠は、日本人においては政治的志向にかかわらず全体的に比較的高い依拠を示しており、これらの傾向は村山・三浦 (2019) でも部分的にみられ、東アジアの人びとに多くみられる傾向であるとする Graham *et al.* (2011) の裏付けともなっているとみなされる。一方、Kim, Kang, & Yun (2012) が韓国人を対象として行った調査からは、5つの因子の傾向は米国人と同様のパターンをみせ、*Sanctity* の領域は *Loyalty* や *Authority* の領域とともに、*Binding foundations* へのより高い負荷を示していた。このことから、東アジアの人びとのあいだでも、*Sanctity* への依拠の傾向には違いがあることができた。また、研究3のなかで行った「最も興味を持つニュース」と道德基盤との関係をとらえる調査 (青山, 2019b) での、「寺社仏閣の文化財の毀損や窃盗」という宗教的に重要な意味を持つ財産を壊したり盗んだりするという *Sanctity* の領域にも関る問題に最も高い関心が寄せられていたことから、日本人のこの領域への依拠の強さというものが示されていた。本研究のなかで、*Care* と *Fairness*, *Loyalty* と *Authority* の大きく2つの領域があることが示されてきたなかで、これらの領域とは異なる *Sanctity* の領域が示されてきたことから、Shweder *et al.* (1997) の3つの倫理の考え方によって、日本人の道德性を説明することができるのではないかと考えられた。

それぞれの道德基盤を、個体の志向性や傾向性との関係からみてみると、*Care* の領域は、援助規範意識の全般から説明されることが示され、また、公正感受性の部分的な側面、なかでも加害者意識から説明されることが示された。*Fairness* の領域は、援助規範意識のなかでも、弱者救済や返済の規範意識から説明されることが示され、また、公正感受性の加害者や第三者、受益者意識から部分的に説明されることが示された。しかし、*Fairness* の領域への依拠は、本研究ではほとんどの場合 *Care* の領域への依拠と随伴しており、平等さへの関心が他者に対する *Care* の考え方によって動機づけられているのではないかとこのこれまでの疑念 (Graham *et al.*, 2013) を裏付けている可能性がうかがえた。*Loyalty* の領域、なかでも「歴史 *history*」の概念が、ナショナル・アイデンティティーによって説明され、また、「忠誠 *loyalty*」や「チーム *team*」の概念が、嫌悪の感受性によっても説明されることが示された。*Authority* も同様に、ナショナル・アイデンティティーによって説明されるとともに、「伝統 *tradition*」や「尊敬 *respect*」といった概念において、嫌悪の感受性から説明されることが示された。ここでも、*Loyalty* と *Authority* は集団に対する関心と

いう1つの基盤に基づく部分的な概念としてみられるのではないかというこれまでの疑念 (Graham *et al.*, 2013) を裏付けている可能性がうかがえた。

これらの検証のなかでは、MFQ とともに MFVs を補助的に用いてきた。援助規範意識との検証では、MFVs は、Care (weak), Harm, Fairness にのみ明らかな相関を示し、逆に、公正感受性との検証ではいずれの領域とも相関は示さなかった。また、ナショナル・アイデンティティとの検証では、Loyalty に相対的に高い相関を示し、嫌悪感情との検証では、Care (weak) と Harm を区別するなど、全体として MFVs のほうが MFQ よりもメリハリのある、より明らかな因子への負荷を示していた。

道徳基盤にはもう一つ、Liberty の領域が仮定されている。Liberty は道徳基盤のなかでも新しく提案された領域であるため、MFQ の概念には含まれておらず、これまでほとんど検証はなされてこなかった。Liberty の概念は、Shweder *et al.* (1997) の3つの倫理のなかでは「自律 autonomy」の倫理に最も近いと考えられるが、MFVs の探索的因子分析では明らかな独立した因子として抽出された。前述の検証では、Liberty の領域は、嫌悪感情のなかでも中核的嫌悪にのみ説明されうるものであった。これは Liberty の概念が、他の傾向性や志向性とは関係性の低いものであったということがいえ、新たに作成した MFVs によって Liberty の概念のさらなる検証が可能になったということが出来る。このことから、MFVs が道徳的判断における道徳基盤領域をより明らかにとらえる調査票として、また、新しい Liberty の領域をとらえる唯一の調査票として有効であるといえるのではないかと考えられた。

これまでの研究を総合して、最終的に示されたのは、Care のなかの弱者 (weak) に関する領域と、Care のなかの危害 (harm) と Fairness の混合である Autonomy の領域、Authority を含む Loyalty の領域、Sanctity の領域、そして、Liberty の領域の5つの領域が、日本人における道徳性の構成概念としてとらえられているのではないかと考えられる。Care と Fairness や、Loyalty と Authority が、一つの基盤に基づいているという議論 (Graham *et al.*, 2013) があるなか、MFQ の検証では、確かに Care, Fairness, Loyalty, Authority, Sanctity の5因子構造が最も適合度が高い概念構造であった。しかし、場面描写からの道徳的判断という異なるアプローチからとらえた MFVs の概念構造は、Care, Autonomy (Harm & Fairness), Liberty, Loyalty, Sanctity という5因子構造であった。そして、これらが現時点でとらえられる日本人における道徳的判断領域であるということが出来るのではないだろうか。

本研究のなかで示された道徳的判断領域の米国人と日本人の違いは、これまでに議論されてきた道徳基盤領域の区分の問題に加え、道徳性が培われている環境、すなわち社会や文化の違いに因って変容する、道徳性の可変性の問題であるともいえる。道徳基盤理論では、道徳基盤というものが、人間の進化的発展のなかで獲得されてきた環境への適応システムであると考えられており、生得的でありながら、特定の文化のなかで発展し、それぞれの文化に特有の姿になっていくと説明されている (Graham *et al.*, 2013)。Shweder *et al.* (1997) の3つの倫理も、西洋とは異なる文化的発展のなかでとらえられた概念構造であった。青山 (2019b) は、日本人は政治的志向にかかわらず、全体として協調的あるいは平等に重きをおく集団主義的な価値体系を志向しており、道徳的判断においても、5つの道徳基盤領域への依拠の比重には大きな差はなかったと報告している。欧米やインドといっ



た国々とは歴史的背景や宗教、民俗が大きく異なる日本においては、他者や社会との関りにおける価値体系も異なっていると考えられ、道徳性においても固有の価値体系が形成されている可能性があると考えられた。

### 研究の限界と今後の課題

本研究は、道徳基盤理論の概念構造についての検討と、それぞれの構成要素の個体の志向性や傾向性との関係についての検討を主たる目的として行ってきた。道徳性の概念構造をとらえるうえで、最も重要な意味を持つのは尺度(調査票)であろう。Graham *et al.* (2011) が作成した MFQ は 5 つの因子のみが想定されており、Clifford *et al.* (2015) が作成した MFVs は 6 つの因子で構成されているものの、Graham *et al.* (2011) のような幅広い下位概念を網羅しているとはいえなかった。本研究のなかで、これらの原版を忠実に翻訳して調査に用いたが、先行研究のような結果は得られず、日本人に適した新たな MFVs を作成したところ、MFQ の構造とは異なる 5 つの因子構造がとらえられた。しかし、この新たな 5 因子構造が、道徳性の構成概念を説明する最終的かつ完全なる構造であるとは考えていない。道徳基盤理論が唱える道徳基盤領域は、非常に広範な下位概念を含有しており、そのすべてを一つの調査票のなかに映し出すことは至難の業である。MFQ はこれを目指し、一方 MFVs は 6 つの概念領域を明らかに区分することに焦点を当ててきた。MFQ の検証では、探索的因子分析では 2 因子しかとらえられなかった構造だが、確認的因子分析では 5 因子構造が最も適合性が高いという結果であった。MFVs の検証では、想定とは異なる新たな 5 因子構造が示された。そして、この新しい構造なかには、先行研究で議論されてきた、Care と Fairness および Loyalty と Authority の混合領域の問題も含まれていた。道徳基盤理論が仮定する複数の道徳基盤領域の構造についてはさまざまな議論があり、結論づけられているわけではない。本研究の結果からも、MFQ と MFVs という異なる調査票によって、異なる構造が示されており、道徳基盤理論の概念構造に関する研究は、今後もさらに精査されていく必要があると考える。

そのなかで、重要なこととしてあげられるのは、道徳基盤理論が唱える道徳基盤の普遍性と可変性の問題であろう。道徳基盤理論では道徳基盤を、道徳的判断において、直観という反応 (Haidt, 2001; Haidt, 2013; ハイト, 2014) をもたらす生得的な精神的構造 (Graham, *et al.*, 2013) として説明している。単なる理論上の概念ではなく、概念の域を超え、それは精神構造として個体に存在していると説いている。一方、MFQ が道徳律の観念的な分類を拡大しているだけなのではないか、といった議論もある (Clifford *et al.*, 2015)。本研究のなかでとらえられた 5 つの因子が、観念的な分類を超え、生得的な精神構造としての道徳基盤と言えるのか。それは心理学的研究を超えた学際研究によって明らかにされる必要があるだろう。本研究のなかで提案した新たな MFVs は、道徳的判断をより直観的に引き出し、道徳性の概念構造をより明らかにとらえ、実体的に説明することを可能にしようのではないかと考えている。これまで人間以外の霊長類や、人間の幼児にみられる行動など生物化学的側面に頼っていた道徳基盤の根拠に関する研究を、日本においても神経科学といった学際領域に広げ、さらに活発になされていくためには、道徳基盤理論の明らかな概念構造を表す調査票が必要であり、新たな MFVs はこのような期待に応えうるものであると考えている。

そして、道徳基盤の可変性に関連しては、本研究のなかで先行研究とは異なる因子構造として示された道徳的判断領域が日本人特有のものであるのか、という問題があげられる。本研究でも、日本人は米国人ほど5つの道徳基盤のそれぞれへの依拠の強さに極端に差がなく、それゆえ個体差も小さいとされ、また、大きな2つの上位概念でも、*Individualizing foundations*（個人の尊厳）と *Binding foundations*（義務などへの拘束）の間に大きな差がなく、このことは、保守主義と自由主義との間の違いも米国人ほど大きな差を示していないという、日本人と米国人の違いが示されていた。米国で作成された MFQ も原版の MFVs も、日本人を対象にした調査では先行研究を再現できず、また、それらの結果を *Shweder et al.* (1997) の3つの倫理に当てはめてみても、構造上の適合はさほど高くなかった。道徳基盤理論では、道徳性は人間がさまざまな世界に適応するうえで可変的にならざるをえないと考えている。本研究の結果からも、日本人特有の道徳性の概念構造があるのではないかと考えられ、研究3の結果をさらに追究していくことで、日本人の観念形態をさらに深く理解することにつながっていくのではないかと考えている。

また、本研究のなかでは、道徳基盤領域の一つ一つについて、既存の尺度を用いて個体の志向性や傾向性といった観点から説明することも試みた。そのなかで、MFQの下位概念がとらえられるようになっていたことは非常に有用であった。5つの道徳基盤領域からとらえられなかった関係性を下位尺度からとらえてみると、想定を超えた領域に深い結びつきを示していた因子もあり、道徳基盤のより詳細な説明を可能にしている。下位概念は質問項目の1項目が1概念を表しているため、ひとつの概念を十分に示しているとはいえないかもしれない。しかし、このような目安によって道徳性の概念を実体的にとらえていくことには大きな意味があると考え<sup>18</sup>。これまで道徳基盤の下位概念からとらえる研究はほとんど行われてきておらず、今後はさらに下位概念との関係性にも注目しながら検討を加えたいと考えている。

---

<sup>18</sup> 道徳教育の現場においても、道徳性というものを実体的にとらえること、すなわち測定できるようになることが期待されている（松尾, 2016）。

## 利益相反の開示について

本論文に関して、開示すべき利益相反の情報はない。

## 謝辞

本論文を作成するにあたりご指導・ご協力を賜りました全ての皆様方に心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 青山美樹 (2016). 道徳的基盤に関する調査票の日本語版の作成と妥当性および信頼性の検討 日本大学大学院総合社会情報研究科修士論文(未公刊).
- 青山美樹 (2018). 道徳とは何か?—その研究の変遷と道徳基盤理論の誕生 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要, *19*, 121-132.
- 青山美樹 (2019a). 道徳性探究への心理学的アプローチ—わが国における道徳性に対する考え方を踏まえて— 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要, *20*, 285-296.
- 青山美樹 (2019b). 日本人の観念形態を探る心理学的アプローチ—道徳基盤理論における道徳性と政治的志向性の考え方に基づいて— 国際情報研究, *16(1)*, 12-23.
- Boehm, C. (1999). *Hierarchy in the forest: The evolution of egalitarian behavior*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (ボーム, C. 斉藤隆央 (訳) (2014). モラルの起源—道徳, 良心, 利他行動はどのように進化したのか 白揚社)
- Clifford, S., Iyengar, V., Cabeza, R., & Sinnott-Armstrong, W. (2015). Moral foundations vignettes: a standardized stimulus database of scenarios based on moral foundations theory. *Behaviour Research and Therapy*, *47*, 1178-1198.
- Davies, C. L., Sibley, C. G., & Liu, J. H. (2014). Confirmatory factor analysis of the Moral Foundations Questionnaire: Independent scale validation in a New Zealand sample. *Social Psychology*, *45*, 431-436.
- DeLoache, J. S., & LoBue, V. (2009). The narrow fellow in the grass: Hunan infants associate snakes and fear. *Developmental Science*, *12(1)*, 201-207.
- De Waal, F. (1982). *Chimpanzee politics: Power and sex among apes*. London: Jonathan Cape. (ドゥ・ヴァール, F. 西田利貞・藤井留美 (訳) (1998). 利己的なサル, 他人を思いやるサル モラルはなぜ生まれたのか 草思社)
- Faulkner, J., Schaller, M., Park, J. H., & Duncan, L. A. (2004). Evolved disease-avoidance mechanisms and contemporary xenophobic attitudes. *Group Processes & Intergroup Relations*, *7*, 333-353.
- Fiske A. P. (1991). *Structures of social life: The four elementary forms of human relations: Communal sharing, authority ranking, equality matching, market pricing*. New York: Free Press.
- Frimer, J. A., Biesanz, J. C., Walker, L. J., & MacKinlay, C. W. (2013). Liberals and conservatives rely on common moral foundations when making moral judgments about influential people. *Journal of Personality and Social Psychology*, *104(6)*, 1040-1059.
- Gert, B. (2005). *Morality: Its nature and justification, revised edition*. New York: Oxford University Press.
- Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Cambridge: Harvard Univ. Press. (岩男寿美子 (監訳) (1986). もうひとつの声—男女の道徳観の違いと女性のアイデンティティ 川島書店)

- Graham, J., & Haidt, J. (2012). Sacred values and evil adversaries: A moral foundations approach. In P. Shaver & M. Mikulincer (Eds.), *The social psychology of morality: Exploring the causes of good and evil* (pp.11-13). New York: APA Books.
- Graham, J., Haidt, J., & Nosek, B. A. (2009). Liberals and conservatives rely on different sets of moral foundations. *Journal of Personality and Social Psychology*, *96*, 1029-1046.
- Graham, J., Nosek, B. A., Haidt, J., Iyer, R., Koleva, S., & Ditto, P. H. (2011). Mapping the moral domain. *Journal of Personality and Social Psychology*, *101*(2), 366-385.
- Graham, J., Haidt, J., Koleva, S., Motyl, M., Iyer, R., Wojcik, S. P., & Ditto, P. (2013). Moral foundations theory: The pragmatic validity of moral pluralism. *Advances in Experimental Social Psychology*, *47*, 55-130.
- Haidt, J. (2001). The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgement. *Psychological Review*, *108*, 814-834.
- Haidt, J. (2012). *The righteous mind: Why good people are divided by politics and religion*. Vintage ISBN: 978-0-307-45577-2, (p.528).  
(ハイト, J. 高橋 洋(訳) (2014). 社会はなぜ左と右にわかれるのか 対立を超えるための道徳心理学 紀伊國屋書店)
- Haidt, J., & Bjorklund, F. (2008). Social intuitionists answer six questions about moral psychology. In W. Sinnott-Armstrong (Ed.), *Moral Psychology, Volume 2: The cognitive science of morality: Intuition and diversity* (pp.181-217). Cambridge, MA: MIT Press.
- Haidt, J., & Hersh, M. (2001). Sexual morality: The cultures and emotions of conservatives and liberals. *Journal of Applied Social Psychology*, *31*, 191-221.
- Haidt, J., & Kesebir, S. (2010). Morality. In S. T. Fiske, D. Gilbert & G. Lindzey (Eds.), *Handbook of Social Psychology, 5th Edition* (pp.797-832). Hoboken, NJ: Wiley.
- Haidt, J., Koller, S., & Dias, M. (1993). Affect, culture, and morality, or is it wrong to eat your dog? *Journal of Personality and Social Psychology*, *65*, 613-628.
- Haidt, J., McCauley, C., & Rozin, P. (1994). Individual differences in sensitivity to disgust: A scale sampling seven domains of disgust elicitors. *Personality and Individual Differences*, *16*, 701-713.
- 箱井英寿・高木修 (1987). 援助規範意識の性別, 年代, および, 世代間の比較 社会心理学研究, *3*, 39-47.
- 長谷川真里 (2018). 子どもは善悪をどのように理解するのか?—道徳性発達の探究—ちとせプレス
- Hume, D. (1960). *An enquiry concerning the principles of morals*. La Salle, IL: Open Court. (渡部峻明訳 (1993). 道徳原理の研究 哲書房)
- Hume, D. (1969). *A treatise of human nature*. London: Penguin. (木曾好能訳 (1995-2012). 人間本性論 法政大学出版局)
- Inbar, Y., Pizarro, D. A., & Bloom, P. (2009). Conservatives are more easily disgusted than liberals. *Cognition and Emotion*, *23*, 714-725.
- 岩佐和典・田中恒彦・山田祐 (2018). 日本語版嫌悪尺度 (DS-R-J) の因子構造, 信頼性, 妥当性の検討 心理学研究, *89*, 82-92.

- Jensen, L. A. (1998). Moral divisions within countries between orthodoxy and progressivism: India and the United States. *Journal for the Scientific Study of Religion*, 37, 90-107.
- 金井良太 (2015). 脳に刻まれたモラルの起源—人はなぜ善を求めるのか—岩波書店
- 唐沢穰 (1994). 日本人の国民意識の構造とその影響—日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 246-247.
- Kim, K. R., Kang, J., & Yun, S. (2012). Moral intuitions and political orientation: Similarities and differences between Korea and the United States. *Psychological Reports*, 111, 173-185.
- 北村英哉 (2019). 責任帰属に及ぼす道徳基盤と公正世界信念の影響—東洋大学社会学部紀要, 56(2), 39-48.
- Kohlberg, L. (1969). Stage and sequence: The cognitive-developmental approach to socialization. In Goslin, D. (Ed.), *Handbook of socialization theory and research*. Chicago: Rand McNally.
- Kohlberg, L. (1971). From is to ought. In Mischel, T. (Ed.), *Cognitive development and epistemology*. New York: Academic Press.
- Kohlberg, L. (1976). Moral stages and moralization: The cognitive-developmental. In T. Lickona (Ed.), *Moral development and behavior: Theory, research and social issues*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Koleva, S., Graham, J., Iyer, Y., Ditto, P.H., & Haidt, J. (2012) Tracing the threads: How five moral concerns (especially Purity) help explain culture war attitudes. *Journal of Research in Personality*, 46(2), 184-194.
- 今野裕之・堀洋道 (1998). 正当世界信念が社会状況の不公正判断に及ぼす影響について—筑波大学心理学研究, 20, 157-162.
- Kosterman, R., & Feshbach, S. (1989). Toward a measure of patriotic and nationalistic attitudes. *Political Psychology*, 10(2), 257-274.
- Larue, G. A. (1991). Ancient ethics. In P. Singer (Ed.), *A companion to ethics* (pp.29-40). Malden, MA: Blackwell.
- Lewis, G., Kanai, R., Bates, T. & Rees, G. (2012). Moral values are associated with individual differences in regional brain volume. *Journal of Cognitive Neuroscience*, 24, 1657-1663.
- Marcus, G. (2004). *The birth of the mind* (p.34,40). New York: Basic.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 松尾直博 (2016). 道徳性と道徳教育に関する心理学的研究の展望—新しい時代の道徳教育に向けて—教育心理学年報, 55, 165-182.
- 村山綾・三浦麻子 (2015). 被害者非難と加害者の非人間化—2種類の公正世界信念との関連—心理学研究, 86, 1-9.
- 村山綾・三浦麻子 (2019). 日本語版道徳基盤尺度の妥当性の検証—イデオロギーとの関係を通して—心理学研究, 90(2), 156-166.
- Navarrete, C. D., & Fessler, D. M. T. (2006). Disease avoidance and ethnocentrism: The effects of disease vulnerability and disgust sensitivity on intergroup attitudes. *Evolution and Human Behavior*, 27, 270-282.

- Nilsson, A., & Erlandsson, A. (2015). The Moral Foundations taxonomy: Structural validity and relation to political ideology in Sweden. *Personality and Individual Differences, 76*, 28-32.
- Oaten, M., Stevenson, R. J., & Case, T. I. (2009). Disgust as a disease avoidance mechanism. *Psychological Bulletin, 135*, 303-321.
- 大橋理枝 (2007). 縦型/横型一人主義/集団主義の性差・地域差・年齢差について: 放送大学生の場合 放送大学研究年報, 24, 93-100.
- Olatunji, B. O., Haidt, J., McKay, D., & David, B. (2008). Core, animal reminder, and contamination disgust: Three kinds of disgust with distinct personality, behavioral, physiological, and clinical correlates. *Journal of Research in Personality, 42*, 1243-1259.
- Olatunji, B. O., Williams, N. L., Tolin, D. F., Abramowitz, J. S., Sawchuk, C. N., Lohr, J. M., & Elwood, L. S. (2007). The disgust scale: Item analysis, factor structure, and suggestions for refinement. *Psychological Assessment, 19*, 281-297.
- Pincoffs, E. L. (1986). *Quandaries and virtues: Against reductivism in ethics*. Lawrence, Kansas: University of Kansas.
- Pinker, S. (1997). *How the mind works*. New York: Norton.
- Rozin, P., Haidt, J., & McCauley, C. R. (2008). Disgust. In M. Lewis & J. M. Haviland-Jones (Eds.), *Handbook of emotions 2<sup>nd</sup> ed.*, (pp.637-653).
- Schmitt, M., Baumert, A., Gollwitzer, M., & Maes, J. (2010). The Justice Sensitivity Inventory: Factorial validity, location in the personality facet space, demographic pattern, and normative data. *Social Justice Research, 23*, 211-238.
- Schwartz, S. H. (2007). Universalism values and the inclusiveness of our moral universe. *Journal of Cross-Cultural Psychology, 38*, 711-728.
- Shweder, R. A., Mahapatra, M., & Miller, J. (1987). Culture and moral development. In J. Kagan & S. Lamb (Eds.), *The emergence of morality in young children* (pp.1-83). Chicago: University of Chicago Press.
- Shweder, R. A., Much, N. C., Mahapatra, M., & Park, L. (1997). The “Big Three” of morality (autonomy, community, and divinity) and the “Big Three” explanations of suffering. In A. Brandt & P. Rozin (Eds.), *Morality and health* (pp.119-167). New York, NY: Routledge.
- Singer, P. (1979). *Practical ethics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber, D. (2005). Modularity and relevance: How can a massively modular mind be flexible and context-sensitive? In P. Carruthers, S. Laurence, & S. P. Stich (Eds.), *The innate mind: Structure and contents*, (Volume 1, pp.53-68). New York: Oxford University.
- Steiger, R. L. & Reyna, C. (2017). Trait contempt, anger, disgust, and moral foundation values. *Personality and Individual Differences, 113*, 125-135.
- ターン有加里ジェシカ・橋本剛明・シュミット マンフレッド・唐沢かおり (2019). 公正感受性尺度日本語版 (JSI-J) の作成 心理学研究, 90(5), 503-512.
- 高田利武 (2000). 相互独立的-相互協調的自己観尺度に就いて 奈良大学総合研究所報, 8, 145-163.
- 富岡比呂子 (2017). 日本人学生の老化と高齢者に対する態度-老化への不安と自己効力感との関連- 創価大学教育学論集, 69, 61-79.



- Tooby, J., & Cosmides, L. (1992). The psychological foundations of culture. In J. J. Barkow, L. Cosmides & J. Tooby (Eds.), *The adapted mind: Evolutionary psychology and the generation of culture* (pp.19-136). New York: Oxford.
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism & collectivism*. Boulder, CO: Westview Press.
- Triandis, H. C. (1996). The psychological measurement of cultural syndromes. *American Psychologist*, *51*, 407-415.
- Triandis, H. C., & Gelfand, M. J. (1998). Converging measurement of horizontal and vertical individualism and collectivism. *Journal of Personality and Social Psychology*, *74*(1), 118-128.
- Turiel, E. (1983). *The development of social knowledge: Morality and convention*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Turiel, E., Hildebrandt, C., & Wainryb, C. (1991). Judging social issues: Difficulties, inconsistencies, and consistencies. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, *56*, 1-103.
- Tybur, J. M., Lieberman, D., & Griskevicius, V. (2009). Microbes, mating, and morality: Individual differences in three functional domains of disgust. *Journal of Personality and Social Psychology*, *97*, 103-122.
- Van Leeuwen, F., Park, J. H., Koenig, B. L., & Graham, J. (2012). Regional variation in pathogen predicts endorsement of group-focused moral concerns. *Evolution and Human Behavior*, *33*, 429-437.
- Van Leeuwen, F., Dukes, A., Tybur, J. M., & Park, J. H. (2017). Disgust sensitivity relates to moral foundations independent of political ideology. *Evolutionary Behavioral Sciences*, *11*, 92-98.
- Yilmaz, O., Harma, M., Bahcekapili, H. G., & Cesur, S. (2016). Validation of the Moral Foundations Questionnaire in Turkey and its relation to cultural schemas of individualism and collectivism. *Personality and Individual Differences*, *99*, 149-154.

付録1 日本語版モラル・ファンデーションズ・クエスチョネア (MFQ)

第一部 道徳的判断の基準(MFQ1)

Q1	Care	誰かが精神的に傷ついたかどうか
Q2	Care	弱い人や傷つきやすい人に対する配慮があったかどうか
Q3	Care	その人が残虐であったかどうか
Q4	Fairness	一部の人々が他とは違う扱いを受けていたかどうか
Q5	Fairness	不当な行動をとっていたかどうか
Q6	Fairness	誰かの権利がないがしろにされていたかどうか
Q7	Loyalty	行動に自国への愛があったかどうか
Q8	Loyalty	自分の所属するグループに対する裏切り行為があったかどうか
Q9	Loyalty	その人の行動が忠誠心に欠けていたかどうか
Q10	Authority	権威に対する敬意が欠落していたかどうか
Q11	Authority	社会の伝統的なしきたりに従っていたかどうか
Q12	Authority	ある行動によって、無秩序や混乱が生じたかどうか
Q13	Sanctity	純粋さや品位の一般的基準に違反しているかどうか
Q14	Sanctity	嫌悪をもよおすようなことをしたかどうか
Q15	Sanctity	天罰が下るような行動だったかどうか

第二部 道徳原理への是認(MFQ2)

Q16	Care	苦しんでいる人や困っている人への思いやりの念とは最大の美徳である
Q17	Care	無防備な動物を傷つけることは、人間として最低な行動だ
Q18	Care	人間を殺すことは、どのような状況においても正当化できない
Q19	Fairness	政府が法律を作る際、一番重要視されるべきことは、すべての人が公平な扱いをうけることだ
Q20	Fairness	正義とは社会にとって、必要とされる大切なものだ
Q21	Fairness	裕福な家庭に生まれた子どもが、たくさんのお金を相続し、貧乏な家庭の子どもは何も相続しないというのは、道義に反すると思う
Q22	Loyalty	私は自分の国の歴史を誇りに思う
Q23	Loyalty	たとえ家族の誰かが間違いを犯したとしても、家族を大切にす気持ちを持ち続けるべきだ
Q24	Loyalty	自己表現することよりも、チームプレイヤーとして働くことの方が重要である
Q25	Authority	子どもたちは皆、権威を敬うことの大切さを教わるべきだ
Q26	Authority	男性と女性には、それぞれ社会の中で異なる役割がある
Q27	Authority	もし私が兵士ならば、上官の命令に納得がいなくても、それは自分の義務であるのだから、その命令に従うだろう
Q28	Sanctity	たとえ誰も傷つかないとしても、不快極まるような行動をとるべきではない
Q29	Sanctity	自然の摂理に反するような行動は間違っている
Q30	Sanctity	貞節は重要で価値のある道徳的美点である

付録2 研究2・調査4・5で用いた日本語版モラル・ファンデーションズ・ビネット(MFVs)

v1	Care (e)	地下鉄ですれ違いざまに腕のない障害者を見てクスクス笑っている若者がいる
v2	Care (e)	学校劇でセリフを忘れてしまった生徒を見て面白がっている少女がいる
v3	Care (e)	ある女性のジーンズ姿がいかにも太って見えるかを声高に評している女性がいる
v4	Care (e)	お見合いデートの相手を見た途端すぐにデートをキャンセルしようとしている男性がいる
v5	Care (e)	ある女性に向かって彼女が飼っている太ったブルドックにそっくりだと言っている少年がいる
v6	Care (e)	友達の父親が清掃作業員だと知って嘲笑している少女がいる
v7	Care (e)	治療で頭髮が抜け落ちた癌患者とすれ違いざまに忍び笑いをしている男性がいる
v8	Care (e)	あの子は不細工なので代表チームのチアリーダーにはなれないと言っている少女がいる
v9	Care (e)	ひどい傷跡のある女性を追い越しざまにジロジロ見ている少女がいる
v10	Care (e)	恋人に振られた弟をからかって楽しんでいる少年がいる
v11	Care (e)	妻に向かって夕食の料理がひどい味だと怒鳴っている男性がいる
v12	Care (e)	ある女性が描いた絵を見てまるで子どもが描いたようだと面と向かって言っている男性がいる
v13	Care (e)	バスの中ででっぷり太った女性の隣に座ることを明らかに避けている女性がいる
v14	Care (e)	ある少年にお兄さんの方がはるかに魅力的だと言っている少女がいる
v15	Care (e)	同級生の女の子に向かってあなた体重が増えたのでは？と言っている少女がいる
v16	Care (e)	会社のソフトボール大会で障害を持つ同僚を見て面白がっている男性がいる
v17	Care (p-a)	運転している車の方向を変えて故意に猫を轢こうとしている女性がいる
v18	Care (p-a)	家具を引っ掻いた猫を部屋の向こう側に投げ飛ばしている女性がいる
v19	Care (p-a)	ゴミ箱を漁った飼い犬を屋外の雨の中に置き去りにしている男性がいる
v20	Care (p-a)	牧草地上で草を食べている牛を狙って石を投げつけている少年がいる
v21	Care (p-a)	観客を喜ばせるために芸をするようイルカを棒で突ついている調教師がいる
v22	Care (p-a)	牧場の柵囲いから逃げ出した仔馬を鞭で打ちつけている男性がいる
v23	Care (p-a)	沼地で何度も繰り返してエアガンでカルガモを射っている少女がいる
v24	Care (p-a)	近所の野良猫を殺そうと何度も罾をしかけている少年がいる
v25	Care (p-h)	ある生徒の椅子の上に画びょうを上向きにして置いている少年がいる
v26	Care (p-h)	授業で寝入っていた生徒の手を平定規でたたいている教師がいる
v27	Care (p-h)	学校で悪い成績をとった息子の尻を柄の長いへらでたたいている女性がいる
v28	Fairness	学期末試験の追試で同級生の答案を写している学生がいる
v29	Fairness	マラソン競争に勝つために走路(コース)を外れて近道している走者がいる
v30	Fairness	アパートのペンキの塗り替えで自分の部屋を最初にしてもらおうと家主に賄賂をおくっている入居者がいる
v31	Fairness	相手側の選手からひどい反則を犯されたと見せかけているサッカー選手がいる
v32	Fairness	見知らぬ人たちを相手にしたトランプゲームでいかさまをしている人がいる
v33	Fairness	自分のひいきのチームが勝てるようにわざと誤審をしている審判がいる
v34	Fairness	自分の友人が被告となっている刑事裁判を担当している裁判官がいる
v35	Fairness	その週に何時間働いたか虚偽の申告をしている従業員がいる
v36	Fairness	友人がその店の従業員だったおかげで順番待ちの列の先頭に並んだ少年がいる
v37	Fairness	有休の取得日数について虚偽の申告をしている女性がいる
v38	Fairness	ただその男子生徒が嫌いだという理由で悪い成績をつけている教授がいる

v39	Fairness	自分の家の増築のために税金を使っている政治家がいる
v40	Liberty	自分が所属する政党に鞍替えすべきだと婚約者に言っている男性がいる
v41	Liberty	自分のような民間航空会社のパイロットになるよう息子に要求している父親がいる
v42	Liberty	自分と同じ宗教に改宗しなければならないとガールフレンドに言っている男性がいる
v43	Liberty	息子の友人は全て自分が選ぶと言っている母親がいる
v44	Liberty	自分が承知していない衣類を妻が身に着けることを禁じている男性がいる
v45	Liberty	自分の家族が経営する雑貨店で品物を買うよう従業員に圧力をかけている上司がいる
v46	Liberty	有名なイブニングニュースのキャスターになるよう娘に圧力をかけている女性がいる
v47	Liberty	フード付きトレーナーの着用を禁じようとテレビで先導している著名人がいる
v48	Liberty	娘に大学の医学進学課程に進学するよう強制している母親がいる
v49	Liberty	息子に家族で経営しているレストランの事業を継ぐよう要求している父親がいる
v50	Liberty	信者が鮮やかな色合いの服装で教会に集まることを禁じている牧師がいる
v51	Authority	門限の後に車を出すなという父親の命令を無視している少女がいる
v52	Authority	新しい考え方を説明しようとする教師を繰り返し妨害している少女がいる
v53	Authority	社会人らしい身なりと身だしなみを整えるという規則に従っていないインターン(研修生)がいる
v54	Authority	両親が厳しく命じた門限を無視して夜遅くに帰宅している少女がいる
v55	Authority	人前で上司のアイデアをことごとく批判して台無しにしようとしている従業員がいる
v56	Authority	サッカーの決勝試合の最中に公然と監督を怒鳴りつけている選手がいる
v57	Authority	説教(あるいは講話)の間に携帯電話でこっそりスポーツ観戦している男性がいる
v58	Authority	父親が自分の進学について話しはじめた途端テレビの音量を上げている少年がいる
v59	Authority	クラスの生徒の前で教師に対して口ごたえしている教員アシスタントがいる
v60	Authority	市長が市民に向けて行っているスピーチを大きな話し声で妨害している職員がいる
v61	Authority	説教(あるいは講話)の間ずっとうるさい会話をしている女性グループがいる
v62	Authority	上司から仕事ぶりについて質問されると背を向けて立ち去っていく男性がいる
v63	Authority	午後の授業中に自分の教授は能なしだと言っている学生がいる
v64	Authority	試合中ベンチに来いと言っている監督を無視しているスター選手がいる
v65	Loyalty	自社の昨年の業績がいかにか悪かったかをライバル企業にふざけて話している従業員がいる
v66	Loyalty	試合直後に、勝った相手チームの選手と一緒に勝利を祝っている監督がいる
v67	Loyalty	公の場で国産品はもう一切買わないと言っている元国家公務員がいる
v68	Loyalty	隣り町のほうがはるかに良い町だと言っている町長がいる
v69	Loyalty	国外で日本国民の愚かさについて冗談を言っている在外日本国大使がいる
v70	Loyalty	最大の商売敵の会社で働くために家業を辞めようとしている男性がいる
v71	Loyalty	数学の競技会で他校が勝つことを望んでいると公言している教師がいる
v72	Loyalty	年に一度のOB観戦試合で味方チームにブーイングしているチアリーダーがいる
v73	Loyalty	ライバル校の方がより優れているとテレビで発言している生徒会長がいる
v74	Loyalty	海外の独裁者が日本を非難していることに同意している日本人の人気俳優がいる
v75	Loyalty	試合前の壮行会で対戦相手校の応援歌を歌っている学長がいる
v76	Loyalty	地元の美人コンテストで妻への反対票をこっそり投じている男性がいる
v77	Loyalty	外国人に日本は世界の邪悪勢力だと言っている日本人がいる
v78	Loyalty	ある監督の妻は夫のライバルチームのために焼菓子販売を後援している

v79	Loyalty	日本国籍を公然と放棄しようとしている元大臣がいる
v80	Loyalty	同じ水泳チームの仲間を破り優勝しようとしているライバル国の選手に声援を送っている日本人選手がいる
v81	Sanctity	夕食の料理前の冷凍鶏肉を使って性行為を行っている男性がいる
v82	Sanctity	このバーにいる誰とでもオーラルセックス(口内性交)するとやっている酔っ払いの年配男性がいる
v83	Sanctity	バーで携帯電話を使って動物と性交している人達を鑑賞している男性がいる
v84	Sanctity	最近愛する人を亡くした男性と親密な(性的な)関係を持っている女性がいる
v85	Sanctity	あるゲイバーで一杯おごってくれたら誰とでも性交するとやっている同性愛者の男性がいる
v86	Sanctity	霊安室の死体近くでペパロニ・ピザを食べている従業員がいる
v87	Sanctity	死んだ仲間の肉を食べるという未開の地の種族がいる
v88	Sanctity	女性が捨てた下着をゴミ箱であさっている男性がいる
v89	Sanctity	兄妹として育った養子の兄と実子の妹が盛大な式を挙げて結婚しようとしている
v90	Sanctity	自分の秘書に似たゴム製のダッチワイフ(セックス人形)を注文している独身男性がいる

付録3 研究2・調査6で用いた日本語版 MFVs のシナリオ (90項目)

v1	Care (e-w)	すれ違いざまに腕のない障害者を見てクスクス笑っている人がいる
v2	Care (e-w)	知り合いの父親が清掃作業員だと知って嘲笑している人がいる
v3	Care (e-w)	治療で頭髪が抜け落ちた患者を見て忍び笑いをしている人がいる
v4	Care (e-w)	会社のソフトボール大会で障害を持つ同僚のプレイを見て面白がっている人がいる
v5	* Care (e-w)	子どもに恵まれない女性に向かって「早く子どもを産め」と言っている人がいる
v6	* Care (e-w)	身よりのない子どもを税金で養うことには反対だと言っている人がいる
v7	* Care (e-w)	車椅子に乗っている人に向かって「邪魔だ」と言っている人がいる
v8	* Care (e-w)	目の前で老人が転んだのを見ても知らないふりをして通り過ぎていく人がいる
v9	Care (p-a)	ハンドルを切って道端にいる猫を故意に轢こうとしている人がいる
v10	Care (p-a)	沼地で泳いでいるカルガモをエアガンで射って楽しんでいる人がいる
v11	Care (p-a)	近所に住みついている野良猫を殺そうと何度も罠をしかけている人がいる
v12	* Care (p-a)	自分が飼っている犬に何日も食事を与えず飢えさせている人がいる
v13	* Care (p-a)	自分が飼っている犬同士を戦わせて楽しんでいる人たちがいる
v14	Care (p-a)	家具に引っ掻き傷をつけた猫を隣の部屋まで投げ飛ばしている人がいる
v15	Care (p-a)	イルカを棒で何度も突ついて芸を覚えさせている調教師がいる
v16	Care (p-a)	牧場の柵囲いから逃げ出した仔馬を鞭で激しく打ちつけている人がいる
v17	* Care (p-a)	目が不自由な人を誘導している盲導犬を後ろから蹴りつけている人がいる
v18	* Care (p-a)	水を怖がっている子犬を無理やりプールに投げ入れている人がいる
v19	Care (p-h)	教室でクラスメイトの椅子の上に画びょうを上向きにして置いている学生がいる
v20	* Care (p-h)	食事が運ばれてくるのが遅いという理由でウェイターにコップを投げつけている人がいる
v21	* Care (p-h)	故意にバッターの顔をめがけて野球ボールを投げている選手がいる
v22	* Care (p-h)	アパートの上の階から無差別に通行人に向かって瓶を投げつけている人がいる
v23	* Care (p-h)	道路にワイヤーを仕掛けて自転車で通りがかった人が横転するのを楽しんでいる人がいる
v24	Care (p-h)	学校の成績が悪いと言って息子の頭をたたいている親がいる
v25	* Care (p-h)	邪魔だと言ってよちよち歩きの子どもを蹴飛ばしている若い親がいる
v26	* Care (p-h)	むしゃくしゃすると言って見知らぬ通行人をいきなり殴っている人がいる
v27	* Care (p-h)	嫌がるクラスメイトに無理やりプロセス技を仕掛けて楽しんでいる学生がいる
v28	* Care (p-h)	自分に対して反抗的だと言って妻をたたいている夫がいる
v29	Fairness (d)	期末試験の追試で同級生の答案を写している学生がいる
v30	Fairness (d)	今月の残業時間を実際よりも多く申告している会社員がいる
v31	Fairness (d)	今月取得した有休日数を実際よりも少なく申告している会社員がいる
v32	* Fairness (d)	地域の自治会で集めた会費を無断で自分の買い物に使っている人がいる
v33	* Fairness (d)	バスを降りるとき乗車運賃を支払わずに走って逃げていく人がいる
v34	* Fairness (d)	ギャンブルに勝って大金を儲けたのに申告せずに税金を払っていない人がいる
v35	Fairness (e)	マラソン大会でコース(走路)から外れて近道している走者がいる
v36	Fairness (e)	自分がひいきにしているチームが勝てるようにわざと誤審をしている審判がいる
v37	Fairness (e)	ただその生徒が嫌いだという理由で低い評価をつけている先生がいる
v38	Fairness (e)	自分の家の増築のために税金を使っている政治家がいる

v39	*	Fairness (e)	自分が働いている店の品物を知り合いにだけこっそり安く販売している店員がいる
v40	*	Fairness (e)	震災時に市民に配られるはずの水を大量に自宅に持ち帰っている役所の職員がいる
v41		Liberty	自分が所属する政党に鞍替えするよう婚約者に求めている人がある
v42		Liberty	有名なニュース番組のキャスターになるよう子どもに圧力をかけている親がいる
v43		Liberty	大学の医学部に進学するよう子どもに強制している親がいる
v44	*	Liberty	自分の理想とするパートナーになるよう婚約者に言い聞かせている人がある
v45	*	Liberty	幸せになりたければ自分が信仰している宗教に入信しなければならないと言っている宗教家がいる
v46	*	Liberty	友だちならば親を裏切っても私たちのグループの掟に従うべきだと言っている友人がいる
v47	*	Liberty	たとえ間違っていたとしても会社の方針には絶対に従わなければならないと言っている社長がいる
v48	*	Liberty	たとえ理不尽であっても卒業したければ自分の言うとおりにしなければならないと言っている大学教授がいる
v49		Authority	門限を過ぎたら出かけるなど言っている親を無視して遊びに行こうとしている子どもがいる
v50		Authority	社会人らしい身なりをするという規則に従っていないインターン(研修生)がいる
v51		Authority	試合中ベンチに戻って来いと言っている監督を無視しているスター選手がいる
v52	*	Authority	報告書を提出するよう上司から何度も言われているのに聞こえないふりをしている部下がいる
v53	*	Authority	医師からの指示を無視して自分勝手に患者の処置をしている看護師がいる
v54	*	Authority	裁判所から呼出状が送られてきたのにずっと無視し続けている人がある
v55	*	Authority	警察から事情聴取を求められているのに拒否し続けている人がある
v56	*	Authority	古くから地域に伝わる祭りごとを長老らの意見を尊重せずに勝手に行っている若者がいる
v57		Loyalty (n-n)	自分のチームが試合で負けた直後に勝った相手チームの選手と一緒に勝利を祝っている監督がいる
v58		Loyalty (n-n)	数学の全国競技大会で他校が勝つことを望んでいると公言している教師がいる
v59		Loyalty (n-n)	野球の試合前の壮行会で対戦相手の学校の応援歌を歌っている学長がいる
v60	*	Loyalty (n-n)	自治会で決められたゴミ出しのルールを守らず迷惑をかけている住民がいる
v61	*	Loyalty (n-n)	災害があったときには互いに助け合うべきだと言っている人をあざ笑っている人がある
v62	*	Loyalty (n-n)	職場の同じチームの同僚が仕事で助けを求めているのに自分には関係ないと無視している人がある
v63		Loyalty (n)	海外で日本国民の愚かさについて冗談を言っている日本人の大使がいる
v64		Loyalty (n)	外国人に日本は世界の邪悪勢力だと言っている日本人がいる
v65	*	Loyalty (n)	インターネットで日本人を辱めるような作り話を発信している日本人がいる
v66	*	Loyalty (n)	大災害が起きて多くの日本人が苦しんでいるのに自分には関係ないと言っている日本人がいる
v67	*	Loyalty (n)	世界では人口が増え続けているのだから日本人が一人もいなくなってもよいと言っている日本人がいる

v68	*	Loyalty (n)	日本人よりも他国民の幸せのために働くと言っている日本人の外交官がいる
v69		Sanctity (s)	夕食の料理前の冷凍鶏肉を使って性行為をしている男性がいる
v70		Sanctity (s)	このバーにいる誰とでもオーラルセックス(口内性交)できると言っている酔っ払いがいる
v71		Sanctity (s)	インターネットで動物と性交している人達を鑑賞して楽しんでいる人がある
v72	*	Sanctity (s)	複数の中年男女が入り乱れた乱交ビデオを見て興奮している人がある
v73	*	Sanctity (s)	小さな子どもとのセックスをいつも夢見ていると言っている中年男性がいる
v74	*	Sanctity (s)	動物が死んでいくときに強い性的興奮を覚えると言っている人がある
v75	*	Sanctity (n-s)	電車の中で隣に座った人が咳をしたらすぐに遠くの離れた席に移動した人がある
v76	*	Sanctity (n-s)	初めて会った外国人と握手した後すぐに石鹸で手を洗っている人がある
v77	*	Sanctity (n-s)	昔からの地域の言い伝えで立ち入ってはいけないという場所に立ち入っている人がある
v78	*	Sanctity (n-s)	古来人びとの信仰の祈りの場であったところに汚物をまき散らしている人がある
v79	*	Sanctity (n-s)	信仰する人びとによって守られてきた歴史的建造物にペンキで落書きをしている人がある
v80	*	Sanctity (n-s)	昔から食べてはいけないと言われていた人間の肉をこっそり食べている人がある
v81	*	Social Norms	新しい電話を購入することを拒否して古いダイヤル式電話を使っている人がある
v82	*	Social Norms	素晴らしく晴れ渡った日にブラインド(窓の覆い)を下ろして暗い部屋に閉じ籠っている人がある
v83	*	Social Norms	カップ一杯に入ったコーヒーを小さなスプーンを使って飲んでいる人がある
v84	*	Social Norms	メインディッシュ(主菜)がテーブルに運ばれてくる前にデザートを食べている人がある
v85	*	Social Norms	大きな日除け帽子をアパートの中でも被り続けている人がある
v86	*	Social Norms	立派なビジネススーツを着たまますポーツジムでダンベル(鉄アレイ)を上げている人がある
v87	*	Social Norms	サングラスをかけたまま暗い廊下を歩いて来る人がある
v88	*	Social Norms	カラーではなく白黒テレビでスポーツの試合を見ている人がある
v89	*	Social Norms	スパイ小説を最初からではなく結末から読んでいる人がある
v90	*	Social Norms	“こんにちは”という代わりに“さようなら”と言って電話に出ている人がある

注: \*は追加項目



付録4 研究2・調査7で用いた日本語版 MFVs のシナリオ (45 項目)

v1	Care (e-w)	すれ違いざまに腕のない障害者を見てクスクス笑っている人がいる
v2	* Care (e-w)	知り合いの父親が清掃作業員だと知って嘲笑している人がいる
v3	Care (e-w)	治療で頭髪が抜け落ちた患者を見て忍び笑いをしている人がいる
v4	Care (e-w)	会社のソフトボール大会で障害を持つ同僚のプレイを見て面白がっている人がいる
v5	* Care (e-w)	車椅子に乗っている人に向かって「邪魔だ」と言っている人がいる
v6	* Care (p-a)	沼地で泳いでいるカルガモをエアガンで射って楽しんでいる人がいる
v7	Care (p-a)	近所に住みついている野良猫を殺そうと何度も罾をしかけている人がいる
v8	* Care (p-a)	自分が飼っている犬に何日も食事を与えず飢えさせている人がいる
v9	* Care (p-a)	家具に引っ掻き傷をつけた猫を隣の部屋まで投げ飛ばしている人がいる
v10	Care (p-a)	牧場の柵囲いから逃げ出した仔馬を鞭で激しく打ちつけている人がいる
v11	Care (p-h)	教室でクラスメイトの椅子の上に画びょうを上向きにして置いている学生がいる
v12	Care (p-h)	食事が運ばれてくるのが遅いという理由でウェイターにコップを投げつけている人がいる
v13	Care (p-h)	アパートの上の階から無差別に通行人に向かって瓶を投げつけている人がいる
v14	Care (p-h)	道路にワイヤーを仕掛けて自転車を通りがかった人が横転するのを楽しんでいる人がいる
v15	Care (p-h)	邪魔だと言ってよちよち歩きの子どもを蹴飛ばしている若い親がいる
v16	Care (p-h)	むしゃくしゃすると言って見知らぬ通行人をいきなり殴っている人がいる
v17	Care (p-h)	嫌がるクラスメイトに無理やりプロレス技を仕掛けて楽しんでいる学生がいる
v18	Care (p-h)	自分に対して反抗的だと言って妻をたたいている夫がいる
v19	* Fairness	期末試験の追試で同級生の答案を写している学生がいる
v20	* Fairness	マラソン大会でコース(走路)から外れて近道している走者がいる
v21	Fairness	自分がひいきにしているチームが勝てるようにわざと誤審をしている審判がいる
v22	Fairness	自分の家の増築のために税金を使っている政治家がいる
v23	Fairness	地域の自治会で集めた会費を無断で自分の買い物に使っている人がいる
v24	Fairness	バスを降りるとき乗車運賃を支払わずに走って逃げていく人がいる
v25	* Liberty	自分が所属する政党に鞍替えするよう婚約者に求めている人がいる
v26	* Liberty	自分のような民間航空会社のパイロットになるよう息子に要求している父親がいる
v27	Liberty	有名なニュース番組のキャスターになるよう子どもに圧力をかけている親がいる
v28	Liberty	大学の医学部に進学するよう子どもに強制している親がいる
v29	* Liberty	自分の理想とするパートナーになるよう婚約者に言い聞かせている人がいる
v30	* Authority	医師からの指示を無視して自分勝手に患者の処置をしている看護師がいる
v31	* Authority	裁判所から呼出状が送られてきたのにずっと無視し続けている人がいる
v32	* Authority	自治会で決められたことを全く無視して従わない住民がいる
v33	* Authority	昔から人びとが大切にしてきた集会の場所に汚物をまき散らしている人がいる
v34	* Authority	人びとによって守られてきた歴史的建造物にペンキで落書きをしている人がいる
v35	Loyalty	数学の全国競技大会で他校が勝つことを望んでいると公言している教師がいる
v36	Loyalty	野球の試合前の壮行会で対戦相手の学校の応援歌を歌っている学長がいる
v37	Loyalty	海外で日本国民の愚かさについて冗談を言っている日本人の大使がいる
v38	Loyalty	外国人に日本は世界の邪悪勢力だと言っている日本人がいる

v39	Loyalty	インターネットで日本人を辱めるような作り話を発信している日本人がいる
v40	Loyalty	日本人よりも他国民の幸せのために働くと言っている日本人の外交官がいる
v41	Sanctity	夕食の料理前の冷凍鶏肉を使って性行為をしている男性がいる
v42	Sanctity	インターネットで動物と性交している人達を鑑賞して楽しんでいる人がある
v43	* Sanctity	複数の中年男女が入り乱れた乱交ビデオを見て興奮している人がある
v44	Sanctity	動物が死んでいくときに強い性的興奮を覚えると言っている人がある
v45	Sanctity	昔から食べてはいけないと言われていた人間の肉をこっそり食べている人がある

注: \*は追加項目

付録5 日本語版 MFVs のシナリオ（最終版）

Care	すれ違いざまに腕のない障害者を見てクスクス笑っている人がいる
Care	知り合いの父親が清掃作業員だと知って嘲笑している人がいる
Care	治療で頭髪が抜け落ちた患者を見て忍び笑いをしている人がいる
Care	会社のソフトボール大会で障害を持つ同僚のプレイを見て面白がっている人がいる
* Care	車椅子に乗っている人に向かって「邪魔だ」と言っている人がいる
* Harm	食事が運ばれてくるのが遅いという理由でウェイターにコップを投げつけている人がいる
* Harm	アパートの上の階から無差別に歩行者に向かって瓶を投げつけている人がいる
* Harm	道路にワイヤーを仕掛けて自転車で通りがかった人が横転するのを楽しんでいる人がいる
* Harm	邪魔だと言ってよちよち歩きの子どもの足を蹴飛ばしている若い親がいる
* Harm	むしゃくしゃすると言って見知らぬ歩行者をいきなり殴っている人がいる
Fairness	自分がひいきにしているチームが勝てるようにわざと誤審をしている審判がいる
Fairness	自分の家の増築のために税金を使っている政治家がいる
* Fairness	地域の自治会で集めた会費を無断で自分の買い物に使っている人がいる
* Fairness	バスを降りるとき乗車運賃を支払わずに走って逃げていく人がいる
Liberty	自分が所属する政党に鞍替えするよう婚約者に求めている人がいる
Liberty	自分のような民間航空会社のパイロットになるよう息子に要求している父親がいる
Liberty	有名なニュース番組のキャスターになるよう子どもに圧力をかけている親がいる
Liberty	大学の医学部に進学するよう子どもに強制している親がいる
* Liberty	自分の理想とするパートナーになるよう婚約者に言い聞かせている人がいる
Loyalty	数学の全国競技大会で他校が勝つことを望んでいると公言している教師がいる
Loyalty	海外で日本国民の愚かさについて冗談を言っている日本人の大使がいる
Loyalty	外国人に日本は世界の邪悪勢力だと言っている日本人がいる
* Loyalty	インターネットで日本人を辱めるような作り話を発信している日本人がいる
* Loyalty	日本人よりも他国民の幸せのために働くと言っている日本人の外交官がいる
Sanctity	夕食の料理前の冷凍鶏肉を使って性行為をしている男性がいる
Sanctity	インターネットで動物と性交している人達を鑑賞して楽しんでいる人がいる
* Sanctity	動物が死んでいくときに強い性的興奮を覚えると言っている人がいる
Sanctity	昔から食べてはいけないと言われていた人間の肉をこっそり食べている人がいる

注: \*は追加項目

付録6 相互独立的—相互協調的自己観尺度

Q1	(相互協調性)	人が自分をどう思っているかを気にする
Q2	(相互独立性)	自分がよいと思うなら、他人が自分の考えをどう思おうと気にしない
Q3	(相互協調性)	相手は自分のことをどう評価しているかと、他人の視線が気になる
Q4	(相互独立性)	自分の周りの人が異なった考えを持っていても、自分の信じる場所を守り通す
Q5	(相互協調性)	自分がどう感じるかは、自分が一緒にいる人や、自分のいる状況によって決まる
Q6	(相互協調性)	自分の所属集団の仲間と意見が対立することを避ける
Q7	(相互独立性)	自分の意見をいつもはっきり言う
Q8	(相互協調性)	人と意見が対立したとき、相手の意見を受け入れることが多い
Q9	(相互独立性)	いつも自信をもって発言し、行動している
Q10	(相互協調性)	相手やその場の状況によって、自分の態度や行動を変えることがある

付録7 縦型／横型—集団主義・個人主義尺度

Q1	(横型個人主義)	私は他人よりも、むしろ自分自身を頼りにしている
Q2	(横型個人主義)	私はたいてい自分自身の判断に頼り、めったに他人に頼ることはない
Q3	(横型個人主義)	私はだいたい他人がどう思おうと、自分の思うように行動する
Q4	(横型個人主義)	他人から自立していることが、私の個人的なアイデンティティにおいてとても重要である
Q5	(縦型個人主義)	他人よりも仕事ができることは、私にとって重要なことである
Q6	(縦型個人主義)	勝つことがすべてである
Q7	(縦型個人主義)	競争は自然の摂理である
Q8	(縦型個人主義)	他人が自分よりもうまく物事をなし遂げると、気持ちがピリピリしたりムカムカしたりする
Q9	(横型集団主義)	もし同僚(友人)が表彰されたら、私はそれを誇りに思う
Q10	(横型集団主義)	同僚(友人)の幸せは私にとっても重要なことである
Q11	(横型集団主義)	私にとって喜びとは、自分以外の誰かと一緒に時を過ごすことである
Q12	(横型集団主義)	他人と協力し合うと気持ちがよい
Q13	(縦型集団主義)	両親と子どもは、可能な限り一緒に暮らすべきである
Q14	(縦型集団主義)	家族を大事にすることは、たとえ自分のやりたいことを犠牲にするようなことがあっても、すべき家族の義務である
Q15	(縦型集団主義)	家族は、たとえどんな犠牲が払われようとも、連帯し支え合うべきである
Q16	(縦型集団主義)	自分が所属する社会集団の決定を尊重することは、私にとって重要なことである

付録8 最も興味を持つニュース

1:	Loyalty	カルト教団幹部の死刑執行
2:	Sanctity	LGBT(同性愛者・両性愛者)の婚姻
3:	Liberty	外国に拉致されている被害者
4:	Fairness	医学部合格者の男女比率の調整
5:	Care	父母による乳幼児虐待
6:	Authority	憲法改正と自衛隊の在り方
7:	Sanctity	寺社仏閣の文化財の毀損や窃盗

---

8:	Authority	天皇譲位と新天皇即位
9:	Liberty	スポーツ界におけるパワーハラスメント
10:	Fairness	キャリア官僚の収賄
11:	Loyalty	外国人労働者・難民の受け入れ
12:	Care	老人ホームや病院での介護士・看護師による老人殺人

---

付録 9 援助規範意識尺度

Q1	(返済規範意識)	自分に好意を示してくれたからといって、自分も好意を示してお返しをする必要はない
Q2	(返済規範意識)	人から何かを贈られたら、同じだけお返しをすべきである
Q3	(返済規範意識)	過去において私を助けてくれた人には、一生感謝の念を持ち続けるべきである
Q4	(返済規範意識)	恩人が困っている時には、自分に何があろうと助けるべきである
Q5	(返済規範意識)	人にかけての迷惑は、いかなる犠牲を払っても償うべきである
Q6	(返済規範意識)	以前私を助けてくれた人には、特に親切にすべきである
Q7	(返済規範意識)	人が、私を助けるために何らかの損害を被っているなら、そのことに対し責任を持つべきである
Q8	(返済規範意識)	受けた恩は必ずしも返さなくてもよい
Q9	(返済規範意識)	相手がお返しを期待していないのなら、わざわざお返しをする必要はない
Q10	(自己犠牲規範意識)	救う能力が自分に備わっていない時には、救う努力をしても無駄である
Q11	(自己犠牲規範意識)	人が困っている時には、自分がどんな状況にあろうとも、助けるべきである
Q12	(自己犠牲規範意識)	自分の利益よりも相手の利益を優先して、手助けすべきである
Q13	(自己犠牲規範意識)	自己を犠牲にしてまでも、人を助ける必要はない
Q14	(自己犠牲規範意識)	将来付き合うことのない人なら、困っていても助ける必要はない
Q15	(自己犠牲規範意識)	大勢の人が同じ状況で困っている時、まず以前私を助けてくれたことのある人を一番最初に助けるべきである
Q16	(自己犠牲規範意識)	自分が不利になるのなら、困っている人を助けなくともよい
Q17	(自己犠牲規範意識)	社会の利益よりも、自分の利益を第一に考えるべきである
Q18	(交換規範意識)	人を助ける場合、相手からの感謝や返礼を期待してもよい
Q19	(交換規範意識)	人の好意には甘えてもよい
Q20	(交換規範意識)	犯した罪を償わなくてもよい場合がある
Q21	(交換規範意識)	どんな場合でも、人に迷惑をかけてはいけない
Q22	(交換規範意識)	見返りを期待した援助など、全く価値がない
Q23	(弱者救済規範意識)	しいたげられている人を、まず救うべきだ
Q24	(弱者救済規範意識)	不当な立場で苦しんでいる人は、少しでも助けるべきだ
Q25	(弱者救済規範意識)	困っている人に、自分の持ち物を与えることは当然のことである
Q26	(弱者救済規範意識)	私を頼りにしている人には、親切であるべきだ
Q27	(弱者救済規範意識)	社会的に弱い立場の人には、皆で親切にすべきである
Q28	(弱者救済規範意識)	自分より悪い境遇の人に何かを与えるのは当然のことである
Q29	(弱者救済規範意識)	人は自分を助けてくれた人を傷つけるべきではない

#### 付録 10 公正感受性尺度 (JSI-J) (短縮版)

---

Q1	(被害者)	他の人が不当に私より良い暮らしをしていると、腹が立つ。
Q2	(被害者)	他の人は簡単に得られるものを私は努力なしでは得られないと、思い悩む。
Q3	(第三者)	他の人より不当に苦しい生活を送っている人がいると、落ち着かない気分になる。
Q4	(第三者)	他の人は簡単に得られるものを努力なしでは得られない人がいると、心配になる。
Q5	(受益者)	ふさわしい理由もなく他の人より良い暮らしをしていると、罪悪感を覚える。
Q6	(受益者)	他の人は努力なしでは得られないものを私は簡単に得られると、嫌な気持ちになる。
Q7	(加害者)	他の人を犠牲にして良い暮らしをしてしまうと、罪悪感を覚える。
Q8	(加害者)	他の人は努力なしでは達成できないことを私はズルしてできてしまうと、嫌な気持ちになる。

---

#### 付録 11 公正世界観尺度

---

Q1	この世の中では、努力はいつか報われるようになっている。
Q2	この世の中では、努力や実力が報われない人が数多くいる。
Q3	この世界では、悪いことをしたものは必ずその報いを受ける。
Q4	この世の中では、悪いことや間違っただけをしても見逃される人が数多くいる。

---

付録 12 国民意識（ナショナル・アイデンティティ）尺度

---

- Q1 (愛国心) 物価の安い外国に暮らすのもいいが、少々高くついても日本に暮らしたい。
- Q2 (愛国心) 生まれ変わるとしたら、また日本人に生まれたい。
- Q3 (愛国心) 私は日本という国が好きだ。
- Q4 (愛国心) 私は日本人であることを誇りに思う。
- Q5 (愛国心) 治安の良さから考えて、他の国には住みたくない。
- Q6 (愛国心) 日本にはあまり愛着を持っていない。
- Q7 (愛国心) 日本は世界で一番良い国である。
- 
- Q8 (国家主義) 日本の経済力を考えれば、国連や国際会議における日本の発言権はもっと大きくあるべきだ。
- Q9 (国家主義) 世界の貧しい国の生活水準を上げるために、私たちの生活水準を下げる気にはならない。
- Q10 (国家主義) 日本人は世界でもっともすぐれた民族のひとつである。
- Q11 (国家主義) アジアの将来を決定するうえで、日本は最大の発言権を持つべきである。
- Q12 (国家主義) 日本が戦後に驚異的な成長を遂げたのは、国民の優秀性による。
- Q13 (国家主義) 海外援助をするなら日本の不利益になるような援助はすべきでない。
-



付録 13 改訂嫌悪尺度 (DS-R-J)

Part 1

Q1	動物性嫌悪	科学の授業中、ビン詰めで保存状態にされている人間の手を見ると気持ち悪くなるだろう。
Q2	動物性嫌悪	目からガラス製の眼球を取り出す人がいても、全くうろたえないだろう。(R)
Q3	動物性嫌悪	死体にさわると、強い嫌悪感をおぼえるだろう。
Q4	汚染嫌悪	墓場を避けて通れるように、わざわざ遠回りをするだろう。
Q5	汚染嫌悪	公衆トイレの便座には、身体の一部たりとも触れたくない。
Q6	汚染嫌悪	大好きなレストランでも、コックが風邪をひいていたら、おそらく行かないだろう。
Q7	汚染嫌悪	どんな立派なホテルでも、前日にその部屋で心臓発作によって誰かが亡くなったと知ったら、そこで眠る事によってイヤな気持ちになるだろう。

Part 2

Q8	中核的嫌悪	誰かがバニラアイスの上にケチャップをかけて食べているのを見る。
Q9	中核的嫌悪	牛乳を飲もうとして、腐ったにおいがした。
Q10	中核的嫌悪	屋外に置いてあるゴミ箱の中で、肉の上にウジ虫がいるのを見た。
Q11	中核的嫌悪	コンクリートの上を裸足で歩いていて、ミミズを踏む。
Q12	中核的嫌悪	線路下のトンネルを通るときに、尿のにおいがした。
Q13	中核的嫌悪	友達が週に1回しか下着を替えないと分かった。
Q14	中核的嫌悪	友達が犬の糞の形をしたチョコレートをすすめてきた。
Q15	中核的嫌悪	性教育の授業で、潤滑剤を塗ってある新品のゴム製コンドームを、口で膨らませないといけない。
Q16	動物性嫌悪	事故にあつて腸がはみ出た男性を見た。
Q17	動物性嫌悪	友達が飼っている猫が死んで、あなたはその死体を素手で持たないといけない。
Q18	汚染嫌悪	うっかり、火葬された人の遺灰に触ってしまった。